

研究紀要

第 20 号

(目 次)

論 文

- 民謡と流行歌 海之歌・陸之歌 — 民謡の歌詞、その伝播と定着 —
……木村重利… 1
- 身長3区分にみる体格・体力テストの縦断的研究 ……音海紀一郎… (1)
- 天野貞祐先生著作目録(稿) …………… (11)
-

2001

獨協中学校・高等学校

民謡と流行歌

海の歌・陸の歌

——民謡の歌詞、その伝播と定着

国語科 木村重利

はじめに

今日伝えられている民謡（地方歌）の歌詞の大部分は、七七七五（三四・四三・三四・五）というその詞型も含めて、近世三味線歌謡の流行の結果であつて、それがまず「今日的民謡状況」の第一の特色と言えよう。

民謡は本来、その土地々々における人々の暮らしにかかわつて生まれ、謡い継がれてきたものであつた。とは言え、もとよりヒトの暮らしであるし、海山、平場ひらばたといった地理的条件、そこでの生産生活によつて、生活形態、暮らしへの姿勢に多少の違いはあるものの、基本的には農耕的生活を主体としてきた日本人であつたから、「うた」（ここで問題にする民謡）とか「謡う」ことに対する向き方にそれほど大きな違いはなかつた。加えて、「うた」が儀式・祭り・行事の中で「祝い」とか「祈り」として謡われていた時代から、次第に「情」としての慰安性とか娯楽性を濃くしていき、仕事とか踊

りの場において、「謡つて楽しむ」「聞いて楽しむ」といった時代になつてつれて、地域や種類を越えて「うたの言葉」（文句・歌詞）も律調も共通したものが行なわれるようになった。

特に詞章に関して言えば、民謡の担い手、生活人は、創作家・作家ではなかつたから、耳に届いた詞章に共感すれば、そのまま、あるいは多少手を加えて自分達の「うたの言葉」としたのである。

それは「うた」とか「謡う」ことへの「こだわり」（そのバトキにおいてどうしても発唱しなければ気が済まない、コトが終わらないといったような思い）を薄くした結果、耳に届いて来た他所の歌、都会の流行歌や田舎渡らいの職芸人・稼ぎ人・文人墨客といった人達もたらした（彼等が創作・改作したものも含めて）、面白おかし、多才覚めいている耳新しい文句など、それ自体に「楽しむ気分」を求めめるようになっていったのである。それを可能にし、助長した「謡う側」の事情としていくつかの側面があつたと考えられる。

一つには「謡う機会」（謡う人）が多くなつたことである。ヒトの暮らしが豊かになつてくるにつれて、例えば婚礼などの儀式も、祝宴とか酒盛りといった要素を強くして来るし、そうした賑々しい大振舞いの「歌酒盛り」を行ない得る階層も広がつていったと考えられる。

○さした盃中見てあがれ 中に鶴亀五葉の松

右のめでたい文句は各地のさまざま祝いの席で広く謡い継がれてきたものであるが、これ一つをとつてみても、祝いの盃事に朱塗りの盃（朱塗りに金泥で鶴亀や松竹梅を描いたもの）が持ち出され

ることが前提にあつての波及であり定着であつた。つまり、民謡の担い手の暮らしがそれだけの経済的な豊かき、余裕を持ったことの証なのである。

次には、なぜこれほどに一つの文句が、申し合わせたように広く深く行き渡っているのかということになるが、まず考え得ることは「謡う機会」が多くなつた（謡うトキとバを多く持ったということであり、歌の種類も多くなり、文句も多くなつたということである）のであるが、先述したように民謡の担い手は基本的には作詞家ではなかつた（むろん作曲家でも）ことである。したがつて、何かの折に耳に届いたものを、「なるほど意に叶う」「いかにも面白い」として、自分達の「うた」の文句として受け入れた。その何かの「折」（機会）というのは、地域の個々の行動範囲の広がり（経済活動の広がりなどによつて）やそれに伴つて拡大されていく人と人との交流・接触、それにつれての見聞の広がりによつて増大していく。

具体的には、自らの行動範囲の拡大としては、神参り、寺参りなどの旅（他所への出歩き）があり、一方、他所からムラに入り込んで来る旅の徒（職人・芸人などの渡り稼ぎ人）がいる。そうしたこともかかわつて、人の縁、例えば雇ひ・雇われるという関係や婚姻圏の拡大などによつて人の交流範囲が広がっていく。つまり、人の移動による交流・接触関係の拡大であり、それはそのまま、「うた」の交流・接触であつたと考えていい。いや、「交流」というよりは「摂取」であり、「接触」というよりは新奇なもの・洒落たもの・面白いものとしての「受容」（模倣・借入）であつたと言つた方がい

いかもしれない。

こうした摂取・模倣・借入といったものが各地の「土地の歌」（郷土の歌、民謡）を旋律的にはともかく詞章的に同一・同類のもの、の横溢する状況、言つてみれば、陳腐な状況をつくりあげていったのである。民謡の歌詞が土地や歌の種類を越えて類型化していった大きな要因がその辺にある。

端的に言えば、民謡の担い手が「うたの言葉」に関する限り、原則的には作詞家ではなく、模倣家であつたということである。その結果、「うたの機会」が多くなり、「うたの数」（種類と文句）が多く必要となつたところで、その必要性に見合うだけの文句（歌詞）を自分等の力で用意することは無理であつたし、その無理を何とか克服しようとする前に、他所から届いたり、自らが他所に赴いた折に耳にしたりした「うたの文句」が、結構手近にあつたということである。そういう状況が中世の終わり頃から近世にかけておおいづくられていつて、近世が進み近代へと移るにつれて一層顕著になつていつたことを証明しているのが、「今日の民謡状況」そのものであると言える。

そうしたことを前提に今日の民謡の詞章面を考えることができるとして、大事なものは、「移入」「借入」「模倣」というカタ（型）で自分達の「うたの言葉」を育て謡ひ継いできた「謡い手の心」をさぐることである。借り物であれ模倣であれ、それが言葉である以上、そこに何程かの情感を通わせている、つまり必ずや「自分たちの言葉」「自分たちのうた」としての言語機能を認めていたはずである。

そうでなければ、「謡う興味」は起こらないはずである。

仕事の場合か祝いの場合か踊りの場合か、ともあれ自分達の「うたの場」において自分達の「うたの言葉」として迎え入れたということは、その場における感慨に重ねて、自らの生活・暮らしにおける感慨という側面も加えて、その詞句に共感というか納得というか、妥当性を認めてのことであつたと考えなければ、土地の歌としての「定着」はあり得ない。

そうした言わば流行歌が郷土の歌である民謡の詞句として定着することになる謡う側の納得というものについて、その歌の場なり時というものの中に据えてみる、またそうした場・時は彼等の暮らしそのものと無関係ではあり得ないという観点からその暮らし（生産生活・信仰生活）とも関連させていく中で、今日まで受け継がれて来た民謡の詞章の一つの問題点を明確にしながらか考察を加えてみたいと思うのである。

その際、詞章の何をとりあげるかということからして問題になるわけであるが、ここではその典型を見るということから、まず「歩く歌」そのものとも言える、詞章それ自体に移動性というか浮遊性・漂泊性といったものがある、言わば「陸の歌」「海の歌」（あるいはその両方に共通している「陸・海の歌」といったものをとりあげ、その中の主要語というか主題語（句）をいくつか摘出してみたい。

詞句自体に移動性・漂泊性があるということは、その詞句を謡う人自体の生活形態なり生業形態に移動性・漂泊性があつて、それを根底にしていることで、彼等の担う「うた」の移動・漂泊の可能性

が高くなるということである。そこを前提に一つの例として、「海の歌」の〈へが見えますほのぼのと〉、「陸の歌」の〈笠を忘れた〉、そして「海と陸の歌」としての広がりをもつ〈泣いてくれるな〉の三つを、その分布と広がりにおいて追うことで、各土地々々の歌「民謡」としての定着の相を通して、民謡の言葉の機能（謡う側が期待しているもの、謡うことの納得としているもの）を確認してみたい。

一、松が見えますほのぼのと

——望郷と祈願——

集団の「うた」である歌謡を支えるものは、常にその担い手の心情・情感であり、その生命は抒情性にある。そのことは「生活の歌」である民謡の世界では一層顕著である。一見、叙景歌と思われるものがあつても、そこには自然の景物・事象を重ねてのそのトキ・バにおける謡い手の心情が重ねられていて、決して単純な風景の描写などにとどまっているものではない。

○磯で名所は大洗様よ 松が見えますほのぼのと（磯節、茨城県、^性「日本民謡集」）

一見、名所を謡っただけかに見えるこの詞章も、以下の各地の伝承例と思ひ合わせてみると、決して単なる叙景歌ではなかったことがわかってくる。その辺の吟味から始めようと思う。

○はるか向こうの赤石岳に雪が見えますほのぼのと（伊那節、長

野県、【同】

「はるか向こうの〜」とか単に「向こうの〜」（向こう通るは〜）という謡い出しを待つ歌は広範な分布と展開を示し、各地の各種の歌に散見するもので、民謡の歌詞の類型についての一つの問題点を提供してくれているものであるが、そのことへの深入りはここで課題ではないので先に進める。ただこの歌の場合も、「向こう」が気になることから発想されたものとして、押さえるべき歌であることが肝心なのだということが出発となる。

「向こうに見える赤石岳に雪が見える」という単純な謡い口であるが、その情景に風流さや見事さを感じて謡い出しているわけではない。この民謡の詞章の問題とすべきは、

(1) 「向こうを眺める」のはどうしてか。

(2) 赤石岳は土地の人にとってどんな山であるのか。

(3) その赤石岳の雪が気になるのはどうしてなのか。

ということであり、その上で、

○だからどうだというのか。

あるいは、

○どうしようというのか。

ということを明確にしない限り、この詞章をめぐる民謡研究は完了しない。つまり、単なる叙景歌として片付けてしまつては、民謡の詞章としては血の通わないものになってしまうことである。この詞章の場合、「ほのぼのと見える」というところに情が出ているが、それを取り立ててもそれだけではまだ民謡の詞章として

の生命を感じ取ったことにはならない。

土地の人達にとっては、日々の暮らしの中で朝夕眺める山は、生きるための心の拠り所なのであって（具体的な信仰対象としての山とまでいなくても）、その山のたたずまいは日々の暮らし（生産作業など）にかかわるものとして気になったのである。その観察は小さくは日々の天候の判断であつたり、大きくは季節や時節の到来をそこに見て、個々の農作業の開始、あるいは終了の時の判断であつたりする。

この歌なども「ほのぼのと」という言葉からすれば、「わずかな」「かすかな」または「やさしく」「穏やかに」といったニュアンスがあるから、その雪は残雪、春の名残の雪であつたらうか。だとすれば、それを見て、もう「本格的な春の到来」も真近いことを確信し、戸外の農仕事の開始を決意しているのだと思われる。伝承地での実際の採集ではないから、あくまでも想像にすぎないが、そうした観点を持って眺めてこそ、この詞章は「民謡の歌詞」になるのである。

同じ長野県諏訪地方の盆踊り唄（諏訪節）に次のものがある。

○はるか向こうの赤石山に 雪が見えます初雪が（有賀恭一、「諏訪の民謡」、昭和二六）

この方ははっきり「初雪」とあるから、感じ取っているのは「冬の到来」である。「あの高い赤石山に白いものが見えはじめた。本格的な冬も間近い。たとえば「取り入れを急がねば」といったような、田や畑などの戸外での仕事に一層精を出そうという心持ちを謡つ

たものであろう。「盆踊り唄」としての採録であるが、盆の踊りの時期に、いくら高い山であるからといって、実際にはまだ雪は見えてはいないだろうと思われるが、そこに不都合はない。収穫を前にした盆の踊りの中で、盆が終われば、すぐ息つく暇もないほどの忙しい取り入れの開始になる。しかも山里の秋は短い。ポヤポヤしていたらすぐ雪が来て冬の到来となる。これからの秋仕事には精一杯立ち向かい着実にこなしていかなければという、「われ」と「ひと」互いの確認であったのである。民謡の素材は「謡う人」自身の生活であり、その生活に根ざした感慨(生活感情)であるというのが大原則である。

さて、最初に挙げた「磯節」は今日では御座敷唄になっているが、その曲名が示すように、本来は「海辺の歌」であり、常陸海岸の漁師の間に江戸時代から謡われていた「舟唄」(樽漕唄)であったといわれている。⁰⁴ そうすると、表向き「磯で名所は大洗様よ」という、歌の発想上からは「お国自慢」の一章であるように見えながらも、単純にそのみで謡いに出されたものではないのだろうと思われる。 「松が見えますほのぼのと」というのは、海上にあって、遠くに見える故郷の地を思う郷愁、つまり望郷の念が根底にあっての詞句であったと見たいのである。そこに重ねているのは、早く陸に帰りたいという思いであり、海上にあることの危険さからの解放を祈る思いであった。

長野県の「伊那節」などの例は海歌が完全に陸地にあがった後の改作、つまり陸歌になったこの類歌中の数少ない例であり、主題も

「望郷」でも「祈願」でもなくなっているが、以下のような類歌を並べ立ててみると、やはり、定住地(故郷)を離れて漂う者の「望郷の念」がこの章句の本音であったことがわかる。

○高田恋しや伊佐壽美様よ 森が見えますほのぼのと(高田甚句、福島県、「東北の民謡」〈日本放送協会仙台放送局編、昭和九〉)

○なつかしやウワハン 大宮様のウワハンヨ 杉が見えますほの

ぼのと(大宮踊、岡山県真庭郡川上村・八束村、「岡山の民謡」)

○エーヤ 越後弥彦の明神様の エーヤ 杉が見えます ヤサ

ほのぼのと(一之宮甚句、新潟県西蒲原郡弥彦村弥彦、「新潟県の民謡」)

○故郷恋しや氏神さんの 森が見えますほのぼのと(雑謡、山梨

県東山梨郡、「俚謡集拾遺」)

最後のものははっきりと「故郷恋しや」と望郷の念を謡い出すものになっている。以上のものは、その伝承地からして海辺というよりは内陸部の、しかも盆踊りなどの「踊り歌」のそれであるが、この歌の成立して来る基盤にあるものは「海上からの故郷の方への望見」であり、海歌として生まれたものであったと思われる。それが人の「渡り」とともに各地の港々に立ち寄り、やがて内陸部にも浸透していったと考えられるのである。つまり、各地の港を経由した流行歌というのがこの歌の広範な伝播を可能にしたということである。

○ハア東浪見恋しや軍茶利様よ 森が見えますほのぼのと(東浪見甚句、千葉県、「民俗芸能」38号)

○新潟恋しや白山様の 松が見えますほのぼのと（新潟おけさ、新潟市の民謡）

○ヤレ玉島ちよいと出りやヨー はや丸亀のヨー ヨイトコリヤ

ヨイトコリヤ 城が見えますヨー ほのぼのとヨー（押し切り舟唄、岡山県玉島、「岡山の民謡」）

○和田見恋しや伊勢宮さまの 松が見えますほのぼのと（安来節、島根県、「日本民謡集」）

最後の例は、安来が港町であるばかりでなく、「安来節」の原調が古い「出雲節」にあるといわれていることから（『日本民謡集』二八八頁）、この詞章が海上經由のものであったことがわかるが、陸にあがってからの新しい展開も見せている。遊廓町である「和田見」を「恋し」という、遊び歌への展開である。それは、陸の望郷歌が遊廓通い（馴染みの女）への思いを謡う歌への展開を見せていることにも通じる。

海歌から陸歌へという展開の一つに、業歌への転用がある。

○夜明け恋しや神門が浜で 松が見えますほのぼのと

島根県の踏輪唄である（『日本民謡集』「民謡研究」一の一）。

踏輪仕事には一連の流れがある。「ひとタタラ」打ち終わるのに十六の役割が必要で、そこに歌が組みこまれている。「籠り夜の唄五」「翌明押の日の唄四」「中日の唄四」「出鐵の日の唄三」というように、作業の行程によって決まった歌があって、それらを謡っていくことで作業が進められる。この歌はその第二の行程「翌明押の日の唄」の第一番目に謡われるヨアケの唄である。

「海」の聯想を受け継ぎながらも、夜通しの作業を続けるパンコ（踏輪唄を謡ってテンピンを踏む者）の本音が「夜明け恋し」にこめられていて、見事な転用といえる。

海から離れた土地の歌の中にもこの類歌は広がっている。

○とんと出ますりやはや住吉の 松が見えますほのぼのと（酒屋唄「仕込唄」、群馬県館林市、「群馬県郷土民謡集」〈群馬県教育委員会編、昭和四七〉）

○まはればはや 大阪の城がみえますほのぼのと（酒造歌、三重県三重郡、「俚謡集」〈文部省文芸委員会編、大正三三〉）

○小坂恋しや観音様の 森が見えますほのぼのと（潮唄、長野県、「諏訪の民謡」）

○故郷恋しや氏神さんの 森が見えますほのぼのと（童謡、山梨県、「日本歌謡集成」二二）

二番目の「大阪繁昌」を謡うものは、祝福に大きく傾いたものであるが、あとのものはやはり「望郷の念」が主題になっている。

故郷が見えないといって「山が憎い」と謡うものが陸地の旅の望郷歌として広がっていったのに対して、「^岸が見えますほのぼのと」の発想基盤にあるものは「海上」にあり、いわば海上の旅（漁や船運などの仕事の場合も含めて）の望郷歌であったと言える。

そして、実は「^うが見えますほのぼのと」という発想は、海上の旅にあっての望郷歌になる以前があったのではないかということである。この発想の型が家郷はむろんのこと陸地そのものから離れて、「板子一枚下は地獄」という、海上にある船乗り男どもが心細さや

切無さから、恋人が恋しいとか故郷が恋しいというだけで謡い出したものでなかったと思われるのは、見えるものとして挙げているものが多く「神の杜」であるという点である。

これまで挙げた中でも「大洗様」をはじめ「伊佐壽美様」「軍茶利様」「白山様」「伊勢宮様」「住吉様」「弥彦明神様」「氏神さん」などの森(杜)の松なり杉なりの木立ちの遠望を謡っていた。「観音様の森」というのもあったが、圧倒的には信仰の対しての「神の杜」を謡っているのである。そこにこの歌が同じ旅の歌でありながら、「山が憎い」と謡う陸地の旅の歌よりも深刻・真剣なものであったことを窺わせる。その深刻さ・真剣さは海上の旅が陸地のそれよりも危険度が大きかったという部分が直接的な理由として一つの説明になろうが、それより大事なことは、陸地の旅の歌が「望郷」から「恋」へという展開を示していったのに対して、この方はそうした「情」のふくらみを拒んで広がり、謡い継がれて来たという点である。

「くが見えますほのぼのと」の歌は、遠く『土佐日記』の「舟唄」、○なをこそ国の方は見やられるれ わが父わが母ありとし思へはかへらや

に重なる「望郷」という点で発想的には一つながりであるが、そうした「情」に終始していないものがこちらにはあるのである。

端的に言えば、魂の不安を感じての呪歌という一面である。ことさら「神の杜」が謡われるのは、それが海上での一種の鎮魂(これを謡う船乗り男たちの現実的心情とすれば、安全祈願といったものであ

たらうが)の儀礼歌・神歌ともいうべきものであったからであろう。実際には海上遠くにあつて「神の杜」はむろん、陸地すらまだ見えなくても「くが見えます」と謡うところに儀礼性・呪術性があつたものと思う。それは、「見る呪術」(古代の「国見歌」もここに立っている)に根ざしているものであつた。

さらに言えば、その見え方を「ほのぼのと」と形容するところに、儀礼歌としてのこだわりが生き続けてきた一章といえよう。「ほのぼのと見える」という「ほのぼのと」は単に「かすかに」「わずかに」「ぼんやり」といった見える程度の問題をいっているのではなく、見る側が感じ取る「神霊・靈威などの靈妙な息付き」の受け止め方を表わす語であつたろうと思う。

二、泣いてくれるな

—海と陸の別れ歌

謡い出しに「泣いてくれるな」を持つ民謡の詞章に二つあつた。その一つは、

○泣いてくれるな出船のときは 沖で櫓權が手につかぬ
というもの。各地の各種の歌の文句として広く分布している。これも近世期からの流行民謡の一つであつた。これまで確認し得たものを「定着の相」を見る意味で挙げてみる。

○小木おけさ(新潟県佐渡郡小木町小木)

○盆踊歌(同岩船郡関川村)

○新潟おけさ（同新潟市）

○七浦甚句（同佐渡郡七浦）

○すつとさ踊（石川県内浦町白丸）

○あらくり歌（同輪島市西山町）

○舟漕ぎ歌（同七尾市石崎町）

○船頭唄（千葉県）

○川越舟唄（千住節）（埼玉県川越市）

○島甚句（岩手県気仙沼地方）

○内郷甚句（福島県いわき市内郷）

○ジャコ曳船歌（三重県伊勢市大淀町）

○麦たたき歌（島根県江津市和木）

○櫓漕唄（鳥取県伯耆地方）

○サエモン（盆踊唄）（大分県杵築市）

後半句は「沖で櫓權が手につかぬ」と謡うのが典型であったが、次のように多少の変化もしている。

〽泣くと出船がおそくなる

〽綱も錨も手につかぬ

〽棹も櫓槽も手につかぬ

〽泣けば櫓槽が手につかぬ

ともあれ、盆踊りや麦打ちの歌としても伝承されているが、圧倒的には櫓漕ぎや船引きなどの海の仕事歌としての伝承である。

歌の内容としては、港々を渡り歩く船頭が一夜の情を交わした女、あるいは幾晩かの馴染みを重ねた女との別れの辛さを謡う「恋歌」

になっている。別れに臨んで女に泣かれると、そこに気持ちがつき止められて、船頭稼業に身に入らないというのである。別れに臨んでの男の女に対する情愛の深さを謡っているようであるが、それは「たてまえ」であって、演じた恋を謡う「遊里歌」、色里の遊び歌の発想の枠内に生まれたものである。別れの悲痛さ・深刻さが言葉通りに働いているわけではないから、港々を経由して各地に広がって流行歌になるのである。

とは言え、たとえ表面上ではあっても、別れに際して泣かれた女を思って、「沖で櫓權が手につかぬ」と口に出してみるの男にとっではいい気分のもの、それを味気ない船上で口に出して謡うこと自体が大きな気晴らし・張り合いであったのである。

船漕ぎ唄とか船唄というと、いかにも櫓や櫓を使つての船漕ぎの労働歌というような響きで受け止められるが、それは「沖で櫓權が手につかぬ」という文句から来た流用であつて、もともとは港や船着場の飯宿や遊女宿の酒席における座興歌・騒ぎ歌として生まれたものであつたし、船人・船頭という男たちが謡い出したというより、旅の男・渡り男に「そう言つてもらいたい」「それくらいの深情けを示してもらいたい」という、飯盛り女や遊女たちの思い（これとても本心そう願つているわけではなく、あくまでも「たてまえ」としてであり、そうあつてこそ、一夜の情が芝居立てになつて完結するという程度のこと）から謡い出されたものであつた。つまりは、港の色街でのやり歌として生まれた詞章であつて、酒席の騒ぎ歌・遊び歌であつたということである。それを船乗り男が海上でのつれづれに、ある

いは櫓權を取りながらの気晴らしに謡ったというのが実際であったと思われる。ただし、各地に運ばれることになったのは、港々を渡り行く船人・船頭たちの歌になったからではある。ともあれ、そうした言わば娯楽歌・余興歌であったことが港から里、さらに山里へと、盆踊りなどの踊り歌の文句としても迎え入れられることになるのである。

川船の舟唄としての伝承である「川越舟唄」は「千住節」の名もあるように、千住という船着き場・宿場としても賑わった千住宿の騒ぎ歌なのであった。海辺の歌でなくなったことで、「沖で櫓權が手につかぬ」を「泣くと出船がおそくなる」と謡い換えているのは、まさに船宿での客と接待女とのやりとりに叶ったものになっているといえる。

さて、この海の船歌系の「泣いてくれるな」が、どのような展開を見せて広がっているのかをもう少し追ってみることにする。

まず、これまでのものを「櫓權型」とすれば、「烏鳴き型」ともいうべきものがある。後半句を大きく謡い換えているのである。

○泣いてくれるな出船の時に 烏鳴くさえ気にかかる

前半句にも多少の変化はあるが、後半句の変化も「烏鳴くのが気にかかる」「烏鳴くなよ気にかかる」「烏鳴くのもよ気にかかる」「烏鳴いてさえ気にかかる」など、それほど大きくはない。細かいことを言えば、「烏鳴くなよ」と「烏鳴いてさえ」（烏鳴きさえ・烏鳴くさえ）とではいくらか意味合いが違っているようか。

後者は「泣いてくれるな」と言っているのは「女」に対して言っ

たもので、「出船の時にお前に泣かれると、別れたあと、烏が鳴いてさえ、お前の泣いていた姿を思い出して、その後どうしているやらと気になってしまう」というのであろう。それに対して前者の場合「泣いてくれるな」は、「烏」そのものに言っているような響きが強くなる。つまり、「気にかかる」のは「女のこと」ではなくて「烏鳴き」そのもので、「烏鳴きが悪い」のは何かよからぬことの起こる前兆だという伝承からすると、これからの船旅を不安がっているということになる。

ただ、「櫓權型」と比較したとき、この「烏鳴き型」は、現在までの管見の及ぶ限りではあるが、地域的に片寄った伝承しか確認できていない。

○静岡県榛原郡中川根町「二上り」「二端唄」〔静岡県民謡〕〈文化財報告書34〉、文化財保存協会、昭六一・三）

○愛知県豊橋市「古歌謡」〔伊奈森太郎編「愛知県地方の古歌謡」第二集、昭二八年度〕〔日本庶民生活史料集成二四〕所収）

○和歌山県「子守唄」〔北原白秋編「日本伝承童謡集成」第一巻、昭和四九、九、新版〕

○大分県臼杵市「ジョウサ節」〔大分県の民謡』第一集、大分県民俗学会、昭和三八・八）

○同東国東郡国東町「マテッキ唄」〔右同〕

○高知県幡多郡沖一島村「子守歌」〔高知県立女子師範郷土室編「土佐民謡集第一輯」昭八・六、謄写刷り、〔日本庶民生活史料集成二四〕

所収）

「二上り」「端唄」は具体的にはどういふときに謡われる歌なのか明確ではないが、「ジョウサ節」なども合わせて、いづれ宴席の騒ぎ歌、余興歌であったと思われる。「マテツキ唄」は地搦きなどの工事歌であろう。そうした力仕事の調子合わせに謡われるものとして、余興的・娯楽的な側面が強調されてこの詞句の採用であつたらうと考えられる。「子守唄」としての伝承に至つては、いくらでも歌が欲しいという子守り唄そのものの貪欲さ故に採り込まれたものであつて、そこに子守り娘の感慨が投影されているわけではあるまい。ただ文句の面白さを楽しんでいるだけであつたことは、続けて次の文句を生んでいふことでも知れる。

○鳥なくのを気にかけてよすな　ここは森の下いつもなく

ただ「泣くな」というところに、小さい子を守りする子守り娘の感慨が重ねられているのであろう。子守り仕事で最も切無いのは、守りをする子にグズられ泣かれることである。十歳前後で自分自身がまだ親の傍らで甘えていた年頃の年期奉公の子守り娘にとつては「子に泣かれること」はまさに途方にくれる辛さであつたのである。「泣くな」の一章が子守り唄に採用される根底はそこであつた。

○泣いておくれな　殿御の留守によ　う　鳥啼くさえ気にかかる

(徳島県、『日本伝承童謡集成』一)

○泣いてくれるなこの身がやつる　身より心がやつれます(三重県志摩郡、『俚謡集拾遺』)

○泣いてくれるな　まだ夜は夜中　明けりやお寺の鐘がなる　ヨ
イヨイヨイヨ　ネンネンネンネー(三重県鈴鹿市庄野町、『三重

県の民謡」(県教育委員会、平成二・三)

むろん、子守り娘の工夫・才覚でなく、それぞれに大人の歌としての前身があつて(少なくとも大人の才覚が働いて)の子守り唄での定着として発展であつた。

子守り唄における展開は別にして、「鳥鳴き型」は、詞章の上からの海歌的要素を薄くしていながら、前半句の「泣いてくれるな出船の時」(「出船の時」トモ「出船の先に」トモ)を捨てきれずにいるのはどうしてなのか。それほどこの謡い出しの文句は気に入られ、もてはやされ、印象深かつたのであろうか。

そして、実はすでに見た子守り唄の展開に見られた「櫓権型」「鳥鳴き型」を離れた「泣いてくれるな」が第三段階の変化なのであつた。それはまさに「泣いてくれるな」だけを残し、「出船の時」という限定を捨てての展開である。それは海・川などの水辺の別れ歌から大きくはずれての定着ということにならうか。

子守り唄の「泣いてくれるな」から拾う。

○泣いてくれるな親ない子ども　親はござれど極楽に(金沢市才

田町)

○泣いてくれるな背中の上で　守が泣かすと思われる(石川県能

勢地方)

その他、様々な歌として「泣いてくれるな」が伝承されているのである。

(1)泣いてくれるな今別れても　死ぬる身でないまた会える(石川県能勢郡町山田郷、田切り歌)

(2)泣いてくれるな仕事の邪魔や 切れる匏も切れ止まる（反復省略）（七尾市三室町、草刈り唄）

同地の、同じ「草刈り唄」として「泣いてくれるな 出船の邪魔や 沖でいるかいな手につかない」もあげているが、この方はあきらかに海歌の「泣いてくれるな」であり、「沖でいるかいな」は「沖で櫓權が」の変化したものであったと思われるし、陸の草刈り仕事の歌としては無頓着でいい部分であった結果の変化であろう。

それをいかにも「草刈り唄」らしく言い換えたのが「仕事の邪魔や」
「切れる匏も切れ止まる」であったと思われる。

(3)泣いてくれるな出掛ける時にゃ 草を刈る鎌手につかぬ（福島県石川町大字曲木、草刈り唄）

(4)泣いてくれるななかなでさえも きれる匏もきれかねる（群馬県上野村白井・碓氷、馬子唄）

(5)泣いてくれるな気持ちが悪い 泣いて添われる身ではない（石川県石川郡松任町、臼すり唄）

(6)鳴いてくれるな夜明けの鳥 可愛い殿御の目をさます（同県、てんや節）

(7)鳴いて呉れるなまだ夜は明けぬ 早く返すも人による（神奈川県横浜市、^船唄）

(8)鳴いてくれるな仕事の邪魔よ 鳴けば鳥がまた笑う（石川県羽咋市神子原町、神田鳥〈盆踊り歌〉）

(9)泣いてくれるな主や泣きやおらも ともに涙が出てならぬ（石川県鳳至郡門前町八ヶ川流域地方、三度笠^音）

(10)泣いてくれるな別れたとても 泣いて別れが止むでない（長野県、諏訪節）

(11)泣いてくれるなヤー きけとヤー きけなら 恨まれても 離れ座敷にゃ 寝た思い（七尾市、追分節〈盆踊り唄〉）

(12)泣いてくれるな別れじゃないぞ 命さえありゃ ノーサー又会える

(13)泣いてくれるな未練が残る 残る未練がノーサ しゃくのたね（以上、静岡県磐田郡水窪町、ノーサ甚句〈盆踊り唄〉）

(14)泣いてくれるな別れぢやないに 今度別れにゃ泣いてくりよ（長野県木曾地方、踊り唄）

(15)泣いてくれるな今立つ酒に わしの心もにぶくなる（宮城県、おたつ酒唄）

(16)泣いてくれるな出船の時に 沖でろかいが手につかぬ（久賀町、酒造り歌）

数多い歌謡集・民謡集からすれば、ほんのわずかではあるが、これまで管見に入り、手元に集め得たもののうち、海歌（港や船着き場の盛り場での騒ぎ歌も含めて）としてのもの以外のものを列記してみた。今後の歌謡集・民謡集（民俗誌・民謡報告書等）の涉猟で、さらにいくつも加わってくるに違いないが、おおよそこの歌のテーマと、それにかかわっての詞句の変化というか伝承における展開の相は、以上挙げたものからだけでも十分にかがいがい知れるかと思う。それぞれについて多少の検討を加えてみよう。

(1)の「田切り歌」としてのものは、「泣いてくれるな」に歌の場

(田切りという仕事の場)からの機能が投与されているわけではあるまい。戯歌めいた展開をしているところに、流行歌からの借用であり、娯楽歌・慰安歌としての採用であることを見せている。日々の田仕事への出がけに「別れ」を持ち出すこと自体が「笑い」である。(2)の草刈り唄としてのものは、後半句に多少歌の場に叶った変化を見るが、「鉋」は草刈りの道具ではあるまいから、木挽き唄などの山歌としての前身があつたのことと思われる。

ヤマは、ウミに対して野・陸をも意味する。ヤマウタは、平たく言えば陸地の戸外仕事の歌全般をさすことになるから、草刈り仕事にも謡うことになったのであろう。(2)に関してもう一つ確認しておくべきは、「泣いてくれるな仕事の邪魔や」という部分である。「出掛け」に際しての「泣き」が仕事の支障になるというのではないらしいということである。「泣くな」というのは、仕事のその場におけるナクモノに対して言っているのであるらしい。しかも人に対してではなく、鳥か獣かに向かっているようである。そういう点で「泣いてくれるな」の歌の本幹とか本質的テーマである「別れ」の歌ですらなくなっている。

それに対して、(3)ははっきりと草刈りの労作歌仕立てになっているし、「出掛ける」時の別れ歌としての本質は失っていない。ただ、誰との別れにしる、草刈り仕事への出がけに「泣く」ほどのことはあるまいと思われるので、その点からすれば、これも戯笑的な側面が大きいと言える。しかし、所によっては、男衆が共同でムラの入合い地などに入って、小屋掛けた上で何日か泊まり込んで草刈

りをするなどということもあつたから、そうした場合には妻なり恋人なりとの出がけの別れは、それなりの重みを持って胸に迫まるということになるかもしれない。

(4)は(2)の系統。ただし「馬子唄」となっている。木伐り・下草刈りなどの山仕事や野面の草刈り、そしてその行き来の道中で謡う歌には共通するものが多い。この馬子唄は、専門の馬方の歌ではなく、馬を引いての仕事の行き帰りに謡う歌(道中歌・道歌)としての馬子唄であろう。

(5)はずっとくだけたもの。若い男女の夜なべ仕事の臼摺り作業での戯れ歌としてのものであろう。「気持ちが悪い」とか「あんたがどれほど泣いてくどいたって、わたしはあなたと添われる身ではない」、つまり、もう夫がいる、あるいは心に決めた人がいるということであろうから、「泣いてくれるな」の歌は本来、男の歌であつたらしいのに、大きく変化していることになる。

(6)は、船歌系統とは全く違う「ないてくれるな」である。いわゆるいとしい人と寝た夜の夜明けを厭う、「後朝の歌」の系譜に立つものである。

(7)も後朝歌の発想に立っているものの、後半句は類型でない変化をしている。「早く返すも人による」ということは、「この人は帰したくない」ということであり、だからまだ夜が明けていないのだから鳴いてくれるなというわけである。「船(船)唄」とあるが、出自は港の騒ぎ歌であろう。(6)(7)で「鳴くな」といっているのは「鶏」に対してであり、同じ「男女の別れ」をテーマにしている「ないて

くれるな」の歌であっても鶏鳴とか寺の鐘などを謡う「夜明け」の歌の系列に近いものと言える。

(8)は(2)と同じ謡い出しを持つもの。「盆踊り歌」とあるが、仕事歌經由入ってきたものであろう。後半句の「鳴けば鳥がまた笑う」は、流行歌(歌謡曲)あたりの文句に刺激されての戯れであろう。

「ないてくれるな」というのは人に対してなのか鳥に対してなのか判然としない。

(9)は、今のところあまり類歌のない変化を見せているもの。男女どちらが謡い出したとしてもいいものであるが、「三度笠」とあるから、「別れ」歌であることに間違いない。「祭礼・盆踊りに謡う」というが、流行歌あるいは酒席の騒ぎ歌の詞章をとり込んだものであったろうか。

(10)の諏訪節も含めて(14)まで盆踊り歌である。謡い出しはともに「泣いてくれるな」であるが、以下が様々に変化しているのは、盆踊りが盆の娯楽踊りとなっていく中で、その歌の詞章もくだけたものになっていった結果であろう。他の歌の文句からの借用もあろうし、多少気のきいた物言いのできる文人・才人の類(自称も含めて)はムラの踊りの輪の中にもいる。そうした人のふと思いついた言い回しが採用されて伝承されていく。そうした結果の一つの表われをこれらの盆踊り唄「ないてくれるな」歌の詞章展開の上に見ていいのだろう。それにしても、冒頭部分にあげた海歌そのものの「泣いてくれるな」を盆踊り唄として伝承している例も多かった。そうしたのも合わせて、盆踊り唄と「ないてくれるな」には、切り離せ

ない結び付きがあったと思われるし、その「うたの場」と「うた」との強い結び付き故に、どうくだけ、戯れていても「ないてくれるな」を捨てきれずにいたということなのだろうと思う。その強い結び付き、「こだわり」の部分が歌謡儀礼論を構築する一つ一つになるのだと思う。

(15)はまさに儀礼歌である。婚礼歌のうち、座敷での嫁取りの祝宴が果てて、花嫁側の一行が帰るのを、門口で送るときは盃事の中で謡われるもの。「お立ち酒」ともいう。「別れ」「名残」が主題であり、「泣いてくれるな」の謡い出しが生きて機能している。

(16)は、冒頭で眺めた海歌そのままの詞章であるが、同じく櫓権を使うことから酒造り唄に転用したものであろう。歌全体に心が向いているわけではなく、「櫓権」に引かれているだけであり、「手にかぬ」に櫓権を使つての作業の大変さ・難儀さを重ねているのかもしれない。むろん、「別れ」とか「名残」とは無縁になっている。

ある程度、その都度々に多少の分析と考察も加えたが、以上を通じてこれまでの検討の中でひとつのしめくくりをつけておいた方がいいと思う。

まず大きくは「泣いてくれるな」は、歌の部類としては恋歌であり、主題としては「別れ」であったということである。そして、その生まれは海辺(港)の色街であり、酒席の座興歌・騒ぎ歌であった。それが、船乗り男達の船上での口ずさみ歌、あるいは櫓権さばきの仕事歌ともなる中で、彼等の經由する港々に運ばれて流行歌的

なもてはやし方をされて、港・船着き場の歌、色街の騒ぎ歌の枠を出て、草刈り・馬引き・臼摺りなどの仕事歌、盆踊りなどの踊り歌といった、及んだそれぞれの土地で、いわゆる民謡として定着していった。海の歌としての伝播・種相に加えて、陸の歌としての定着の種相が交錯しているのである。

そうした民謡の定着の種相において、この「泣いてくれるな」歌の場合には、流行歌から儀礼歌への転換が見られるということを確認しておきたいのが、宮城県の「おたつ酒唄」と各地の盆踊り唄としての定着と、それにこめられた思いである。

「おたつ酒唄」はまさに儀礼歌である。「東北の民謡」の注記に次のようにある。

おたつ酒は立振舞酒の意味で、祝儀の席を立った総客（嫁なり婿なりに付き添ふて来た先方の客）に庭前で大茶碗或は大盃になみ々と酒を注いで振舞ふことである。

婚礼歌の一つなのである。婚礼歌は普通には、「長持ち唄」などに代表される嫁入りの道中歌と、婚儀の進行に合わせ、あるいは祝宴の余興に謡われる祝い座敷の歌とに分かれる。そして後者の中に祝宴のはじめに謡う歌、中程に謡う歌、終わり（果て）に謡う歌といった、種類を明確にしている場合が多いが、もう一つ、その終わりの部分を、座敷を立てて婚家の玄関先・門先に移して、そこで改めての盃事を行ない、その時に座敷でのものとは別の歌を謡うのが、宮城県などの「お立ち酒」という儀式であり、歌なのである。座敷での果ての歌が祝いの「結び」「納め」であって、テーマはあくま

でも「祝福」であり、時に「祝い客」の辞去に際しての「礼心」

（家ばめ、旦那ばめ、ご馳走ばめなどに寄せての）であった。むしろん、

「果ての歌」であるから、「終わり」「止め」の意識は出て来るし、

そこに「別れ」とか「名残惜しさ」が重なって来るが、祝儀としての

「別れ」「名残惜しさ」をテーマとしているのがこの門先での盃

事である。「泣いてくれるな」はまさに「別れ」「名残」の歌として

ここに儀礼歌として組み込まれているのである。今日一般に「お立

ち酒」の文句として謡われ知られているのが次の二つの詞章である。

○お前お立ちかお名残惜しや 名残情けのふくみ酒

○またも来るから身を大切に はやり風邪など引かぬよ借

海辺の男女の恋の別れ歌の「泣いてくれるな」は、婚礼の儀礼歌、

嫁とその両親（嫁方の祝い客）との「別れ」「名残」の歌になったの

である。

もう一つの盆踊り唄としての定着であるが、この詞章の取り込み

は、盆の娯楽踊りの歌としての歌詞の貪欲さが最大の契機であり、

その心情は、詞句の上で男女の恋の気分を楽しむところにあった。

盆踊り唄に圧倒的に多いのは恋歌の文句である。「泣いてくれるな」

もその一つとして、何事にも窮屈なムラの暮らしにあって、自由には

いかなかった「惚れた、惚れられた」を歌の文句で楽しんでいた

のである。

まさに自分が当事者になったつもりで恋の気分浸ればよかったから、「出船のとき」とか「沖で櫓権が手につかぬ」といった海歌

的部分も特に言い換える必要もなかったということである。ただ、

ここまでがこの歌の効用であったとは思えない。「男女の別れ」の歌をこうまで謡い継ぎ、広めているのは、そこにもう一つの「別れ」を感じ取っていたのだと思われる。それは「盆の踊り」、「盆」そのものとの「別れ」であり、「名残惜しさ」であったということである。盆踊り唄の「流れ」にもやはり、「はじめ」「盛り」そして「終わり」があって、「終わり」は「別れ」とか「名残」を謡うことであつた。男女の別れが「夜明け」であつたことから、「後朝の歌」〔鶏鳴〕〔寺の鐘〕が入ってくるのもそれであつた。「鳴くな鶏まだ夜が明けぬ」という後朝歌の持つ機能に近いものが「泣いてくれるな出船の時は」にもあつたということである。

実はもう一つ、「ないてくれるな歌」があるのである。それは、次のような詞章である。

○鳴いてくれるな都が恋し　なくな八幡やわたのほととぎす

「八幡の里のほととぎす」に「鳴いてくれるな」「鳴くな」という。「ほととぎす」が鳴くと都が恋しくなるというこの詞章の奥にあるものは何だろう。

郷里、新潟県北蒲原郡の一新田村（現在、豊浦町天王）の盆踊り唄として謡われてきたものである。周辺の集落ではもちろん、北蒲原郡・岩船郡など、県北部地方に盆踊り唄として広く謡われてきたものであるが、他所での伝承は今のところ確認できていない。

『俚謡集』に新潟県佐渡郡の「越後甚句」の章句として次のものがあげてある。

○啼くな子規　なけば都をおもひ出す
その解説に、

承久帝八幡の里さとにて子規の啼くを聞き召して「啼けば聞く、聞けば都のこひしきに、この里すぎよ山子規」と御詠あらせられしものの換骨脱体なるべし。

とある。「承久帝」は佐渡に流された順徳院。八幡の里（現在、佐和田町八幡）に近い真野（真野町）に御陵がある。

もう一つ、世阿弥が佐渡で書いたという『金鳥書』（永享八年、世阿弥七十四歳）なる書物があつて、その一章「時鳥」で、世阿弥がやはり八幡の里を訪れて聞いた京極為兼のことを書いている。同じ流され人である為兼の心に自分の心を重ねて「都恋し」の思いを「時鳥」の章題にこめているのである。

これらから考えても「なくな八幡のほととぎす」の「八幡」は佐渡の「八幡の里」であつて、この章句の出所が越後佐渡であつたことは明確のようだ。むろん、順徳院とか世阿弥の作詞というのではない。佐渡が島という流人の島で「都恋し」に身も心もよじた貴顕・文人に同情を寄せて後人が作った一章が佐渡の島歌として謡われているうちに、やがて「佐渡おけさ」などが流行民謡となって各地に及ぶ中でムラの盆踊りの章句として採り込まれていったのだと思う。

地方の盆踊り唄に「草津節」「常磐炭坑節」「三池炭坑節」「花笠音頭」などの流行民謡の歌詞が入り込んだ時期があつたのである。
郷里の盆踊り唄には、

○来いとゆたとて行かりよか佐渡へ 佐渡は四十九里波の上

○佐渡と越後は竿さしゃ届く なぜに届かぬ我が思い

○佐渡へ佐渡へと草木も靡く 佐渡は居よいか住みよいか

○佐渡へ八里のさざ波越えて 鐘が聞こゆる寺泊

など、あきらかに「佐渡の歌」から採り込んだ詞章がいくつも入っている。「鳴いてくれるな都が恋し」も同じ経路でムラの盆踊り唄になったものであろう。

ともあれ、流人の島佐渡での佇びしい暮らしを余儀なくされた都人の心情に寄せて謡い出された（その境涯に同情を寄せた島人の詠出であれ）「鳴いてくれるな」の「ほととぎす型」は「望郷」がテーマとなっている。

したがって、本来的にはムラ人が自分等の心情を謡った「ムラのうた」ではなかったということになる。発想が都歌的（和歌的）であることは、「ほととぎす」が歌語であり雅語であることにも見られ、その「みやびやかさ」が都恋しさにつながるのである。「八幡」は、この詞章の生まれた土地の特定の地名であったのだから、ムラの地名として普遍性を持つ地名であったことから、そのまま各地に及んでも通用したのである。現にわがムラの近くにも「八幡新田」なる集落があるし、ハチマン（八万）と書くが」という集落もある。そうしたことも、借り物のこの詞章を全くの「ヨソのうた」としなかつたのである。ただ、わがムラから離れたことのない盆踊り唄の管理者に「望郷の念」は無縁である。とすると、その辺をどう処理して「ムラのうた」「自分達のうた」としていたのであろう。単に

都的情緒、流れ人の悲哀などを、無縁であるが故の新奇さで味わうだけではなかったのだと思われる。それを盆踊りなら盆踊りという「うたの場」において跡付けることが、民謡の儀礼的研究の課題なのである。

それを解く鍵は「ないてくれるな」「なくな」という二度繰り返されている「なくこと」の禁止であらう。つまり、強調法になっているのである。

一つは、海歌の「ないてくれるな」の刺激というか、その詞章が前提にあつて耳慣れていたということもあつたに違いない。その海歌のものも含めて、盆踊りのニワにおいて「ないてくれるな」が何か特別な意味を持っていたということを考えなければならぬ。

歌の掛け合いの場において「泣く」は「謡う」であるのだが、その禁止とすると、「歌止め」ということになるのだが、果たしてそのうなのだろうか。

盆の踊りはせいぜいで三晩である。一晩一晩、それこそ踊りぬき謡いぬきたい思いは誰にもあつて、なかなかその日の踊りを終わろうとはしない。そうしたときに、夜明けが近いというのにいつまでも謡い続け踊り続けてはいられない。「終わりにしなければ」ということを、われひとともに覚悟しようということ、もう歌を止めよう」「謡うことをやめよう」ということで、踊りの終盤に謡い出すものとして、この詞章が存在したものであつたとすると納得できるのである。

しかし、実際には、盆の踊りが祖霊の供養踊りから娯楽踊りになつ

て、「まつりの方式」にこだわらなくなって、「うたのバ」(踊りのバ)でもある)の「名残」「果て」ということもそれほど意識されなくなつたことで数多さを求めた結果(踊り歌の貪欲さ)だけの詞章のふくらみによる「ないてくれるな」であつたということであろう。

三、笠を忘れた

1、二つの「笠忘れ」の歌

「笠を忘れた」の一句を持つ歌の分布は広い。広く各地の仕事歌・踊り歌など、種々の歌に謡われている。民謡の流行詞句の代表の一つとして、その伝播・定着の相の厚さを持っている。

いはたしたえ 笠忘れたり や いはたしたえ 殿ばらも 著
くもがなや 笠まつりおかむ 笠まつりおかむ や 知らざら
む あぜかその殿ばら知らざらむ いはたなるやたべの殿は
(或は「は」を「の」となす) 近き隣を 近き隣を

東遊歌の「駿河舞」の詞章である。「笠忘れ」の歌としては、最も古いものと言えるが、ここで論じようとしている「笠を忘れた」歌からはあまりに遠い。今日の民謡の母体となつたものは、やはり近世歌謡ということにならう。

- 笠をわすれた伊勢路の茶やに 空が曇れば思ひ出す (『延享五年小歌しやうが集』)

○笠を忘れた駿河の茶屋で 空が曇れば思ひ出す (『御船唄留』)

文化五年)

- 雨は降る 船場に笠を忘れた 笠も笠 四十八取の編笠 (『鄙廼一曲』、文化六年?)

これら近世の歌謡集で確認される書承はそのまま、口承としてその後も各地の民謡の詞章として生き続けて今日にまで及んでいるのである。

前記の三例からもうかがえるのだが、「笠を忘れた」の詞章に二つの系統があつた。

一つは、後半句が「空が曇れば思ひ出す」というもの。

- 笠を忘れた箱根の茶屋に 空が曇れば思ひ出す (箱根馬子唄、静岡縣榛原郡金谷町根岸、『静岡県の民謡』)

○笠を忘れた敦賀の宿さ 西が曇れば思ひ出す (とさの砂山(十三盆踊)、青森県、『東北の民謡』)

○笠を忘れたつるがの宿さ 天気ア曇れば笠こひし (にひがた、青森県八戸付近、『東北の民謡』)

○笠を忘れた駿河の府中に お空くもれば思ひ出す (馬追唄、長野県諏訪地方、『諏訪の民謡』)

○笠を忘れた今庄の茶屋に 空が曇れば思ひ出す (石川縣能登地方、『能登の唄』)

○笠を忘れたよ 敦賀のエ、茶屋へよ エ、雨の降るたび思ひ出す (馬士唄、千葉県、『俚謡集拾遺』)

○笠を忘れた最上の茶屋に 雨の降るたび思ひ出す (麦搗き歌、岩手県気仙沼地方、『気仙沼地方童謡・民謡集』)

○笠を忘れた最上の茶屋に 雨の降るたび思ひ出す (麦搗き歌、岩手県気仙沼地方、『気仙沼地方童謡・民謡集』)

○笠を忘れたイヤノン 駿河の茶屋に 空が曇れば思ひ出すノ
（御座船唄、「歌枕」、愛媛県、「俚謡集拾遺」）

○笠を忘れた津川の宿に 西が曇れば思い出す（津川おけき、新潟
県東蒲原郡津川町、「新潟県の民謡」）

○笠を忘れた鶴賀の茶屋で 空が曇れば気にかゝる（はんや節、
鹿児島県川内町、「西薩摩の民謡」）

○笠を忘れた笠野の茶屋に 雨の降るたび思い出す（笠浜甚句、
宮城県巨理郡山元町、「みやぎの民謡」）

○笠を忘れた駿河の茶屋で 空が曇れば思い出す（松島御船歌、
宮城県宮城郡松島町、「右同」）

○笠を忘れた箱根の茶屋に 空が曇れば思い出す（箱根駕籠昇唄、
神奈川県、「日本民謡集」）

○笠を忘れて山茶花の茶屋に 空がくもれば思い出す（岳の新太
郎さん、佐賀県、「日本民謡集」）

○笠を忘れた敦賀屋の宿さ 西が曇れば思い出す（北上流し網唄、
宮城県、「東北の民謡」）

○傘を忘れた峠の茶屋に 雨の降るたび 思い出す（須賀川盆唄、
福島県中通り、「福島県民謡全集」）

○傘を忘れた免田の茶屋で ドッコイ空が曇れば思ひ出す（雑謡
肥後国、「日本民謡大全」）

○笠をわすれて峠の茶屋で そらがくもりておもひ出す（木遣唄
酒田、東京府、「俚謡集拾遺」）

○笠をおいてきた敦賀の宿で 西が曇れば思い出す（加茂盆踊り

歌、福井県越廬村、「福井県の民謡」）

○傘を忘れた 米子の茶屋へ 北が曇れば思ひ出す（雑謡、岡山
県吉備郡、「吉備郡民謡集」）

目についたものを手元の資料から拾い出して並べてみた。この類
歌の分布なり傾向というものについて、とりたてて言い立てるほど
のことはない。資料の枠をさらに広げれば、まだまだいくらでもこ
の類歌の伝承例を拾い出すことができるはずである。

そして、もう一つの展開を示している「笠忘れ」の歌についても、
管見に入ったものを列記してみようと思う。

この系統の古い伝承例は、すでに挙げた『鄙廬一曲』のものであ
る。「同じ國俗、摺白唄」とある。「同じ國」は「陸奥國」をさして
いる。現行の民謡の中での分布は、前者と比較すると、伝承地域が
かなり限られたものであったらしい。しかも、そのうち定着が色濃
いことが確認できたのは宮城県である。県教育委員会による民謡緊
急調査報告書である『みやぎの民謡』には、かなりの伝承例の報告
がある。まずその辺から列記してみる。

○雨が降る 船場に笠を 忘れ来た 笠も笠 御江戸で流は行る
菅の笠（歌い揚げ、本吉郡松岩村）

○雨が降る 船場に笠を 忘れきた（大漁歌い込み、同郡鹿折村、
小々沙ここさ）

○笠を忘れた 船場に笠を 笠も笠 お江戸ではやる 菅の笠
（長持唄、同郡志津川町入谷）

○雨が降る 舟場に笠を 忘れた 笠も笠 八ッ緒の笠を 忘れ

た(餅搗唄、玉造郡岩出山町(旧一栗村))

○雨が降るサヨイ 船場に笠を 忘れきたトエー 笠も笠 お江戸ではやる 菅の笠トエー(どや節、桃生郡雄勝町)

○雨がふるヤーヨー 船場に笠を 忘れ来たドエー かさもかさやヤーヨー お江戸ではやる菅の笠ドエー(さいたら節、宮城県七ヶ浜町松ヶ浜)

○雨が降るサヨイ船場に笠を 忘れ来ーたドエー 笠も笠 お江戸で流行る 菅の笠(麦打ち唄、本吉郡唐桑町)

『俚謡集拾遺』の「宮城県」にも本吉郡の「えせん節」として次のものを挙げている。

○雨が降る 船場に笠を忘れ来た 笠も笠 お江戸で流行る 伊達達笠(躰子省略)

『東北の民謡』にも宮城県のものとして二つ載っている。

○忘れ来た 船場に笠を忘れ来た お江戸ではやる菅の笠(銭鑄唄)

○雨が降る 船場に笠を忘れ来た 笠も笠 お江戸ではやる菅の笠(北上流し網唄)

その隣り岩手県での伝承も色濃い。

○雨が降る 船場に笠を忘れた 笠も笠 お江戸ではやる菅の笠(麦打ち歌、気仙沼地方、『気仙沼地方童謡・民謡集』)

○雨が降る ヤー船場に笠をわすれたー ヤー笠も笠 ヤー八つ緒をたてたすげの笠(麦打歌、西磐井郡)

○雨がふる ヤ船場さ笠を忘れたよ 笠も笠 ヤお江戸ではやる

菅の笠(長持歌、東磐井郡、以上二つ『俚』)

東北のこの二県の伝承例以外に「船場型」の「笠忘れ歌」の分布はそれほど見られない。次のものは、その例外的な一つといえる。

○雨降りに船場に笠を忘れきた 笠も笠だよ 京都にはやる菅の笠 ヨイトコリヤサ 仲がよい(酒屋歌へもとすり歌)、新潟県新発田市太田新田

まず、ざっと二つの型の「笠を忘れた」の詞章の分布状況を眺めてきた。なお広く資料にあたれば、いくらでもその伝承例をここに加えることができるものと思うが、すでに挙げたものが同じ程度において資料にあたり、そこから拾い出した両詞章の伝承例であるところからして、そこにこの二詞章それぞれの特徴なり傾向を指摘できるように思う。

まず伝承地の広がりにおいて、前者の「空が曇れば思い出す」型(空曇り型)のものは、その伝承地が広く、ほとんど全国的といっているのに対して、後者の「船場型」、忘れた笠の特徴というかしるしを謡うものは、岩手・宮城周辺の伝承に限られているというところである。そこにどのような事情が介在しているのかも「笠忘れ歌」の課題の一つではあるが、前者が自由に広く各地に飛んで定着することが可能であったのは、どこに忘れたのかの部分について、具体的地名を出している歌の型にかかわっているのではないかと思われる。その部分を入れ換えるだけで容易に自分達の歌、郷土の歌、つまり民謡の歌詞として受け入れられたということである。

それに対して、後者の「船場に」というのは、どこにでもあては

まるようで、かえって「自分達の歌」という実感を持ちにくかったのではないかと考えられる。

ともあれ、二つ合わせて、こうして伝承例を並記してみると、民謡の歌詞の成長・伝播をめぐっての法則性のようなもの、あるいは民謡の本質・特質といったものの解明にいくらかの暗示を得られるように思う。

2、伝播の要因

「笠忘れの歌」が各地に行なわれることになった要因としては、この歌が、

○ 旅の歌であること

○ 地名を含んでいること

○ 「笠」の歌であること

の三点が考えられる。「旅の歌であること」については、この詞章が「旅する人」の感慨に出たものであること、そしてそれを象徴するのが「笠」であること、さらに、「地名」の入れ換えで歌自体が「歩く」「旅する」ことが容易にできたということである。その上に立って、「地名」と「笠」の二点については多少の説明と分析が必要であろう。

まず「地名を含んでいること」について。

歌詞の中に「地名を含む」というのは、歌が伝播していく際、及んだ先々で最も迎えられやすい要因ということになる。地名を入れ

換えるだけで、そのまま及んだ土地の歌になり得るからである。

「空曇り型」の「笠忘れ歌」の場合、列記したのを見ても、ただ地名を入れ換えただけで各地の歌になり得ていたということの確認として十分だと思う。

そして、実は元歌の探索もこの地名部分の吟味にかかっているようなのである。前記の類歌の並記の中からだけでも、まず、この詞章の原点にあるのがツルガカスルガかということであるらしいのはわかる。その上で、ツルガ・スルガの類似音からすれば、一方から一方が出てきたと考えるのが自然であろうし、このどちらかが元歌らしいとの見当はつく。しかし、どちらが先かの見極めはそんなに容易ではないかもしれない。ただ「駿河」は陸路、「敦賀」は海路を往来する人々によって育ち、持ち運ばれてきたものであろうことは、「駿河の茶屋」となり、「敦賀の宿」となることでも知れる。

陸路・海路の両方によって運ばれて行ったことはわかるが、挙げた例の中で、陸路を移行行った形跡を見せているものが、

伊勢路の茶や 今庄の茶屋

箱根の茶屋 最上の茶屋

笠野の茶屋 山茶花の茶屋

峠の茶屋 兎田の茶屋

米子の茶屋

などである。ただし、これらが「駿河の茶屋」から生まれたのかどうかは確かめ難しい。しかし、これらの「茶屋」系はどちらかという陸路を歩いて広がったものであろうことは動くまい。

これに対して、「敦賀の宿」の方は、どこまでもツルガにこだわっていたのではないかと思われるのは、

「とさの砂山」(青森県)

「にひがた」(同)

「北山流し網唄」(「敦賀屋の宿さ」、宮城県)

「加茂盆踊り歌」(福井県)

とそのまま「ツルガ」を残していることである。さらには「敦賀の茶屋」とある千葉県の「馬士唄」、「津川の宿」と謡っている新潟県の「津川おけさ」、「鶴賀の茶屋」と謡う鹿児島県の「はんや節」なども「ツルガ」へのこだわりを捨てていないことから、その類似音に引かれての地名との入れ換えのように思われる。

ともあれ、陸路による定着の仕方と海路による定着の仕方には、そこに介在した人の生活形態の違い、それぞれ受け入れた人のこの詞章への思い入れの違いと、受け入れに働いた「うた」への姿勢の違いがあったように思われる。

陸路によって及び行ったものは、当然内陸部に直接入っていくわけであるから、野の生活・山の生活と深く関わりを持った定着をしていく。その結果の一つが自分たちの生活圏内に照らしての地名と入れ換えるという形で表われる。そして「旅の歌」から「生活の歌」としての機能をもって、盆踊りなどの踊り歌、各種の仕事歌としての定着が完了する。

一方、海路を経由して及んだものは、海歌つまり船乗りたちの歌として繰り返されるわけで、特に北前船の船頭たちがその運搬人で

あるらしいこの詞章の場合、各地の港々で謡っても、「敦賀の宿」は彼等と無縁な土地ではなかったから、特に地名を入れ換える必要はなかったし、それを受け入れた一番手である港々の宿屋の女たちも、もとより他所の流行歌として接したから、たとえ「敦賀」から遠く離れた土地での迎え入れにも何の不自然さ・不都合さも感じなかった。そのまま定着して海辺の村や町の盆踊り唄に採り込まれたりにしているのは、踊り歌の文句への貪欲さ(いくらでも歌の数が欲しいということ)からくる無頓着さばかりでなく、「敦賀」を無縁としない人々の生活、あるいは意識がその土地にある程度久しくあったからであろう。

むろん、これとてその定着の時間の経過の中で、その海辺の土地を起点に、今度は陸の歌として内陸部に向けて波及していく方向もとられていく。その時点で祝い歌・仕事歌・踊り歌など、さまざまな機能を与えられての定着の相が表われるのである。そうした機能的变化につれて、「ツルガ」も「津川」や「鶴賀」に、さらには全く別の響きの地名に置き換えられていい納得も生まれてくる。

地名の入れ換えについて、その「津川」とか「鶴賀」という、いわば中間段階の変化の例として、次のものもここに加え得る。

○ 笠を忘れた角浦つみの小屋に 雨が降るたび思い出す

新潟県岩船郡粟島村内浦の盆踊り唄の文句の一つとして伝承しているものである(昭和五十三年採集)。これは、同じ地名の入れ換えでも、もう一つ深い転化というか吸収が行なわれていて、もはや「旅の歌」ではなくなっている。「角浦」が島内(地内)の地名で

あることは、身近な地名との交換という、民謡伝播の常道として処理していいのであるが、「角浦の小屋」にならうていることに注目したい。

つまり、忘れかねている場所が漁仕事の出先小屋（浜小屋）にならうているのだ。集落からそれほど遠くない浜小屋に忘れた笠を愛くしむ思いは、雨のため漁仕事が出来なくなった日、浜小屋で二人が逢ったことへの懐しみである。その意味からすれば、北前船の船乗り男が「敦賀の宿」での馴染み女との一夜を忘れかねている思いと通じているが、粟島のそれには渡り者から島人の歌（土地の歌）としての手続きが完了している。その結果において、盆唄の戯れ歌として、踊りのニワ（集落の真中を通っているウワドオリー上通り）という通りが盆踊りの場とならうている。後には昭和三十九年の新潟地震等による隆起でできた砂浜に移る）に臨む島人の共通する感慨の表出されたものとならうている。

なお、特定の地名を入れずに、「船場に」となるのはそれだけ一般性を持つてことになる（実際のこの類歌の広がりにはある地域性があるのだが）が、「雨が降る」で謡い出すものとの折衷であるらしい。「笠を忘れた」と「雨が降る」で謡い出すものとは、同じ「笠忘れ」を謡っても、その成立や伝播経路は別のように思らう。ともに「旅をする一歩く」歌ではあるが、一方は曇り出した空を見上げての詠、他方は降り出した雨に困惑しての詠である。さらに前者は、忘れ来た笠への「しみじみとした愛しさ」を謡っているのに対して、後者は、忘れ来た流行笠への「もったいなさ」「惜しさ」を謡って

いる。しかも、そのもったいなさ、惜しさの根源にあるものは「お江戸」に対する愛惜である。

「笠を忘れた」の歌の主題は、忘れ来た場所で馴染んだ女への恋心である。それに対して「雨が降る」の歌の主題は、繁昌している「お江戸」への讚美である。「笠を忘れた」の元歌が「駿河」であれば、これにも「徳川」の家に対する讚仰があつて、二つながらにあるいどこかに脈絡を持つものかもしれないとは思つが、微妙な発想の相違があることは確かであらう。「雨が降る」の類歌の広がりには宮城・岩手・青森（津軽）に色濃いということは、伊達藩主の船遊びの歌「松島御船歌」あたりがその基盤であつたのかもしれない。

次に「笠」を謡うことについて検討を加えることにする。

もう一つ、この詞章が陸路・海路を問わず、旅行く人の歌として持ち運ばれやすかつたのは、「笠」を謡っているからであつた。

「蓑笠姿」というように、「笠」は旅仕度に欠かせないものであるが、何よりも「笠」は旅する者の象徴であつた。そこには蓑笠姿の遠来神への信仰が遠く作用して、蓑笠姿の者（まれ人）を一種畏敬の念で迎え入れた祖々の心と生活に根ざしているものであつた。

「笠を忘れた駿河の茶屋に」が前述の古い駿河の風俗歌（東遊歌「駿河舞」と脈絡があるかもしれないという見方も、「神事」から出てくる「笠の信仰」の重さ・久しさが近世期の俗謡などにも影響しているものと考えられるからであつた。

近世俗謡の「笠を謡う」旅の歌・別れ歌、

○笠を手に持ちどなたもさらば 永のお世話になりました註

などに至る前に、中国地方の田植え唄に見られる次の歌詞などには、田植えが田の神を迎えての「神事」であったことからくる「笠讚美」

「笠への愛惜」がある。

○ひるまの峠で笠を忘れたよなう 笠もよい笠化粧笠よ（広島県山縣郡、「俚謡集」）

○ひる寝がたうげに笠をわすれたよナ さらばよい笠ききやう笠

（島根県、「同」）

○お昼まの峠で笠をわすれたよな 笠はよい笠桔梗笠（同県能義郡、「俚」）

○ひるまがたうげに笠をわすれたよな かさはよいかさはたのほつれ（同県大原郡、「同」）

和歌山県にも「笠忘れ」の田植え唄の伝承がある。

○植ゑをへて後を見たらば 田中へ笠を忘れた（東牟婁郡、「和歌山県俚謡集」）

○十七が粉河参り 田中へ笠を置いて来たか忘れて来たか また行こと思て置いて来た（有田郡西部、「紀州の田植歌」）

田植え唄に「笠忘れ」の歌が深いかかわりを持っていらしいことは、次の伝承も合わせてみることができる。

○アラ 田植弁当忘れても 忘れまいぞえ 蓑と笠（鳥取県東伯郡関金地方、朝の唄註）

もったも、田植え唄のテーマとしては「笠」にこだわらない「忘

れ」そのものが大事であったかと思われるほどに、様々な物についての「忘れ」を謡う詞章がある註

ともかく、「笠忘れ」の歌は、神来臨の姿を遠くその根底に持つ蓑笠姿を人の旅装束として捉えたところで「旅の歌」の機能を持ち、実際に旅する人の手で、その人々の心情を含みつつ持ち運ばれ、その運ばれた先々で、「笠」が「うたの場」の景物であることに結びついて、船頭唄・田植え唄・麦打ち唄といった仕事歌や婚礼の祝い歌（長持ち唄——この場合、単に景物という以上に、婚礼習俗の中に広く見られる「笠」「草鞋」に関する儀礼とも合わせて、婿の訪れに重ねて遠来神の姿を感じた歴史があるのだろう）、馬追い唄といった道歌（長持ち唄は一面道歌でもある）、また盆踊り唄といった踊り歌（笠踊り）など、笠が踊り装束の道具であった）にも転用されていたのである。

3、芸謡と民謡——もう一つの「笠を忘れた」

「笠を忘れた」の歌の二系統について述べたが、その二つの接近というか混入を働きかけたのが、渡り稼ぎ人ややはり各地を渡り歩く門付けなどの祝福芸人が持ち歩いた歌（芸謡）であった。主に長編のそれらも、やがて酒席の騒ぎ歌・余興歌となって、これまた「土地の歌」として根付くことにもなるのである。

○とのさーい 西がくもれば涙が流る 傘を忘れました 駿河屋の茶屋へ とのさ行くなら取ってきておくれ 私の傘にはしるしがござる 傘が小がさで 糸ぬい傘で まはりが赤銅で 小

骨が真鍮で 傘あてどんすで 傘ひも紅絹だ ヤーレ (とのさ節、埼玉東北葛飾郡、「俚謡集」)

○笠をおいて来た ヤーレ するが富士へ 殿さエいきらば持つてきやられ わしが笠には目印がござる ふちが真鍮で 小骨が赤銅 ふとん緞子で しき緒が紅絹だ (高大寺、新潟県、「俚謡集」)

○笠を忘れた石部の宿で とりに行かれぬ持て来てくれる 空の曇るを思ひます (伊勢音頭、大阪府清水村、「大阪俚謡集」)

○忘れたがなは何々を忘れた 紅葉笠を忘れた 空が曇れば思ひ出すさ (おんこく、大阪府大阪市、「俚謡集拾遺」)

○アーヨイイサー 笠を忘れたヨ アーヨイヨイ 明星のヨ一茶屋に アーヨイヤコリヤセ アーあんたたちや行くなら とてきておくれよ 笠当てダンスで笠紐はさらして 裏にゃなあーお伊勢参りと ヨーオインソリヤ ア書いてある ソリヤヤ トコセヨイヤナ アリヤリヤコレワイセ サヨイトコセ (ヨイサ節、三重県志摩郡大王町船越、「三重県の民謡」)

○ほうどのく 津しま通ひに 関屋々々で笠を忘れた 其の笠は たゞの笠かよ へりをば銀をまはして 中は黄金の強い筋 (雨乞踊唄、和歌山県那賀郡、「和歌山県俚謡集」)

最後のものは、「雨乞い」の歌であるが、そこには「笠」を謡うことで「雨」を呼ぼうというねらいがあつたことであらうから、その点で、単なる余興歌・騒ぎ歌の場合とは違うものが「うたの心」として働いている。

4、民謡を必要とした心

民謡の生命を支えるものは曲節と詞章の二つであり、二つながら大事な要素であることは当然のことであるが、民謡が生活の場で生きていた時点では、その曲調よりは「ことば」の方により大きな機能が働いていたことであらうと思われる。それは民謡がもともと「謡うた」であつて、「聞くた」ではなかつたからである。生活の場にあつた民謡は、そこに生活する人々がすべて「謡い手」(実際には謡わない人もいたろうが、彼等も単なる聞き手ではなかつた)になつて支えていたものであつた。

むろん、実際の「うたの場」においては、より声良し・謡い上手が中心的に謡い手をつとめることはあつたろうが、それは一堂の者がその人に専門の謡い手を委ねたわけでもなく、その「謡いぶり」の見事に酔い痴れていたのでもない。誰が発唱しようと「うたの場」に居合させた者の心は、発せられたその「ことば」の中に預けられていて、そこに謡い手・聞き手といった分化はなかつた。

つまり、民謡の「ことば」は、その民謡が行なわれている社会の人々の共通感情に根ざしているものであつたのである。民謡の「ことば」(歌詞・文句)がその成立基盤に生活する人々の共通感情の表出であるとは言つても、それがその土地根生いのものである必要はなかつた。

今日の民謡と言われるものが、直接その詞章面を成立させた時期は、せいぜい近世の中期以降、明治の中頃までと考えられる。そし

て曲節的には七七七五(三四・四三・三四・五)という、いわゆる近世三味線調(都々逸調)、そして内容的には男女の恋のやりとりを終始した近世廓情緒一辺倒という、近世の流行歌が詞曲両面にわたって民謡を大きく規制したのである。

祝いの歌であれ、まつり・行事・仕事・踊りの歌であれ、土地を越え、「うたの場」の機能の枠を越えてすら行なわれている詞句及び発想の類似性は、近世三味線歌謡の隆盛と、その伝播波及のいかに徹底して行なわれたかを物語っている。それに力を貸したのが、それ以前とは比較にならないほど頻繁になった、人の往来である。

具体的には陸路・海路を行く渡り稼ぎ人や芸人という他所者のほか、神仏への信心詣でに行き帰る土地々々の人々ということになるが、「うた」を採り込む契機が何であろうと、それを自分たちの「生活のうた」として根付かせていた事実を考えると、その「うた」に対する何程かの納得がなければならなかったはずである。自分たちの日常とは違った遊里歌の情調を自分達の「生活のうた」の中に採り込む心情は何であったかを「うたの場」に戻して究明するのでなければ、民謡の詞句(歌詞)の類型化・類似性を論じても意味はなからう。

民謡の「ことば」として、各地に共通して同類詞句が語われているのは、「うたの場」の機能として娯楽性や慰安性がかりが強調された段階で、長々と続く労働の場や踊りのニワなどでは謡う歌詞を多く必要としたことから、流行歌の文句を迎え入れたことが一つ考えられる。もう一つ、流行歌の採用と合わせて類歌を生んだのは即

興歌の側面である。即興的に生み出される文句には、その場の景物を謡い込んだり、その時々的心情に大幅な表現過多を採用して文句仕立てをしたものが多い。一座の哄笑を生む猥雑な詞句仕立ての戯れ文句が生まれるのもこうした側面である。即興歌の過剰表現を好む心と廓情緒から出た恋の流行歌の非現実性・非日常性を弄んだ心は共通していて、それが「うたを必要とした心」の一面にあったのである。

さらに「うた」の移入と即興仕立てに絡んで、一層民謡歌詞の類型化現象を作り出したのが既製の歌詞を元歌にしての作り替えである。一部詞句の入れ替えと発想を真似ての案出、つまり替え歌である。

「うた」の移入がもたらした同一文句の各地での定着の相を横の類型化とすれば、一地域での即興歌・替え歌による類似性は縦の類型化と言える。両者は相互に刺激し合いながら伝承されていく中で多少の才覚(文芸的欲求といってもいい)が働いて、例えば地名を入れ換えての採用といったことも含めて、何とか「自分等のうた」として承認するための手直しをしていく。その「手直し」が妥当なものという承認を獲得したものは、反復演唱という中でよりしっかりと「土地の歌」として定着していくのである。

「敦賀の宿」を「角浦の小屋」とすることで、「笠を忘れた」の歌を土地の盆唄にした心こそ、民謡を必要とし育ててきた心であった。

注1、町田嘉章・浅野建二著（岩波文庫）

注2、柳田国男「母の手毬歌」（『村の学童』所収、昭和二四）

注3、注1同書「磯節」解説（二二四頁）

注4、「民謡緊急調査報告書」新潟県教育委員会、昭和六一・三

注5、高野班山・大竹紫葉共編、大正四・四、六合館

注6、注5同書の新潟県の部では「盆踊唄」としてあげている。

注7、例えば、山形県の「新庄節」の、

○あの山高くて新庄が見えぬ 新庄恋しや山憎くや

という望郷歌に、

○猿羽根山越え舟形越えて 逢いに來たぞえ万場町に

という遊廓通いの詞章が混入してるといったことである。

注8、牛尾三千夫「踏鞴唄きゝがき抄」（『民謡研究』一の一）

注9、以下「見えます太閤さんの坂よ まへは淀川舟がつく」「淀川舟

がつけやござれ ひよい大阪がはんじよする」と続く。

注10、山形県の「新庄節」のほかにも、いくつもの類歌が拾える。

○あの山高いので我家が見えぬ 我家恋しや山憎くや（子守唄、

三重県、『日本歌謡集成』二三）

○山高くて馬関が見えぬ 関は恋しや山憎い（雑謡、山口県、

【同】）

○山高くてあの家が見えぬ あの娘恋しや山にくや（舞踊歌、

島根県、『同』）

○山が高うて山中見えぬ 山中恋しや山憎くや（山中節、石川県、

【日本民謡集】）

○山が高うてといちが見えぬ といちかわいや山憎い（田の草取

唄、岡山県川上郡川上町、『岡山の民謡』）

○山が高うてあの家が見えぬ あの家恋しや山にくや（木挽き唄、

岡山県久米郡久米南町、『同』）

この方は、わが故郷・家が見えぬというだけでなく、「いとしい

人の家が見えぬ」という展開を見せて、恋歌にも転換していくが、

「くが見えますほのぼのと」の方は恋歌への転換は成立していない。

なお、見たいものを見えなくする「山が憎い」という歌は、遠く

『万葉集』の柿本人麿の「妹が門見む 靡けこの山」（巻二、一三

一）にも通じているし、現行民謡では次のような「山よ退け」とい

う詠い口にもなっている。

○山もと山が退いたらよかる 塩津が見得て尚なかる（杵唄、白

曳歌、淡海國、『鄙廼一曲』〈菅江真澄、文化六頃〉）

注11、祭礼、盆踊りに謡うとしている。

注12、『東北の民謡』には、50歌とこの二章のほかに次の二章の五章を

「おたつ酒唄」として挙げています。

○今日は日もよし天気もよいし 七福神のお酒盛

○障子あければ紅葉の座敷 お客そろそろ立田川

注13、「静岡県文化財報告書第三十四集」文化財保護協会、昭和六一・

三

注14、南栄三著、「旅と伝説」九の八・九（『日本民俗大系』十一巻所収）

注15、気仙沼郷土文化研究会、昭一一・一（『日本庶民生活史料集成』

二十四巻所収）

注16、「旧字和島藩主乗船の時の唄」という注記がある。

注17、鹿児島県立川内中学校編、昭和二二・二二（『日本庶民生活史料

集成』二十四卷所収）

注18、宮城県教育委員会編、昭和六〇・三

注19、福島県民謡連盟編、昭和五五・四、高島書房

注20、童謡研究会（橋本繁）編、大正一五、春陽堂

注21、福井県民俗学会編・発行、昭和四二・七

注22、炉辺叢書、楨本楠郎編、大正一四・三、郷土研究社

注23、「俚謡集拾遺」「附録、明治年間流行唄」にも「えせん節」として載る。

注24、「新発田地方の民謡」（昔しばた暮らし叢書第二集）

注25、馬子唄のほか、婚礼歌である「お立酒」「長持ち唄」などにも謡われて、これも各地の民謡として定着している。

○ 笠を手に持ち両親^{よとせ}さまよ 重ねがさねのいとま乞い

○ 笠を手に持ちふた親さまによね 今度来るとき孫を抱いてよ
といった詞章変化もある。

注26、県立日方高等女学校郷土研究室、「郷土研究」第二輯、昭和一一・三

注27、与田倉之助・与田左門（『紀州文化研究』二の三、昭和一三・三所収）。同じものが「紀州有田民俗誌」（笠松彬雄、炉辺叢書、郷土

研究社、昭和二・一〇）にも載る。

注28、松本穰葉子『鳥取県民謡100選』

注29、いくつか例を拾い出すことにする。

○ けしよい道具忘れた

○ 髪かいけづり忘れた（以上、広島県安佐郡）

○ 箸の台を忘れた（同県安佐郡・高田郡、山口県阿武郡）

○ 箸を落とした落としたら忘れたやう（広島県高田郡）

○ 木挽は墨とかね忘れた

○ 大工はのみとかんなを忘れた（以上、広島県比婆郡）

注30、後藤捷一編（『上方』12号、昭和六・一二所収）

注31、「民謡緊急調査報告書」三重県教育委員会、平成二・三

表 題	書 名	頁	初出年
京大教授時代—西田先生夏日清談	わたしの生涯から	173～180	
京大教授時代—西田先生のこと(1)	わたしの生涯から	181～184	
京大教授時代—西田先生のこと(2)	わたしの生涯から	185～198	
京大教授時代—浜田耕作先生のこと	わたしの生涯から	199～208	
京大教授時代—浜田総長の追憶	わたしの生涯から	209～212	
—高校長時代—高校長就任の辞	わたしの生涯から	213～219	
—高校長時代—新入学生諸君を迎う	わたしの生涯から	220～227	
—高校長時代—高記念祭に寄せる	わたしの生涯から	228～229	
—高校長時代—高を去るに際して	わたしの生涯から	230～232	
文部大臣時代—就任の感想	わたしの生涯から	233～240	
文部大臣時代—文部行政二ケ年	わたしの生涯から	241～255	
神と人とに仕える道	わたしの生涯から	256～260	
弱い少年	若き日の思い出	36～ 38	
才能を見出す	若き日の思い出	38～ 40	
玉磨かざれば光なし	若き日の思い出	40～ 41	
カント	私の好きな人	11～ 16	
“相模気質”で陸軍批判	わが人生	9～ 12	
面白かった通俗三国志	わが人生	13～ 16	
小学二年から常に主席	わが人生	17～ 20	
自然児のように過ごす	わが人生	21～ 24	
政治にささげた父	わが人生	27～ 30	
親友ができた獨協時代	わが人生	31～ 34	
教育者になるため復学	わが人生	35～ 38	
野球から多く学ぶ	わが人生	39～ 42	
名著を読みふける	わが人生	43～ 46	
哲学は岩元先生の勧め	わが人生	47～ 50	
終生の研究対象にカント	わが人生	51～ 54	
独語教師で教壇に	わが人生	55～ 58	
カントの翻訳に全力	わが人生	59～ 62	
師の勧めで京大復帰	わが人生	63～ 65	
忘れ得ぬ筆禍事件	わが人生	66～ 68	
横暴な軍部と闘う	わが人生	69～ 71	
—高の校長に就任	わが人生	72～ 74	
懐かしの—高去る	わが人生	75～ 78	
育英制度の拡充に努める	わが人生	79～ 82	
総理(吉田)の懇請で文相に	わが人生	87～ 90	
印象深い「教員給与法」	わが人生	91～ 94	
自由学園の理事長に	わが人生	95～ 98	
理想実現に大学を創立	わが人生	99～102	
社会生活に必要な道徳	わが人生	103～106	
決断に大使責任を負う	わが人生	107～110	

表 題	書 名	頁	初出年
生活のうらおい	若き女性のために	55～ 64	
運命と幸福	若き女性のために	65～ 80	
幸福の一断面	若き女性のために	81～ 86	
新年の言葉 (1)	若き女性のために	87～ 92	
新年の言葉 (2)	若き女性のために	93～ 97	
新春の感想	若き女性のために	99～101	
文化と教養	若き女性のために	103～113	
教育と社会	若き女性のために	115～127	
教育問答	若き女性のために	129～132	
女性の敬重	若き女性のために	133～135	
教養ということ	若き女性のために	137～140	
これからの家庭教育	若き女性のために	141～153	
若き青年学徒に与う	若き女性のために	155～160	
学習の原則	若き女性のために	161～166	
私の少年時代	若き女性のために	167～172	
思い出の先生	若き女性のために	173～177	
わが母のことなど	若き女性のために	179～182	
感心したことしないこと	若き女性のために	183～186	
満 点	若き女性のために	187～190	
自然と人生	若き女性のために	191～195	
短文五章一新 年	若き女性のために	197～198	
短文五章一手のない話	若き女性のために	198～199	
短文五章一ひとの運命	若き女性のために	200～202	
短文五章一世界をわが家に	若き女性のために	202～203	
短文五章一歴史を信ぜよ	若き女性のために	204～207	
短文五章一自覚と反省	若き女性のために	209～227	
わたしの生涯から	わたしの生涯から	1～ 18	
小中学時代一わがふるさと	わたしの生涯から	19～ 20	
小中学時代一わたしの少年時代	わたしの生涯から	21～ 26	
小中学時代一わたしの中学時代	わたしの生涯から	27～ 31	
小中学時代一わが母のことなど	わたしの生涯から	32～ 35	
小中学時代一私の歩んだ道	わたしの生涯から	36～ 45	
小中学時代一野球と私	わたしの生涯から	46～ 58	
一高時代一岩元先生の追憶	わたしの生涯から	59～ 63	
一高時代一一高の思い出	わたしの生涯から	64～ 76	
一高時代一九鬼君のこと	わたしの生涯から	77～ 89	
一高時代一岩下壮一君の追憶	わたしの生涯から	90～ 93	
一高時代一九鬼・岩下両君のことなど	わたしの生涯から	94～107	
一高時代一内村鑑三先生のこと (1)	わたしの生涯から	108～115	
一高時代一内村鑑三先生のこと (2)	わたしの生涯から	116～121	
京大学生時代一姉崎博士のことなど	わたしの生涯から	122～134	
京代学生時代一大学を出た頃のこと	わたしの生涯から	135～139	
京代学生時代一不幸な天才者	わたしの生涯から	140～143	
七高時代一ドクトル・クレスレルのことなど	わたしの生涯から	144～156	
七高時代一学習院教授・商大講師時代	わたしの生涯から		
七高時代一本多謙三君の追憶	わたしの生涯から	157～159	
留学時代一ハイデルベルクの思い出	わたしの生涯から	160～168	
留学時代一日本的なるもの	わたしの生涯から	169～172	

表 題	書 名	頁	初出年
甲南高校長時代—読書の思い出（東京堂月報・学生に与ふる書）	忘れえぬ人々	332～337	1939
小さな自画像	私たちはどう生きるか	8～ 10	
おむすびの思い出	私たちはどう生きるか	11～ 13	
春のおもい	私たちはどう生きるか	14～ 19	
武 蔵 野	私たちはどう生きるか	20～ 23	
青春なき青春の記	私たちはどう生きるか	24～ 31	
大学を出たころのこと	私たちはどう生きるか	32～ 36	
わたしの生活から	私たちはどう生きるか	37～ 41	
新しい社会人のために	私たちはどう生きるか	42～ 54	
今の世を生きぬく力	私たちはどう生きるか	55～ 60	
人間形成のために	私たちはどう生きるか	61～ 65	
人間の活動について	私たちはどう生きるか	66～ 77	
幸福について	私たちはどう生きるか	78～ 87	
読書について	私たちはどう生きるか	88～ 94	
わたしの読書生活	私たちはどう生きるか	95～ 99	
「泣虫小僧」をみる	私たちはどう生きるか	100～104	
人間の尊重	私たちはどう生きるか	105～119	
内村先生とわたし	私たちはどう生きるか	120～123	
死んだつもり	私たちはどう生きるか	124～126	
時間の審判	私たちはどう生きるか	127～131	
あるドイツ婦人のこと	私たちはどう生きるか	132～137	
責任ということ	私たちはどう生きるか	138～141	
スポーツに学ぶ	私たちはどう生きるか	142～145	
人生哲学と野球哲学	私たちはどう生きるか	146～148	
スポーツと人生	私たちはどう生きるか	149～154	
野球とわたし	私たちはどう生きるか	155～169	
知者と愛知者	私たちはどう生きるか	170～172	
永久平和へのあこがれ	私たちはどう生きるか	173～176	
平和をねがう心	私たちはどう生きるか	177～179	
眠っていた良心	私たちはどう生きるか	180～183	
人間生活の大道	私たちはどう生きるか	184～190	
旧道徳と新道徳	私たちはどう生きるか	191～212	
友情について	私たちはどう生きるか	213～223	
わたしの歩んだ道	私たちはどう生きるか	224～234	
学園を巣立つ諸君へ	私たちはどう生きるか	235～238	
新しい時代に生きる女性たちへ	若き女性のために	1～ 16	
婦人学徒に与う	若き女性のために	17～ 24	
若き女性に与う	若き女性のために	25～ 32	
若き人達と幸福を語る	若き女性のために	33～ 44	
幸福の意味	若き女性のために		
快楽と苦痛	若き女性のために	45～ 46	
快楽と幸福	若き女性のために	46～ 47	
完全な幸福とは	若き女性のために	48	
豚の幸福とソクラテスの不幸	若き女性のために	48～ 50	
徳に即しての活動	若き女性のために	50～ 51	
正直者が損をしない社会	若き女性のために	51～ 52	
幸福の女神の話	若き女性のために	52～ 54	
幸福の秘密	若き女性のために	54	

表 題	書 名	頁	初出年
新年に際して高校生に与う (高校新聞・教育試論)	若き人たちへ	293~301	1948
高等学校新聞の発刊に寄す (" ")	若き人たちへ	302~308	1947
青年諸君に与う (民衆大学 生きゆく道)	若き人たちへ	309~317	1947
若き人達と幸福を語る (若き女性のために)	若き人たちへ	318~329	
生活への勇氣 (鉄道文化・生きゆく道)	若き人たちへ	330~340	1946
小・中学時代一わがふるさと (京都帝大新聞・信念と実践)	忘れえぬ人々	14~ 15	1941
小・中学時代一わたしの少年時代 (真理の国・若き女性のために)	忘れえぬ人々	16~ 22	1946
小・中学時代一思い出の先生 (" ")	忘れえぬ人々	23~ 27	1947
小・中学時代一わが母のことなど (現代・私の人生観)	忘れえぬ人々	28~ 31	1941
小・中学時代一村野常右衛門氏のことなど (政界往来・私の人生観)	忘れえぬ人々	32~ 36	1941
小・中学時代一三樹一平氏の追憶 (桂川遺響)	忘れえぬ人々	37~ 41	1925
小・中学時代一斎藤君の話 (財政・信念と実践)	忘れえぬ人々	42~ 46	1941
一高時代一岩元先生の追憶 (一高会誌・信念と実践)	忘れえぬ人々	48~ 52	1941
一高時代一高の思い出 (信念と実践)	忘れえぬ人々	53~ 68	1944
一高時代一九鬼君のこと (1) (思想「をりにふれて」後語・信念と実践)	忘れえぬ人々	69~ 76	1941
一高時代一九鬼君のこと (2) (思想「をりにふれて」後語・信念と実践)	忘れえぬ人々	76~ 84	1941
一高時代一岩下壮一君の追憶 (カトリック新聞・私の人生観)	忘れえぬ人々	85~ 88	1940
一高時代一九鬼・岩下両君のことなど (朝日評論)	忘れえぬ人々	89~105	1948
一高時代一牛山茂樹君の追憶 (信濃文芸・学生に与ふる書)	忘れえぬ人々	106~109	1937
一高時代一立沢君の追憶 (向陵時報)	忘れえぬ人々	110~114	1936
一高時代一内村鑑三先生のこと (1) (京都帝大新聞・道理の感覚)	忘れえぬ人々	115~124	1932
一高時代一内村鑑三先生のこと (2) (内村全集附録月報・道理の感覚)	忘れえぬ人々	125~ 31	1933
一高時代一人物雑話 (夕刊大阪新聞・学生に与ふる書)	忘れえぬ人々	132~137	
京大学生時代一姉崎博士のことなど (改造文芸)	忘れえぬ人々	140~155	1949
京大学生時代一京大文学部三十周年感想 (京大文学部三十周年史・道理の感覚)	忘れえぬ人々	156~159	1936
京大学生時代一大学を出た頃のこと (人間・如何に生くべきか)	忘れえぬ人々	160~164	1949
七高教授時代一不幸な天才者 (文芸春秋・学生に与ふる書)	忘れえぬ人々	166~170	1937
七高教授時代一ドクトル・クレスレルのことなど (朝日評論)	忘れえぬ人々	171~186	1948
学習院教授・商大講師時代一本多謙三君の追憶 (一ツ橋新聞・学生に与ふる書)	忘れえぬ人々	188~191	1938
留学時代一ハイデルベルク学派の人々 (理想・学生に与ふる書)	忘れえぬ人々	194~202	1938
留学時代一ハイデルベルクの思い出 (京都帝大新聞・道理の感覚)	忘れえぬ人々	203~213	1931
留学時代一鶏が神経質になる話 (文芸春秋・道理の感覚)	忘れえぬ人々	214~217	1937
留学時代一日本的なるもの (文芸春秋・学生に与ふる書)	忘れえぬ人々	218~222	1938
京大教授時代一アマゴとアナゴ (洛味・私の人生観)	忘れえぬ人々	224~227	1940
京大教授時代一西田先生夏日清談 (文芸・信念と実践)	忘れえぬ人々	228~237	1942
京大教授時代一西田先生のこと (1) (思想)	忘れえぬ人々	238~242	1945
京大教授時代一西田先生のこと (2) (新潮)	忘れえぬ人々	243~259	1947
京大教授時代一濱田耕作先生のこと (知性・学生に与ふる書)	忘れえぬ人々	260~271	1938
京大教授時代一濱田総長の追憶 (京都帝大新聞・学生に与ふる書)	忘れえぬ人々	272~276	1938
京大教授時代一清徳君のこと (「形而上学」序)	忘れえぬ人々	277~278	1939
京大教授時代一哲学精神の実践 (週刊朝日・信念と実践)	忘れえぬ人々	279~282	1941
京大教授時代一カメラートとフロイント (京都帝大新聞・私の人生観)	忘れえぬ人々	283~286	1940
京大教授時代一京大教授回顧録 (構想)	忘れえぬ人々	287~301	1945
甲南高校長時代一平生先生寿祝賀式式辞 (甲南)	忘れえぬ人々	304~311	1942
甲南高校長時代一この生涯を見よ (毎日新聞・信念と実践)	忘れえぬ人々	312~317	1943
甲南高校長時代一高校長異語 岩波さんの追憶 (信濃教育)	忘れえぬ人々	320~323	1946
甲南高校長時代一岩波書店回顧三十年感謝晩餐会における挨拶	忘れえぬ人々	324~325	1942
甲南高校長時代一岩井希夫君「病床哲学」序	忘れえぬ人々	326~330	1948

表 題	書 名	頁	初出年
如何に生きべきか—何をたよりに生きるか	日日の倫理わたしの人生案内	62～ 64	
如何に生きべきか—道徳は変化するか	日日の倫理わたしの人生案内	64～ 68	
如何に生きべきか—中道を求めて	日日の倫理わたしの人生案内	68～ 76	
如何に医くべきか—人生の目的	日日の倫理わたしの人生案内	76～ 79	
如何に生きべきか—時 間	日日の倫理わたしの人生案内	79～ 82	
個人と国家—運 命	日日の倫理わたしの人生案内	84～ 86	
個人と国家—国家と個人	日日の倫理わたしの人生案内	86～ 88	
個人と国家—止揚ということ	日日の倫理わたしの人生案内	88～ 91	
個人と国家—逆コース	日日の倫理わたしの人生案内	91～ 93	
個人と国家—独立日本	日日の倫理わたしの人生案内	93～ 95	
個人と国家—愛について	日日の倫理わたしの人生案内	95～ 97	
個人と国家—愛 国 心	日日の倫理わたしの人生案内	98～ 99	
個人と国家—象徴ということ	日日の倫理わたしの人生案内	99～102	
道徳教育その他—学生諸君に懇う	日日の倫理わたしの人生案内	104～109	
道徳教育その他—断定に先立って研究すること	日日の倫理わたしの人生案内	109～111	
道徳教育その他—歴史教育と愛国心	日日の倫理わたしの人生案内	112～114	
道徳教育その他—道徳教育について 長野県筑西部支会における講演筆記	日日の倫理わたしの人生案内	115～160	1953
道徳教育その他—わたしの心境「実践要領」をめぐって	日日の倫理わたしの人生案内	161～168	1951
現代学生論（読売新聞・道理への意志）	若き人たちへ	7～ 12	1940
学問と人生（改造・道理への意志）	若き人たちへ	13～ 29	1940
学問の進歩と普及（潮流・教育試論）	若き人たちへ	30～ 46	1948
読書論（知性・学生に与うる書）	若き人たちへ	47～ 64	1939
読書と思考について（都新聞・学生に与うる書）	若き人たちへ	65～ 76	1939
友情論（学生に与うる書）	若き人たちへ	77～ 93	1939
友情・同情・愛（新愛知・道理への意志）	若き人たちへ	94～103	1940
学生と音楽（音楽評論・学生に与うる書）	若き人たちへ	104～108	
学生とアルバイト（中部日本新聞・教育試論）	若き人たちへ	109～112	1948
学生と犯罪（中部日本新聞・教育試論）	若き人たちへ	113～116	1948
幸福について（婦人公論・道理への意志）	若き人たちへ	117～132	1940
新入学生諸君を迎う（京都帝大新聞・私の人生観）	若き人たちへ	133～145	1940
新学年に際して学生諸君に与う（読売新聞・道理への意志）	若き人たちへ	146～153	1940
年少諸君に与う（甲南・私の人生観）	若き人たちへ	154～159	1941
学生諸君に与う（学生諸君に与うる書）	若き人たちへ	160～179	1939
学生・学友会・学生課（京都帝大新聞・学生に与うる書）	若き人たちへ	180～194	1938
就職に対する心構え（ “ ” ）	若き人たちへ	195～197	1938
落第の悩み（私の人生観）	若き人たちへ	198～200	
文化と教養（若き女性のために）	若き人たちへ	201～212	1947
学習の原則（蛭雪時代・若き女性のために）	若き人たちへ	213～218	1949
青年学徒に懇う（毎日新聞・生きゆく道）	若き人たちへ	219～226	1946
年少学徒に与う（若き女性のために）	若き人たちへ	227～232	
新しい時代に生きる女性たちへ（婦人・若き女性のために）	若き人たちへ	233～248	1948
若き女性に与う（若き女性のために）	若き人たちへ	249～256	
婦人学徒に与う（ “ ” ）	若き人たちへ	257～264	
—高校長就任の辞（向陵時報・教育試論）	若き人たちへ	265～273	1946
新入学諸君を迎う（教育試論）	若き人たちへ	274～283	1947
—高記念祭へ寄せる（記念祭パンフレット教育試論）	若き人たちへ	284～285	1948
—高記念祭に際して（ “ ” ）	若き人たちへ	286～288	1948
—高を去るに際して（生きゆく道・教育試論）	若き人たちへ	289～292	1948

表 題	書 名	頁	初出年
愛 国 心—皇室と国民	日日の生活	37～ 39	
愛 国 心—男女の友情	日日の生活	39～ 41	
愛 国 心—平和条約の成立	日日の生活	41～ 42	
愛 国 心—如何に生きべきか	日日の生活	43～ 44	
愛 国 心—何をたよりに生きるか	日日の生活	45～ 47	
愛 国 心—母への思慕	日日の生活	47～ 48	1951
愛 国 心—勤労者のために	日日の生活		
勤労者のために—働くこと	日日の生活	50～ 52	1951
勤労者のために—人生観ということ	日日の生活	52～ 55	1951
勤労者のために—人生の目的	日日の生活	55～ 58	
勤労者のために—文化ということ	日日の生活	58～ 60	
勤労者のために—決断と責任	日日の生活	61～ 63	
勤労者のために—国家と個人	日日の生活	63～ 65	
勤労者のために—象徴ということ	日日の生活	66～ 68	
勤労者のために—道徳は変化するか	日日の生活	68～ 73	
勤労者のために—講話の問題	日日の生活	73～ 76	
勤労者のために—断定に先立って研究すること	日日の生活	76～ 78	
勤労者のために—人生の大道	日日の生活	78～ 80	
わたしの生活から—わたしの顔	日日の生活	82～ 83	
わたしの生活から—自己を語る	日日の生活	83～ 84	
わたしの生活から—わたしの心境「実践要領」をめぐって	日日の生活	85～ 94	1951
わたしの生活から—就任の感想	日日の生活	94～103	
わたしの生活から—学生諸君に懇う	日日の生活	104～110	
わたしの生活から—米国教育使節団を迎えて	日日の生活	110～115	
わたしの生活から—長岡博士の葬儀に列して	日日の生活	115～118	
わたしの生活から—中道を求めて	日日の生活	118～127	
人間とはどういうものか—精神と物質	日日の倫理わたしの人生案内	6～ 10	
人間とはどういうものか—物 と 心	日日の倫理わたしの人生案内	10～ 12	
人間とはどういうものか—道理の感覚	日日の倫理わたしの人生案内	13～ 14	
人間とはどういうものか—人 間	日日の倫理わたしの人生案内	14～ 16	
人間とはどういうものか—抽象的ということ	日日の倫理わたしの人生案内	16～ 19	
人間とはどういうものか—人格と自由	日日の倫理わたしの人生案内	19～ 24	
人間とはどういうものか—人間の品位	日日の倫理わたしの人生案内	24～ 25	
人間とはどういうものか—人間の尊重	日日の倫理わたしの人生案内	26～ 28	
人間とはどういうものか—人間の尊厳	日日の倫理わたしの人生案内	28～ 30	
人間とはどういうものか—自分と他人	日日の倫理わたしの人生案内	30～ 32	
如何に生きべきか—人生観ということ	日日の倫理わたしの人生案内	34～ 36	
如何に生きべきか—人生の二途	日日の倫理わたしの人生案内	36～ 37	
如何に生きべきか—人生の大道	日日の倫理わたしの人生案内	38～ 39	
如何に生きべきか—さ が す	日日の倫理わたしの人生案内	39～ 41	
如何に生きべきか—日日の生き方	日日の倫理わたしの人生案内	41～ 43	
如何に生きべきか—働 く こ と	日日の倫理わたしの人生案内	43～ 45	
如何に生きべきか—高能率・高賃金	日日の倫理わたしの人生案内	46～ 48	
如何に生きべきか—一人に仕える心	日日の倫理わたしの人生案内	48～ 51	
如何に生きべきか—決断と責任	日日の倫理わたしの人生案内	51～ 53	
如何に生きべきか—人さまざま	日日の倫理わたしの人生案内	53～ 55	
如何に生きべきか—読書について	日日の倫理わたしの人生案内	56～ 58	
如何に生きべきか—人間の優等生	日日の倫理わたしの人生案内	58～ 61	

表 題	書 名	頁	初出年
知育の徳育性 (学生評論)	道理の感覚	155~163	1936
個体と全体 (信濃教育・信濃教育会総集会講演)	道理の感覚	164~196	1936
夏日随想—夏の幸福 (帝国大学新聞)	道理の感覚	197~201	1936
夏日随想—私の銷夏生活 (京都日日新聞)	道理の感覚	201~203	1936
夏日随想—野球見物 (京都帝大新聞)	道理の感覚	203~206	1936
人生の諸相 (1) (夕刊大阪新聞)	道理の感覚	207~212	1936
人生の諸相 (2) (夕刊大阪新聞)	道理の感覚	213~215	1937
ヒューマニズムについて	道理の感覚	216~232	1936
鶏が神経質になる話 (文芸春秋)	道理の感覚	233~237	1937
徳育について (教育)	道理の感覚	238~263	1937
道理について 三輪・岩垂・鶴飼三先生記念会講演	道理の感覚	264~288	1937
発刊のことば (巻頭語につき頁づけなし)	童話集 そよ風	頁づけなし	
西田幾太郎に学ぶべきもの (燈影撰書)	西田幾太郎とその弟子	7~ 41	
人間・政治・教育—人間とは何か	人間・政治・教育	3~ 5	
人間・政治・教育—人間と理性	人間・政治・教育	6~ 9	
人間・政治・教育—人間と環境のちから	人間・政治・教育	9~ 12	
人間・政治・教育—運命をになう	人間・政治・教育	12~ 14	
人間・政治・教育—決断する「自由」	人間・政治・教育	14~ 16	
人間・政治・教育—「手段」と「目的」	人間・政治・教育	16~ 20	
人間・政治・教育—道徳は変わらない	人間・政治・教育	20~ 23	
人間・政治・教育—道徳は変わる	人間・政治・教育	23~ 26	
人間・政治・教育—必要条件と十分条件	人間・政治・教育	26~ 29	
人間・政治・教育—道徳教育の方法	人間・政治・教育	29~ 31	
人間・政治・教育—「愛国」の意味	人間・政治・教育	31~ 35	
天皇について	人間・政治・教育	35~ 38	
平和の問題	人間・政治・教育	38~ 40	
教育の政治的中立	人間・政治・教育	40~ 46	
日本の将来と教育	人間・政治・教育	46~ 48	
女性のために—新年の言葉	日日の生活	1~ 3	
女性のために—湯川博士	日日の生活	4~ 5	
女性のために—人間の品位	日日の生活	5~ 7	
女性のために—時代の苦悶	日日の生活	7~ 9	
女性のために—女性の解放	日日の生活	9~ 10	
女性のために—人生の春	日日の生活	11~ 12	
女性のために—真実への願い	日日の生活	13~ 14	
女性のために—人生の二途	日日の生活	14~ 16	
女性のために—わたしの生活から	日日の生活	16~ 18	
女性のために—「婦人公論」四百号の感想	日日の生活	18~ 19	
女性のために—道理の感覚	日日の生活	19~ 21	
女性のために—ひろい心	日日の生活	21~ 23	
女性のために—新 生	日日の生活	23~ 24	
女性のために—国旗と国家	日日の生活	25~ 26	
女性のために—信 頼	日日の生活	26~ 28	
愛 国 心	日日の生活	28~ 32	
愛 国 心—自分と他人	日日の生活	30~ 32	
愛 国 心—お説教	日日の生活	32~ 33	
愛 国 心—日曜日	日日の生活	34~ 35	
愛 国 心—女性の解放	日日の生活	35~ 37	

表 題	書 名	頁	初出年
序言 桑木厳翼 共訳	哲学序説	1~ 26	
凡ての形而上的認識の特質に関する緒言	哲学序説		
形而上学の起源について	哲学序説	27~ 29	
形而上的と称し得る唯一の認識方法について	哲学序説	29~ 38	
判断を一般に分析的と総合的とに分かつことに関する注意	哲学序説	39~ 41	
一般的問題—一般に形而上学は可能なるか	哲学序説	41~ 53	
一般的問題—如何して純粋理性による認識は可能なるか	哲学序説	53~ 65	
先験的主要問題 第一篇 如何にして純粋数学は可能なるか	哲学序説	67~101	
先験的主要問題 第二篇 如何にして純粋自然科学は可能なるか	哲学序説	103~168	
純粋自然科学に対する附録	哲学序説	168~177	
先験的主要問題 第三篇 如何にして形而上学一般は可能なるか	哲学序説	179~194	
一 心理学的理念	哲学序説	194~204	
二 宇宙論的理念	哲学序説	204~226	
三 神学的理念	哲学序説	227~228	
先験的理念に対する一般の注意	哲学序説	229~232	
結語 純粋理性の限界決定に就いて	哲学序説	233~267	
一般的問題の解答—如何にして学としての形而上学は可能なるか	哲学序説	268~284	
附録 学としての形而上学を実現するために為し得る事に関して	哲学序説	285~287	
「批判」を攻究せず之に下した批判の見本	哲学序説	287~304	
「批判」を判定する前に之を研究することの建議	哲学序説	304~314	
附 註	哲学序説	316~337	
訳者附録	哲学序説		
「純粋理性批判」に対するゲッテンゲン学派の批判	哲学序説	340~354	
「序説」の出版後ガルヴェのカントに送れる手紙・同返書	哲学序説	354~386	
イムマヌエル・カント略年譜	哲学序説	387~404	
読書のことなど	読書のすすめ	82~ 84	1950
友情・同情・愛(新愛知)	道理への意志	1~ 13	1940
学問と人生(改造)	道理への意志	15~ 35	1940
東洋的学問と西洋的学問(理想)	道理への意志	37~ 47	1939
社会生活の反省(日本評論)	道理への意志	49~ 66	1940
生形成と個人性(文芸春秋)	道理への意志	67~ 94	1939
現代学生論(読売新聞)	道理への意志	95~102	1940
新学年に際して学生諸君に与ふ	道理への意志	103~113	
自覚と自負(日本評論)	道理への意志	115~136	1937
大学の理念(中央公論)	道理への意志	131~163	1940
幸福について—若き女性に与ふ(婦人公論)	道理への意志	165~185	1940
人生の道(公論)	道理への意志	187~199	1940
人間の苦悩と創造	道理への意志	201~243	
ハイデルベルクの思い出(京都帝大新聞)	道理の感覚	1~ 12	1931
内村鑑三先生のこと(1)(京都帝大新聞)	道理の感覚	13~ 23	1932
内村鑑三先生のこと(2)(内村全集附録月報)	道理の感覚	23~ 30	1933
自由の問題(旧題 人格と自由)(岩波哲学講座)	道理の感覚	31~ 98	1932
国難の克服(青年)	道理の感覚	99~106	1933
貧乏論(1)高田教授の「貧乏の話」を読む	道理の感覚	107~120	
貧乏論(2)貧乏に関する高田教授の解明を読む(京都帝大新聞)	道理の感覚	120~129	1934
貧乏論追記(京都帝大新聞)	道理の感覚	130~133	1935
人生私見(旧題 実在と人世)(経済往来)	道理の感覚	134~150	1935
京大文学部三十周年感想—明治から大正へ(京大文学部30周年史)	道理の感覚	151~154	1936

表 題	書 名	頁	初出年
新年(第一新聞・若き女性のために)	随 想 録	165	1947
新春の感想(第一新聞・若き女性のために)	随 想 録	166~168	1948
自然と人生(地 上・若き女性のために)	随 想 録	169~173	1948
満 点(地 上・若き女性のために)	随 想 録	174~177	1947
春が来た(中央公論・私の人生観)	随 想 録	178~189	1940
「泣蟲小僧」を観る(夕刊大阪新聞・学生に与ふる書)	随 想 録	190~194	1938
夏日随想一夏の幸福(帝国大学新聞・道理の感覚)	随 想 録	195~199	1936
夏日随想一私の銷夏生活(京都日日新聞・道理の感覚)	随 想 録	199~200	1936
夏日随想一野球見物(京都帝大新聞・道理の感覚)	随 想 録	200~203	1936
スポーツと人生(帝国大学新聞・学生に与ふる書)	随 想 録	204~209	1938
人生の諸相(1)(夕刊大阪新聞・道理の感覚)	随 想 録	210~215	1938
人生の諸相(2)(夕刊大阪新聞・道理の感覚)	随 想 録	216~218	1937
友達のように(夕刊大阪新聞・私の人生観)	随 想 録	219~220	1937
親切心(大阪新聞・信念と実践)	随 想 録	221~222	1941
感心したことしないこと(自警・若き女性のために)	随 想 録	223~226	1948
車中の時間(大阪新聞・信念と実践)	随 想 録	227~229	1941
旅行雑和(現代・私の人生観)	随 想 録	230~234	1940
晏子の御者(夕刊大阪・私の人生観)	随 想 録	235~237	1940
倭人(倫理学月報・私の人生観)	随 想 録	238~241	1940
京の夏(京都帝大新聞・学生に与ふる書)	随 想 録	242~244	1937
夏に親しむ(大阪新聞・信念と実践)	随 想 録	245~246	1941
平凡な教訓(夕刊大阪・私の人生観)	随 想 録	247~249	1937
手のない話(第一新聞・若き女性のために)	随 想 録	250~251	1947
教養ということ(主婦の友・若き女性のために)	随 想 録	252~255	1949
言説と実践(大阪新聞・信念と実践)	随 想 録	257~258	1941
性格の鍛練(大阪新聞・信念と実践)	随 想 録	259~260	1941
平常の心(夕刊大阪・私の人生観)	随 想 録	261~262	1937
小学教育の重要性(夕刊大阪・私の人生観)	随 想 録	263~264	1937
岩波「国語」を読みて(岩波国語特報・学生に与ふる書)	随 想 録	265~270	1938
職域と教育(大阪新聞・信念と実践)	随 想 録	271~273	1941
女性の敬重(婦人生活・若き女性のために)	随 想 録	274~276	1948
迷う心(国鉄情報・生きゆく道)	随 想 録	277~285	1946
生は悩み(文芸春秋・生きゆく道)	随 想 録	286~300	1946
ひとの運命(朝日新聞・若き女性のために)	随 想 録	301~303	1946
歴史を信ぜよ(青年週報・若き女性のために)	随 想 録	304~307	1947
世界をわが家に(若き女性のために)	随 想 録	308~309	
世界の新生(新生・生きゆく道)	随 想 録	310~317	1948
新生二年目への観智(とくに復員せる諸姉に与う・社会 生きゆく道)	随 想 録	318~328	1948
新年の言葉(1)(若き女性のために)	随 想 録	329~334	1949
新年の言葉(2)(若き女性のために)	随 想 録	335~339	1941
生きゆく道(新潮・生きゆく道)	随 想 録	340~355	1947
私の考え方 全体的に考える(芙蓉・私の人生観)	随 想 録	356~357	1942
私の考え方 勤労への積極性(芙蓉・私の人生観)	随 想 録	357~358	1941
幸福の一断面(PHP・生きゆく道)	随 想 録	359~364	1949
序 文	大学生活	1~ 4	1949
日常について	大学生活	9~ 29	
内村鑑三先生のこと	追想集 内村鑑三	45~ 54	
先生の追憶	追想集 内村鑑三	55~ 62	

表 題	書 名	頁	初出年
私の人生観 (科学園)	人 生 論	136~141	1947
哲学と人生 (夕刊大阪新聞)	人 生 論	143~152	1937
カント哲学の精神—序 言 (世界精神史講座)	人 生 論	153~158	1940
カント哲学の精神—カント精神の成熟 (")	人 生 論	158~180	1940
カント哲学の精神—理論的精神 (")	人 生 論	181~185	1940
カント哲学の精神—実践的精神 (")	人 生 論	186~206	1940
西田哲学と歴史の問題 (夕刊大阪新聞)	人 生 論	207~227	1938
生形成と個人性 (文芸春秋)	人 生 論	229~250	1939
自由の問題 (岩波哲学講座)	人 生 論	251~313	1932
ヒューマニズムについて (近代選書)	人 生 論	314~340	1936
道理について (思想) (三輪・岩垂・鶴飼三先生記念会講演)	人 生 論	341~363	1936
野球と私 (文芸春秋)	スポーツに学ぶ	9~ 24	1948
私の歩んだ道 (蛍雪時代)	スポーツに学ぶ	25~ 36	1950
私の中学時代 (中学時代)	スポーツに学ぶ	37~ 42	1950
スポーツに学ぶ (朝日スポーツ)	スポーツに学ぶ	43~ 46	1951
野球の流行 (ラジオ放送「真実を求めて」)	スポーツに学ぶ	47~ 51	1948
スポーツと人生 (帝国大学新聞)	スポーツに学ぶ	51~ 57	1938
教育問題 (光)	スポーツに学ぶ	59~ 63	1947
人生の諸相 (夕刊大阪新聞)	スポーツに学ぶ	65~ 71	1936
夏日随想 夏の幸福 (帝国大学新聞)	スポーツに学ぶ	73~ 77	1936
夏日随想 私の銷夏生活 (京都日日新聞)	スポーツに学ぶ	77~ 78	1936
夏日随想 野球見物 (京都帝大新聞)	スポーツに学ぶ	78~ 82	1936
学生野球に望む (ラジオ放送)	スポーツに学ぶ	83~ 86	1949
スポーツを語る (報知新聞)	スポーツに学ぶ	87~ 89	1950
少年野球について (少年野球協会全国総会 (少年野球協会第1回全国総会祝辞))	スポーツに学ぶ	91~ 93	1951
新制大学入学の諸君へ (中部日本新聞)	スポーツに学ぶ	95~ 99	1949
時代の苦悶と奨学生	スポーツに学ぶ	101~105	1950
学生・校友会・学生課「京大学生親睦の夕」講演	スポーツに学ぶ	107~122	
幸福と幸運 (夕刊大阪・信念と実践)	随 想 録	15~ 19	1941
幸福の意味—快楽と苦痛 (新女苑 若き女性のために)	随 想 録	20~ 21	1948
幸福の意味—快楽と幸福 (" ")	随 想 録	21~ 22	1948
幸福の意味—完全な幸福とは (" ")	随 想 録	23	1948
幸福の意味—豚の幸福とソクラテスの不幸 (" ")	随 想 録	23~ 25	1948
幸福の意味—徳に即しての活動 (" ")	随 想 録	25~ 26	1948
幸福の意味—正直者が損をしない社会 (" ")	随 想 録	26~ 27	1948
幸福の意味—幸福の女神の話 (" ")	随 想 録	27~ 29	1948
幸福の意味—幸福の秘密 (" ")	随 想 録	29~ 30	1948
運命と幸福 (青年・若き女性のために)	随 想 録	31~ 46	1948
生活のうるおい (生活文化・若き女性のために)	随 想 録	47~ 57	1964
貧乏論 (1) 高田教授の「貧乏の話」を読む (京都帝大新聞・道理の感覚)	随 想 録	58~ 70	1934
貧乏論 (2) 高田教授の解明を読む (京都帝大新聞・道理の感覚)	随 想 録	71~ 79	1934
貧乏論追記 (京都帝大新聞・道理の感覚)	随 想 録	80~ 83	1935
自覚と自負 (日本評論・道理への意志)	随 想 録	84~101	1937
自覚と反省 (婦人公論・信念と実践)	随 想 録	102~121	1942
伝統と独立 (大阪新聞・教育試論)	随 想 録	122~126	1948
伝統と創造 (一高記念祭講演・私の人生観)	随 想 録	127~147	1941
東洋的学問と西洋的学問 (理想・道理への意志)	随 想 録	148~156	1939
自由について (思索・生きゆく道)	随 想 録	157~163	1948

表 題	書 名	頁	初出年
一高の思出	信念と実践	322~342	
この生涯を見よ(毎日新聞)	信念と実践	343~350	1943
短文十二章—歴史の激流に立つ(大阪新聞その他(1941~1943にかけて))	信念と実践	351~354	1941
短文十二章—落第の悩み—	信念と実践	354~357	
短文十二章—言葉と実践—	信念と実践	357~359	
短文十二章—国政参与の自覚—	信念と実践	360~362	
短文十二章—親切心—	信念と実践	362~364	
短文十二章—国力の源泉—	信念と実践	365~367	
短文十二章—職域と教育—	信念と実践	367~369	
短文十二章—性格の鍛練—	信念と実践	370~372	
短文十二章—夏に親しむ—	信念と実践	372~374	
短文十二章—わがふるさと—	信念と実践	374~376	
短文十二章—車中の時間—	信念と実践	377~379	
短文十二章—岩波書店回顧三十年感謝晩餐会における挨拶—	信念と実践	380~382	
教育試論(学生と学園)	信念と実践	383~404	1939
教育問題私見(理想)	信念と実践	405~426	1942
社会と人倫 善とは何か(第二巻補遺)	新倫理講座Ⅳ	91~107	
道徳とは何か—正しく働いて正しく生きる	新倫理講座Ⅱ	174~179	
新憲法と倫理—表紙右肩に天野貞祐先生講演とあり	新憲法と倫理	1~32	
新憲法と倫理—	新憲法と倫理	33~65	
人生の道	人生読本	3~12	
哲学と人生	人生読本	13~22	
人格と自由	人生読本	23~28	
迷う心	人生読本	29~37	
友情・同情・愛	人生読本	38~47	
読書と思考について	人生読本	48~59	
自覚と反省	人生読本	60~79	
伝統と独立	人生読本	80~85	
幸福と幸運	人生読本	86~90	
正しく働いて正しく生きる	人生読本	91~100	
奉公の誠について	人生読本	101~116	
今の世を生きぬく力	人生読本	117~123	
私の考え方	人生読本	124~126	
学生諸君に懇う	人生読本	127~133	
新しい社会人のために	人生読本	134~148	
新日本の在り方	人生読本	149~164	1952
人生の道公論	人生論	13~22	1940
人間の苦悩と創造(改造)	人生論	23~55	1939
人生と創造—立身出世から事柄自体へ(婦人の友)(自由学園講演)	人生論	56~58	1940
人生と創造—人間性の畏敬	人生論	58~61	1940
人生と創造—死して生くこと	人生論	61~66	1940
人生と創造—創造ということ	人生論	66~70	1940
人生と創造—自由ということ	人生論	70~73	1940
人生と創造—道理の感覚	人生論	74~75	1940
人生と創造—人生の意味	人生論	75~77	1940
創造的人生観 大朝京都版(大朝京都支局学術講演会講演)	人生論	78~102	1938
科学と世界・人生観(学生と科学)	人生論	103~119	1939
人生私見(経済往来)	人生論	120~135	1935

表 題	書 名	頁	初出年
青年の理想—友情と青春	心の対話君の情熱と僕の真実	87～90	
青年の理想—「心」の心	心の対話君の情熱と僕の真実	91～96	
青年の理想—青年の理想	心の対話君の情熱と僕の真実	97～101	
日本を愛する—天皇の權威	心の対話君の情熱と僕の真実	105～109	
日本を愛する—日本という国	心の対話君の情熱と僕の真実	109～114	
日本を愛する—政治家の資質	心の対話君の情熱と僕の真実	114～120	
日本を愛する—憲法談議	心の対話君の情熱と僕の真実	120～122	
日本を愛する—民主主義の精神	心の対話君の情熱と僕の真実	122～125	
日本を愛する—平和について	心の対話君の情熱と僕の真実	125～127	
日本を愛する—税金を考える	心の対話君の情熱と僕の真実	128～130	
わが読書—演義三国志と内村鑑三	心の対話君の情熱と僕の真実	133～137	
わが読書—トルストイとメーテルリンク	心の対話君の情熱と僕の真実	137～141	
わが読書—多読と寡読	心の対話君の情熱と僕の真実	141～145	
わが読書—論語の人間味	心の対話君の情熱と僕の真実	145～149	
忘れ得ぬ人々—わが師友	心の対話君の情熱と僕の真実	153～158	
忘れ得ぬ人々—志賀直哉	心の対話君の情熱と僕の真実	158～161	
忘れ得ぬ人々—安倍能成	心の対話君の情熱と僕の真実	161～164	
忘れ得ぬ人々—岩波茂雄	心の対話君の情熱と僕の真実	164～166	
人生雑感—絵画と人生	心の対話君の情熱と僕の真実	169～175	
人生雑感—学べば禄あり	心の対話君の情熱と僕の真実	175～178	
人生雑感—漢字と国語	心の対話君の情熱と僕の真実	178～181	
人生雑感—食べ物と酒	心の対話君の情熱と僕の真実	182～185	
人生雑感—作家の良心	心の対話君の情熱と僕の真実	186～187	
自分と他人	今日のしつけ	144～145	
わたしの生活から	今日のしつけ	145～147	
奉公の誠について（婦人公論）	信念と実践	1～21	1943
自覚と反省（婦人公論）	信念と実践	22～46	1942
新体制の精神について（華北電々論叢）	信念と実践	47～68	1940
人生と勤勞（川崎重工業株式会社講演・川崎重工業パンフレット）	信念と実践	69～100	1941
公に奉ずる心（同志社大学予科講演・同志社予科パンフレット）	信念と実践	101～147	1941
日本はなぜ強いか（大阪八尾高等女学校講演・八尾高女会誌）	信念と実践	148～163	1942
科学と世界・人生観—学生と科学	信念と実践	164～185	1939
甲南訓話—報国際結成式式辞（甲南）	信念と実践	187～195	1941
甲南訓話—朝礼訓話（甲南）	信念と実践	195～197	1941
甲南訓話—始業式の言葉	信念と実践	200～209	1942
甲南訓話—入学式式辞	信念と実践	209～219	1942
甲南訓話—平生先生喜寿祝賀式式辞	信念と実践	219～229	1942
甲南訓話—新年の言葉—拝賀式式辞	信念と実践	229～234	1943
甲南訓話—新年の言葉—始業式訓話	信念と実践	234～239	1943
甲南訓話—入学式訓辞	信念と実践	239～251	1943
道は近きに在り（婦人公論）	信念と実践	253～258	1941
哲学精神の実践（週刊朝日）	信念と実践	259～264	1941
斎藤君の話（財政）	信念と実践	265～270	1941
幸福と幸運（夕刊大阪新聞）	信念と実践	271～276	1941
女性に与う（毎日新聞）	信念と実践	277～281	1942
西田先生夏日清談（文芸）	信念と実践	282～294	1942
岩元先生の追憶（高会誌）	信念と実践	295～301	1941
九鬼君のこと（思想）	信念と実践	302～321	1941

表 題	書 名	頁	初出年
新家庭の道—ある日の対談—恋愛と親子の立場	今日に生きる女性の道	128～129	
新家庭の道—ある日の対談—若い家庭に二つの希い	今日に生きる女性の道	129～130	
私の人生観	今日に生きる女性の道	131～136	
神と人に仕える道	今日に生きる女性の道	137～142	
私の教育方針	今日に生きる女性の道	143～156	
時間的存在—今日の意味	今日に生きる倫理	1～ 6	
今日の問題	今日に生きる倫理	6～ 12	
環境と自由性—自由の主体	今日に生きる倫理	13～ 20	
個体と全体	今日に生きる倫理	20～ 30	
作られて作る存在	今日に生きる倫理	30～ 35	
徳	今日に生きる倫理	35～ 46	
理知的徳	今日に生きる倫理	46～ 55	
人間智としての思慮	今日に生きる倫理	55～ 63	
徳目と実践	今日に生きる倫理	63～ 71	
徳の変易性と不易性	今日に生きる倫理	71～ 82	
道徳的基準としての勸語	今日に生きる倫理	82～ 89	
叡智的空間	今日に生きる倫理	89～ 93	
国家と個人	今日に生きる倫理	94～111	
世界国家の理念—個性と普遍性	今日に生きる倫理	111～121	
平和日本の在り方	今日に生きる倫理	121～164	
結語 歴史的現実の反省と自覚	今日に生きる倫理	164～177	
付録 ものの考え方について—はじめに	今日に生きる倫理	179～181	
ものの考え方について—古来の代表的な人間像	今日に生きる倫理	181～186	
ものの考え方について—洞穴のイドーラ	今日に生きる倫理	186～193	
ものの考え方について—権威盲従のイドーラ	今日に生きる倫理	193～194	
ものの考え方について—市場のイドーラ	今日に生きる倫理	195～198	
ものの考え方について—知力のイドーラ	今日に生きる倫理	198～201	
ものの考え方について—道徳の本質は変わらない	今日に生きる倫理	201～208	
ものの考え方について—道徳とは社会生活のルールである	今日に生きる倫理	208～212	
ものの考え方について—道徳性を養う三つの要素	今日に生きる倫理	212～216	
ものの考え方について—個人と国家	今日に生きる倫理	216～220	
ものの考え方について—愛国心について	今日に生きる倫理	220～226	
ものの考え方について—天皇は国家の象徴であるということについて	今日に生きる倫理	226～229	
ものの考え方について—個性的な文化の創造は世界性につながる	今日に生きる倫理	230～235	
ものの考え方について—教育界を道徳が支配するように	今日に生きる倫理	235～238	
学生問題と教育—新制大学は程度が低い 東京中野ほととぎすに於ける対談をもとに	心の対話君の情熱と僕の真実	19～ 23	
学生問題と教育—デモ参加者は論旨退学	心の対話君の情熱と僕の真実	23～ 26	
学生問題と教育—講堂占拠の道徳感覚	心の対話君の情熱と僕の真実	26～ 31	
学生問題と教育—大学院大学設置と学長の任命	心の対話君の情熱と僕の真実	32～ 36	
学生問題と教育—教育の場での“団交”	心の対話君の情熱と僕の真実	36～ 40	
学生問題と教育—“価値”は変わらない	心の対話君の情熱と僕の真実	41～ 46	
学生問題と教育—三島海雲と竹中藤右衛門	心の対話君の情熱と僕の真実	47～ 49	
新しき村五十年—個人の完成を目指す	心の対話君の情熱と僕の真実	53～ 57	
新しき村五十年—“新しき村”の発展	心の対話君の情熱と僕の真実	57～ 63	
新しき村五十年—人間が人間らしく生きる	心の対話君の情熱と僕の真実	63～ 69	
青年の理想—日本人の宗教心	心の対話君の情熱と僕の真実	73～ 77	
青年の理想—天国と人間	心の対話君の情熱と僕の真実	77～ 80	
青年の理想—自殺について	心の対話君の情熱と僕の真実	81～ 86	

表 題	書 名	頁	初出年
勉強の秘訣—受験生に与う—学びつつ考えること	高校生のために	66～ 67	
勉強の秘訣—受験生に与う—受験はスポーツである	高校生のために	67～ 69	
勉強の秘訣—受験生に与う—人間としての優等生	高校生のために	70～ 71	
勉強の秘訣—受験生に与う—恵まれている諸君の資格	高校生のために	71～ 72	
勉強の秘訣—受験生に与う—アルバイトの倫理	高校生のために	72～ 73	
勉強の秘訣—受験生に与う—毎日の感謝を	高校生のために	73～ 74	
勉強の秘訣—受験生に与う—試験は人間修養の一過程	高校生のために	74～ 76	
勉強の秘訣—受験生に与う—わたしの読書生活	高校生のために	77～ 80	
勉強の秘訣—受験生に与う—読書と生活	高校生のために	81～ 94	
勉強の秘訣—受験生に与う—思い出は読書に	高校生のために	95～ 98	
よき人間形成のために—修学旅行に学ぶ	高校生のために	99～106	
よき人間形成のために—勤労の尊重について	高校生のために	107～109	
よき人間形成のために—知者と愛知者	高校生のために	110～112	
よき人間形成のために—人間の尊重	高校生のために	113～126	
よき人間形成のために—人間形成のために	高校生のために	127～131	
よき人間形成のために—人間生活の大道	高校生のために	132～139	
よき人間形成のために—歴史の進歩と青年の使命	高校生のために	140～145	
よき人間形成のために—個人・国家・世界	高校生のために	146～150	
よき人間形成のために—旧道徳と新道徳	高校生のために	151～171	
よき人間形成のために—学園を巣立つ人たちへ	高校生のために	172～174	
大学人の反省 京都帝国大学新聞部篇	決戦下学生に与う	6～ 12	
明日の日本	ここに希望あり	7～ 23	
今日に生きる女性の道	今日に生きる女性の道	5～ 9	1979
若き女性に寄せて—人間の尊重	今日に生きる女性の道	10～ 12	
若き女性に寄せて—運 命	今日に生きる女性の道	12～ 15	
若き女性に寄せて—女性の解放	今日に生きる女性の道	15～ 16	
若き女性に寄せて—男女の真の平等—高校生に答えて	今日に生きる女性の道	17～ 19	
若き女性に寄せて—男女の友情	今日に生きる女性の道	20～ 21	
若き女性に寄せて—仕事の義務	今日に生きる女性の道	21～ 24	
若き女性に寄せて—批判について	今日に生きる女性の道	24～ 26	
若き女性に寄せて—愛について	今日に生きる女性の道	26～ 29	
若き女性に寄せて—女性のために	今日に生きる女性の道	30～ 35	
勤めを持つ若き人達へ	今日に生きる女性の道	36～ 41	
幸福について	今日に生きる女性の道	42～ 58	
美しさについて—新年の言葉	今日に生きる女性の道	59～ 64	
自由について	今日に生きる女性の道	65～ 72	
読書について	今日に生きる女性の道	73～ 81	
新年と読書	今日に生きる女性の道	82～ 83	
中道を求めて	今日に生きる女性の道	84～ 93	
親 切 心	今日に生きる女性の道	94～ 96	
平凡な教訓	今日に生きる女性の道	97～ 99	
三人の女性	今日に生きる女性の道	100～102	
主張への勇氣	今日に生きる女性の道	103～105	
生活への勇氣	今日に生きる女性の道	106～117	
新家庭の道—ある日の対談—夫婦お互いが尊敬しあう	今日に生きる女性の道	118～121	
新家庭の道—ある日の対談—とくに女性に教養を	今日に生きる女性の道	121～124	
新家庭の道—ある日の対談—健康な過程をつくる	今日に生きる女性の道	125～126	
新家庭の道—ある日の対談—天分を伸ばし職業に生きる	今日に生きる女性の道	126～127	

表 題	書 名	頁	初出年
前期大学論（大学新聞・教育試論）	教 育 論	76～ 81	1948
学芸大学の構想（第一新聞・教育試論）	教 育 論	82～ 85	1947
大学院の問題（時事新報・教育試論）	教 育 論	86～ 91	1948
高等学校論（中央公論・教育試論）	教 育 論	92～107	1948
高等学校の運命（読売新聞・教育試論）	教 育 論	108～112	1960
六・三・三制私見（第一新聞・教育試論）	教 育 論	113～115	1947
教育刷新の問題（朝日評論・教育試論）	教 育 論	116～141	1947
教育刷新の基盤（朝日新聞・教育試論）	教 育 論	142～147	1947
教育の理想（毎日新聞・教育試論）	教 育 論	148～151	1947
徳育について（教育・道理の感覚）	教 育 論	152～175	1937
知育の徳育性（学生評論・道理の感覚）	教 育 論	176～184	1936
固体と物体（信濃教育・信濃教育会総集會講演）	教 育 論	185～215	1960
社会生活の反省（道理の意志）	教 育 論	216～229	
教育と社会（若き女性のために）	教 育 論	230～242	
これからの家庭教育（若き女性のために）	教 育 論	243～255	
教育問答（光・若き女性のために）	教 育 論	256～259	1947
国難の克服（青年・道理の感覚）	教 育 論	260～266	1933
道はちかき在り（公論・信念と実践）	教 育 論	267～270	1941
奉公の誠について（婦人公論・信念と実践）	教 育 論	271～286	1943
勤労のよろこびについて（文芸春秋・ラジオ講演（1940.8.7）私の人生観）	教 育 論	187～315	1940
人間は平等なり（生きゆく道）	教 育 論	316～328	
道義頽廢の所在（生きゆく道）	教 育 論	329～333	
言論への勇氣（中部日本新聞・教育試論）	教 育 論	334～336	1947
国家建設の生命力（生きゆく道）	教 育 論	337～340	
平和に生きる道（生きゆく道）	教 育 論	341～343	
美しい人生のために	高校生のために	7～ 9	
美しい人生のために—愛について—愛の多様な発露	高校生のために	10～ 14	
美しい人生のために—愛について—祖国愛	高校生のために	14～ 16	
美しい人生のために—愛について—友 情	高校生のために	16～ 19	
美しい人生のために—愛について—恋 愛	高校生のために	20	
美しい人生のために—友情について	高校生のために	21～ 31	
美しい人生のために—郷土愛について	高校生のために	32～ 33	
美しい人生のために—反省について	高校生のために	34～ 35	
美しい人生のために—無限の可能性について—京都駅ですっぽかしを食う	高校生のために	36～ 38	
美しい人生のために—無限の可能性について—鎌倉の「さんもん書生」たち	高校生のために	38～ 40	
美しい人生のために—無限の可能性について—学者の才能は勤勉努力のみ	高校生のために	40～ 41	
美しい人生のために—無限の可能性について—専門をもつ難しさと楽しさ	高校生のために	41～ 43	
美しい人生のために—無限の可能性について—無声の声を聞き無形の形を見る	高校生のために	43～ 44	
美しい人生のために—無限の可能性について—哲学とは「途上にあること」	高校生のために	44～ 46	
美しい人生のために—無限の可能性について—四つの偶像にかえりみ謙虚なこころ	高校生のために	46～ 47	
美しい人生のために—文化の特質について	高校生のために	48～ 51	
美しい人生のために—恩師を語る—岩元先生と「幸福論」	高校生のために	52～ 54	
美しい人生のために—恩師を語る—いまも毎日讀むカント	高校生のために	54～ 56	
勉強の秘訣	高校生のために	57～ 60	
勉強の秘訣—受験生に与う—受験生第一歩の目標は	高校生のために	61～ 62	
勉強の秘訣—受験生に与う—第一目標へ二回試みよ	高校生のために	62～ 63	
勉強の秘訣—受験生に与う—「沈潜反復」すること	高校生のために	63～ 65	
勉強の秘訣—受験生に与う—何よりも良き習慣を	高校生のために	65～ 66	

表 題	書 名	頁	初出年
教育問題私見	教 育 論	29～ 45	
大学の理念	教 育 論	46～ 70	
フンボルトの大学論	教 育 論	71～ 72	
フンボルトの大学論—ベルリンにおける最高学府の内的及び外的組織について	教 育 論	73～ 81	
前期大学論	教 育 論	82～ 87	
学芸大学の構想	教 育 論	88～ 91	
大学院の問題	教 育 論	92～ 97	
高等学校論	教 育 論	98～113	
高等学校の運命	教 育 論	114～118	
六・三・三 制私見	教 育 論	119～121	
教育刷新の問題	教 育 論	122～147	
教育刷新の基盤	教 育 論	148～153	
教育の理想	教 育 論	154～157	
徳育について	教 育 論	158～181	
知育の徳育性	教 育 論	182～190	
固体と全体—信濃教育会総集会議講演	教 育 論	191～221	
社会生活の反省	教 育 論	222～235	
教育と社会	教 育 論	236～248	
これからの家庭教育	教 育 論	249～261	
教育問答	教 育 論	262～265	
国難の克服	教 育 論	266～272	
道はちかきに在り	教 育 論	273～276	
奉公の誠について	教 育 論	277～292	
勤労のよろこびについて—ラジオ講演 1940.8.7	教 育 論	293～322	1940
人間は平等なり	教 育 論	322～334	
道義類廃の所在	教 育 論	335～339	
言論への勇氣	教 育 論	340～342	
国家建設の生命力	教 育 論	343～346	
平和に生くる道	教 育 論	347～349	
立志まで	教育五十年	3～ 10	
一高時代	教育五十年	10～ 14	
一高時代(続)	教育五十年	15～ 29	
修業時代 一高より京大へ	教育五十年	29～ 43	
七高教授時代	教育五十年	43～ 57	
学習院教授時代	教育五十年	57～ 72	
京大教授時代	教育五十年	73～ 88	
甲南高校長時代	教育五十年	88～103	
一高校長時代	教育五十年	103～117	
一高から文部省へ	教育五十年	117～132	
文部行政二ヶ年	教育五十年	132～146	
自由学園と私	教育五十年	147～161	
獨協学園の復興	教育五十年	162～176	
附録 人間論	教育五十年	179～247	
教育試論 (学生と学園・信念と実践)	教 育 論	7～ 22	1939
教育問題私見 (理想・信念と実践)	教 育 論	23～ 39	1942
大学の理念 (中央公論・道理への意志)	教 育 論	40～ 64	1940
フンボルトの大学論 (図書・私の人生観)	教 育 論	65～ 66	1941
ベルリンにおける最高学府の内的及び外的組織について	教 育 論	67～ 75	

表 題	書 名	頁	初出年
村野常右衛門氏のことなど	回想 天野貞祐	94～96	1941
三樹一平氏の追憶	回想 天野貞祐	96～99	1925
読書の思い出	回想 天野貞祐	99～102	1939
一高の思い出	回想 天野貞祐	102～110	1944
岩元先生の追憶	回想 天野貞祐	110～113	1941
立沢君の追憶	回想 天野貞祐	113～116	1936
内村鑑三先生のこと (1)	回想 天野貞祐	116～121	1932
内村鑑三先生のこと (2)	回想 天野貞祐	121～125	1933
岩下壮一君の追憶	回想 天野貞祐	125～127	1940
人物雑話	回想 天野貞祐	127～130	1938
九鬼・岩下両君のことなど	回想 天野貞祐	130～139	1948
教育者十話—立志	回想 天野貞祐	139～141	
教育者十話—生い立ち	回想 天野貞祐	141～143	
教育者十話—中学・高校—修業時代 (1)	回想 天野貞祐	143～144	
教育者十話—高 一—修業時代 (2)	回想 天野貞祐	145～146	
教育者十話—高・京大—修業時代 (3)	回想 天野貞祐	146～148	
教育者十話—大学生生活—修業時代 (4)	回想 天野貞祐	148～150	
教育者十話—七高・学習院—教育の実践 (1)	回想 天野貞祐	150～152	
教育者十話—京大—教育の実践 (2)	回想 天野貞祐	152～153	
教育者十話—高・文部省—教育の実践 (3)	回想 天野貞祐	154～155	
教育者十話—自由学園・獨協学園 (4)	回想 天野貞祐	155～157	
学生諸君に与ふ	学生に与ふる書	1～20	
学生・学友会・学生課	学生に与ふる書	21～36	
就職に対する心構へ	学生に与ふる書	37～39	
「月曜講義」の創設に際して	学生に与ふる書	40	
日本文化講義の新計画について	学生に与ふる書	40～41	
月曜講義開講の挨拶	学生に与ふる書	41～44	
濱田総長の追憶	学生に与ふる書	45～49	
濱田耕作先生のこと	学生に与ふる書	50～61	
西田哲学と歴史の問題	学生に与ふる書	62～82	
哲学と人生	学生に与ふる書	83～92	
学生と音楽	学生に与ふる書	93～97	
読 書 論	学生に与ふる書	98～115	
読書と思考について	学生に与ふる書	116～127	
読書の思出	学生に与ふる書	128～133	
ハイデルベルク学派の人々	学生に与ふる書	134～142	
岩波「国語」を讀みて	学生に与ふる書	143～148	
本多謙三君の追憶	学生に与ふる書	149～152	
牛山茂樹君の追憶	学生に与ふる書	153～156	
不幸な天才者	学生に与ふる書	157～161	
スポーツと人生	学生に与ふる書	162～167	
京 の 夏	学生に与ふる書	168～170	
日本的なるもの	学生に与ふる書	171～175	
人物雑話	学生に与ふる書	176～181	
「泣虫小僧」を鑑る	学生に与ふる書	182～186	
友 情 論	学生に与ふる書	187～204	
創造的人生観	学生に与ふる書	205～230	
教育試論	教 育 論	13～28	

表 題	書 名	頁	初出年
人倫の形而上学序論—幸福と苦悩	カント哲学の精神	186~191	
人倫の形而上学序論—結 語	カント哲学の精神	191~199	
人間カント 人 間	カント哲学の精神	200~212	
人間カント 年 譜	カント哲学の精神	212~237	
人間カント 肖像画	カント哲学の精神	238~244	
善とは何か	カント哲学の精神	245~269	
序説 形而上学の再生	カント純粋理性批判	1~ 7	
序説 純粋理性批判の 出 處	カント純粋理性批判	7~ 27	
序説 先験的主要問題	カント純粋理性批判	27~ 34	
先験的感性論 空間時間論	カント純粋理性批判	35~ 43	
先験的分析論 範疇論 範疇の形而上的演繹	カント純粋理性批判	45~ 51	
先験的分析論 範疇論 範疇の先験的演繹	カント純粋理性批判	51~ 65	
先験的分析論 図式論	カント純粋理性批判	65~ 71	
先験的分析論 原則論	カント純粋理性批判	72~ 81	
先験的分析論	カント純粋理性批判	81~ 91	
先験的弁証論	カント純粋理性批判	93~124	
先験的弁証論—心の不滅性の問題	カント純粋理性批判	124~128	
先験的弁証論—心の不滅性の問題—実体性の誤謬推理	カント純粋理性批判	128~130	
先験的弁証論—心の不滅性の問題—単純性の誤謬推理	カント純粋理性批判	130~133	
先験的弁証論—心の不滅性の問題—人格性の誤謬推理	カント純粋理性批判	133~136	
先験的弁証論—心の不滅性の問題—観念性の誤謬推理	カント純粋理性批判	136~142	
先験的弁証論—アンティノミーの問題	カント純粋理性批判	142~146	
先験的弁証論—アンティノミーの問題— 第1 アンティノミー（世界の量に関する矛盾）	カント純粋理性批判	146~149	
先験的弁証論—アンティノミーの問題— 第2 アンティノミー（世界の質量に関する矛盾）	カント純粋理性批判	149~152	
先験的弁証論—アンティノミーの問題— 第3 アンティノミー（世界における物の成立に関する矛盾）	カント純粋理性批判	152~156	
先験的弁証論—アンティノミーの問題— 第4 アンティノミー（世界の依存性に関する矛盾）	カント純粋理性批判	156~174	
先験的弁証論—神の存在の証明問題	カント純粋理性批判	174~184	
先験的方法論—実践主張の形而上学	カント純粋理性批判	185~199	
結語 ヘッリゲル「カント実践理性優位説」参照とあり	カント純粋理性批判	201~205	
イマヌエル・カント略年譜	カント純粋理性批判	207~218	
人間カント 人 間	カント	275~285	
人間カント 年 譜	カント	285~311	
人間カント 肖像画	カント	311~316	
「道理の感覚」	回想 天野貞祐	3~ 4	1936
ヒューマニズムについて	回想 天野貞祐	5~ 14	1936
徳育について	回想 天野貞祐	15~29	1937
奉公の誠について	回想 天野貞祐	30~39	1943
教育試論	回想 天野貞祐	40~49	1939
西田哲学に学ぶべきもの	回想 天野貞祐	50~73	1948
友 情 論	回想 天野貞祐	74~84	1939
わがふるさと	回想 天野貞祐	85	1941
私の少年時代	回想 天野貞祐	86~ 89	1946
思い出の先生	回想 天野貞祐	89~ 92	1947
わが母のことなど	回想 天野貞祐	92~ 94	1941

表 題	書 名	頁	初出年
生きゆく道	生きゆく道	3～22	
生は悩み	生きゆく道	23～42	
生活への勇気	生きゆく道	43～56	
迷う心	生きゆく道	57～67	
世界の新生	生きゆく道	69～79	
新生二年目への叡智—とくに復員せる諸兄姉に与う	生きゆく道	81～94	
人間は平等なり	生きゆく道	95～110	
自由について	生きゆく道	111～120	
青年学徒に懇う	生きゆく道	121～130	
青年諸君に与う	生きゆく道	131～141	
道義頹廢の所在	生きゆく道	143～149	
国家建設の生命力	生きゆく道	151～156	
幸福の一段面	生きゆく道	157～164	
私の人生観	生きゆく道	165～172	
一高を去るに際して	生きゆく道	173～178	
平和に生きる道	生きゆく道	179～183	
道理の感覚—“自由主義”一筋に	想 う	116～119	
静かな愛国心—個人は国家の細胞	想 う	119～121	
“内村精神”と抽象論—強いものへの反感	想 う	122～124	
野球の哲学—“全と個”を考える	想 う	124～127	
カント学徒—生活態度に基準	想 う	127～130	
“酒と歌”—この道は晩学	想 う	130～132	
生涯の友—無口だった九鬼君	想 う	132～135	
さらば—高一・学問と友情の花園	想 う	135～138	
東大病—一高の併合に根源	想 う	138～140	
吉田茂氏の思い出—入閣要請文に感銘	想 う	140～143	
私の純粹経験—痛快“期限なし法”	想 う	143～146	
スクールランチ—“給食”という“ことば”がまずい	想 う	146～149	
知育・徳育—知恵こそ徳の根源	想 う	149～151	
教育者の倫理—教壇の“内と外”	想 う	152～154	
受験地獄をなくせ—緩和には資格試験	想 う	154～157	
アンビション—教育のために努力	想 う	157～160	
若い世代へ—何よりも学問	想 う	160～163	
生きる—まだまだ研究したいテーマが	想 う	163～166	
カント哲学の精神—序 言	カント哲学の精神	7～11	
カント哲学の精神—カント精神の成熟	カント哲学の精神	12～32	
カント哲学の精神—理論的精神	カント哲学の精神	32～36	
カント哲学の精神—実践的精神	カント哲学の精神	37～55	
人格と自由	カント哲学の精神	56～114	
人倫の形而上学序論 緒 言	カント哲学の精神	115～117	
人倫の形而上学序論—物質から生命へ	カント哲学の精神	117～126	
人倫の形而上学序論—生命から精神へ	カント哲学の精神	127～131	
人倫の形而上学序論—精神の諸相 (イ) 企画性	カント哲学の精神	132～136	
人倫の形而上学序論—精神の諸相 (ロ) 価値感覚	カント哲学の精神	137～149	
人倫の形而上学序論—精神の諸相 (ハ) 自由性	カント哲学の精神	150～158	
人倫の形而上学序論—ヘーゲル人倫の形而上学	カント哲学の精神	158～170	
人倫の形而上学序論—主観性の主張	カント哲学の精神	170～179	
人倫の形而上学序論—ショウベンハウエルの苦悩の形而上学	カント哲学の精神	179～186	

表 題	書 名	頁	初出年
内村先生と私	医科と教養	174~176	
平凡な道	医科と教養	177	
随想 三夜—西独をたずねて	医科と教養	178~181	
随想 三夜—祖 国	医科と教養	181~185	
随想 三夜—秩 序	医科と教養	185~189	
青年に与う	如何に生くべきか	7~24	
学生と政治運動	如何に生くべきか	25~29	
学園を巣立つ諸君へ	如何に生くべきか	30~34	
知識人とモラル	如何に生くべきか	35~40	
責任ということ	如何に生くべきか	41~45	
生は悩み	如何に生くべきか	46~48	
新春随想	如何に生くべきか	49~51	
新文化国家の構想	如何に生くべきか	52~54	
国民の自覚	如何に生くべきか	55~56	
明日の日本	如何に生くべきか	57~62	
わたしの生活から	如何に生くべきか	63~69	
大学を出た頃のこと	如何に生くべきか	70~75	
若き女性に寄せる—新年の言葉	如何に生くべきか	76~81	
生活は単純に思想は高く—実社会に巣立つ若き女性に送る手紙	如何に生くべきか	82~88	
新家庭の道—ある日のインタヴュー—夫婦お互いが尊敬しあう	如何に生くべきか	89~92	
新家庭の道—ある日のインタヴュー—とくに女性に教養を	如何に生くべきか	93~96	
新家庭の道—ある日のインタヴュー—健康な家庭をつくる	如何に生くべきか	96~98	
新家庭の道—ある日のインタヴュー—天分を伸ばし職業に生きる	如何に生くべきか	98~99	
新家庭の道—ある日のインタヴュー—恋愛と親子の立場	如何に生くべきか	99~101	
新家庭の道—ある日のインタヴュー—若い家庭に二つの希い	如何に生くべきか	101~102	
自由と幸福—谷川徹三氏との対談—楽 し み	如何に生くべきか	103~110	
自由と幸福—谷川徹三氏との対談—幸福の内容	如何に生くべきか	110~113	
自由と幸福—谷川徹三氏との対談—生 き か た	如何に生くべきか	114~119	
自由と幸福—谷川徹三氏との対話—自 由 と は	如何に生くべきか	119~122	
自由と幸福—谷川徹三氏との対話—あ や ま ち	如何に生くべきか	122~126	
希望と勇氣—真下信一氏との対話—青年は何を求めているか	如何に生くべきか	127~132	
希望と勇氣—真下信一氏との対話—安楽よりは理性ある苦痛を	如何に生くべきか	132~136	
希望と勇氣—真下信一氏との対話—真理こそ一切を貫く力	如何に生くべきか	136~141	
希望と勇氣—真下信一氏との対話—戦争の批判から再出発せよ	如何に生くべきか	141~144	
希望と勇氣—真下信一氏との対話—不道徳に遂に勝利なし	如何に生くべきか	145~148	
希望と勇氣—真下信一氏との対話—社会の暗黒と青年の立場	如何に生くべきか	148~152	
希望と勇氣—真下信一氏との対話—哲学流行は社会の不幸から	如何に生くべきか	152~156	
希望と勇氣—真下信一氏との対話—単純さに帰ることの必要	如何に生くべきか	156~159	
希望と勇氣—真下信一氏との対話—ほんものの文化はこれから	如何に生くべきか	159~163	
緑蔭閑談—新島繁氏との対談—歴史への信頼、生活への勇氣	如何に生くべきか	163~166	
緑蔭閑談—新島繁氏との対談—戸坂潤のことなど	如何に生くべきか	167~171	
緑蔭閑談—新島繁氏との対談—内村鑑三先生の講義をきいた頃	如何に生くべきか	171~172	
緑蔭閑談—新島繁氏との対談—主体性論議今昔	如何に生くべきか	172~176	
緑蔭閑談—新島繁氏との対談—信州人と西田哲学	如何に生くべきか	176~177	
緑蔭閑談—新島繁氏との対談—カントと西田哲学	如何に生くべきか	178~180	
緑蔭閑談—新島繁氏との対談—唯物論に対する誤解	如何に生くべきか	181~182	
緑蔭閑談—新島繁氏との対談—新教育制度に関連して	如何に生くべきか	183~185	
緑蔭閑談—新島繁氏との対談—新学制と新生中学	如何に生くべきか	185~187	

表 題	書 名	頁	初出年
学問と人生—新入学生諸君を迎う 京都帝大新入学生歓迎会講演	天野貞祐集	230~238	1940
学問と人生—年少諸君に与う 甲南高等学校顧問就任の言葉	天野貞祐集	238~242	1941
学問と人生—高校長就任の辞	天野貞祐集	242~247	
学問と人生—新入学生諸君を迎う	天野貞祐集	247~253	
学問と人生—高を去るに際して	天野貞祐集	253~255	
学問と人生—学生諸君に懇う	天野貞祐集	255~259	
学問と人生—学園を巣立つ人々へ	天野貞祐集	259~261	
読書について—読書論	天野貞祐集	263~273	
読書について—読書と思考について	天野貞祐集	273~280	
読書について—読書の思い出	天野貞祐集	280~283	
読書について—読書について	天野貞祐集	283~290	
忘れえぬ人々—わが母のことなど	天野貞祐集	291~293	
忘れえぬ人々—岩元先生の追憶	天野貞祐集	293~296	
忘れえぬ人々—九鬼・岩下両君のことなど	天野貞祐集	297~306	
忘れえぬ人々—内村鑑三先生のこと	天野貞祐集	306~312	
忘れえぬ人々—ドクトル・クレスレルのことなど	天野貞祐集	312~322	
忘れえぬ人々—西田先生のこと	天野貞祐集	322~332	
忘れえぬ人々—浜田総長の追憶	天野貞祐集	332~335	
忘れえぬ人々—ハイデルベルクの思い出	天野貞祐集	335~341	
読者のために	天野貞祐集	343~346	
医家と教養 東京大学病理学教室七十周年記念会講演	医科と教養	1~15	
日本医学会総会祝辞 文部大臣として	医科と教養	15~19	
新しい時代に生きる道「蘭学事始」記念会講演	医科と教養	20~58	
新教育の方向	医科と教養	59~76	1955
新教育に望むこと	医科と教養	77~82	
入試不合格の諸君へ	医科と教養	83~84	
倫理科の独立	医科と教養	85~86	
痛ましい出来事	医科と教養	87~88	
知育と徳育	医科と教養	89~90	
暑中休暇—年少学徒へ	医科と教養	91~92	
日本人だという自覚—国旗、国歌で国家観念を培養	医科と教養	93~95	
修学旅行の問題	医科と教養	96~98	
私学と私	医科と教養	99~103	
大学入試の間	医科と教養	104~107	
わたしの教師像—教師の主体性の掘り下げの論拠	医科と教養	108~109	
わたしの教師像—聖職の自覚は不可欠の条件	医科と教養	109~112	
わたしの教師像—教師は愛国者、生徒は愛国者に教育	医科と教養	112~113	
わたしの教師像—教育者に要求する見識	医科と教養	114~115	
わたしの文章道	医科と教養	116~128	
翻訳 難 儀	医科と教養	129~135	
わたしと国語	医科と教養	136~139	
外国語の修得	医科と教養	140~153	
国を愛する心	医科と教養	154~155	
平和をねがう心	医科と教養	156~157	
敗戦後十年の感想—道理は決してひっこまない	医科と教養	158~160	
政治と倫理	医科と教養	161~168	
わたしの宗教	医科と教養	169~170	
心 友	医科と教養	171~173	

表 題	書 名	頁	初出年
日本の文化を大切に 第2回卒業証書授与式式辞	天野貞祐講話集	150~157	1969
如何に生きべきか—人生の道	天野貞祐集	9~ 15	
如何に生きべきか—人生私見	天野貞祐集	15~ 24	
如何に生きべきか—私の人生観	天野貞祐集	24~ 27	
如何に生きべきか—哲学と人生	天野貞祐集	28~ 33	
如何に生きべきか—自然と人生	天野貞祐集	33~ 36	
如何に生きべきか—スポーツと人生	天野貞祐集	36~ 40	
如何に生きべきか—生きゆく道	天野貞祐集	40~ 49	
如何に生きべきか—人生観ということ	天野貞祐集	50~ 51	
如何に生きべきか—人生の二途	天野貞祐集	51~ 52	
如何に生きべきか—人生の大道	天野貞祐集	52~ 53	
如何に生きべきか—如何に生きべきか	天野貞祐集	53~ 55	
如何に生きべきか—日日の生き方	天野貞祐集	55~ 56	
如何に生きべきか—働らくこと	天野貞祐集	56~ 57	
如何に生きべきか—人に仕える心	天野貞祐集	58~ 59	
如何に生きべきか—決断と責任	天野貞祐集	59~ 61	
如何に生きべきか—人さまざま	天野貞祐集	61~ 62	
如何に生きべきか—人間の優等生	天野貞祐集	62~ 64	
如何に生きべきか—何をたよりに生きるか	天野貞祐集	65~ 66	
如何に生きべきか—人生の目的	天野貞祐集	66~ 68	
如何に生きべきか—時 間	天野貞祐集	68~ 70	
如何に生きべきか—公共奉仕の精神について	天野貞祐集	70~ 77	
道理について—道理について—三輪・岩垂・鶴飼三先生記念会講演	天野貞祐集	79~ 92	
道理について—人間の苦悩と創造	天野貞祐集	93~112	
道理について—自覚の反省	天野貞祐集	113~124	
道理について—国難の克服	天野貞祐集	124~128	
道理について—自由について	天野貞祐集	128~132	
道理について—迷 う 心	天野貞祐集	132~137	
道理について—精神と物質	天野貞祐集	138~140	
道理について—道理の感覚	天野貞祐集	141~142	
道理について—人格と自由	天野貞祐集	142~145	
道理について—人間の品位	天野貞祐集	145~146	
道理について—人間の尊重	天野貞祐集	146~147	
道理について—人格の尊厳	天野貞祐集	148~149	
道理について—自分と他人	天野貞祐集	149~150	
道理について—国を愛する心	天野貞祐集	150~152	
道理について—基本的人権の哲学的基礎	天野貞祐集	152~166	
友情・愛・幸福—友情論	天野貞祐集	167~177	
友情・愛・幸福—友情・同情・愛	天野貞祐集	177~183	
友情・愛・幸福—友情について	天野貞祐集	183~190	
友情・愛・幸福—愛について—愛の多様な発露	天野貞祐集	191~193	
友情・愛・幸福—愛について—祖国愛	天野貞祐集	193~195	
友情・愛・幸福—愛について—友 情	天野貞祐集	195~197	
友情・愛・幸福—幸福について (1) —若き女性に与う	天野貞祐集	197~207	
友情・愛・幸福—幸福について (2)	天野貞祐集	207~213	
友情・愛・幸福—幸福への道	天野貞祐集	213~222	
友情・愛・幸福—幸福の一断面	天野貞祐集	222~225	
学問と人生—学習の原則	天野貞祐集	227~230	

表 題	書 名	頁	初出年
第六節 自然的神学的証明の不可能性について	天野貞祐全集 9	48～ 56	
第七節 理性の思弁的諸原理に基づく凡ての神学の批判	天野貞祐全集 9	56～ 64	
先験的弁償論付録	天野貞祐全集 9	65	
純粹理性の理念の統制的使用について	天野貞祐全集 9	65～ 83	
人間的理性の自然的弁証性の究極意図について	天野貞祐全集 9	83～106	
二 先験的方法論	天野貞祐全集 9	107	
緒 言	天野貞祐全集 9	109～110	
第一章 純粹理性の訓練	天野貞祐全集 9	111～113	
第一節 独断的使用における純粹理性の訓練	天野貞祐全集 9	114～130	
第二節 抗争的使用に関する純粹理性の訓練	天野貞祐全集 9	131～145	
自己矛盾を起した純粹理性の懷疑的満足の可能性について	天野貞祐全集 9	145～153	
第三節 仮説に関する純粹理性の訓練	天野貞祐全集 9	153～162	
第四節 証明に関する純粹理性の訓練	天野貞祐全集 9	162～170	
第二章 純粹理性の基準	天野貞祐全集 9	171～172	
第一節 我々の理性の純粹使用の究極目的について	天野貞祐全集 9	172～177	
第二節 最高善の理想について	天野貞祐全集 9	177～188	
第三節 私見、知識及び信仰について	天野貞祐全集 9	188～197	
第三章 純粹理性の建築術	天野貞祐全集 9	198～211	
第四章 純粹理性の歴史	天野貞祐全集 9	212～215	
補遺一 目 次	天野貞祐全集 9	219～220	
補遺二 純粹悟性概念の演繹	天野貞祐全集 9	221	
第二節 経験の可能性に対する先験的理由について	天野貞祐全集 9	221～234	
第三節 対象一般に対する悟性の関係と対象の先験的認識の可能性について	天野貞祐全集 9	234～243	
純粹悟性概念の此の演繹の正当にして唯一可能的なることの要約	天野貞祐全集 9	243～244	
補遺三 純粹理性の誤謬について	天野貞祐全集 9	245	
第一誤謬推理	天野貞祐全集 9	245～247	
第二誤謬推理	天野貞祐全集 9	247～254	
第三誤謬推理	天野貞祐全集 9	254～258	
第四誤謬推理	天野貞祐全集 9	258～268	
純粹心理学の総体に関する考察	天野貞祐全集 9	268～285	
本書の成立事情及び第一版二版論	天野貞祐全集 9	289～317	
栄光の過去を土台に未来をみつめて—新大学の創設	天野貞祐講話集	3～ 6	1963
大学における人間形成 第1回入学式式辞	天野貞祐講話集	7～ 13	1964
品位のある獨協大学生として 学長講話	天野貞祐講話集	14～ 19	1964
地震に想う 学長講話	天野貞祐講話集	20～ 28	1964
オリンピックの聖火に想う 学長講話	天野貞祐講話集	29～ 38	1964
親愛と友情関係の形成 学友会発会式式辞	天野貞祐講話集	39～ 41	1964
大学は学問修得による人間形成が大道 第2回入学式式辞	天野貞祐講話集	42～ 55	1965
本当の意味での大学生のスタート 学部進学式式辞	天野貞祐講話集	56～ 60	1966
自由について 学長講話	天野貞祐講話集	61～ 71	1966
大学教育のあり方 獨協大学開学式式辞	天野貞祐講話集	72～ 79	1967
就職希望者のために 学長講話	天野貞祐講話集	80～ 85	1967
夏休み読書のすすめ 学長講話	天野貞祐講話集	86～ 96	1967
よき日本人こそ真の国際人 第1回卒業証書授与式式辞	天野貞祐講話集	97～103	1968
学問を通じての人間形成 学長講話	天野貞祐講話集	104～117	1968
図書館の開館に想う 学長講話	天野貞祐講話集	118～128	1968
獨協学園の伝統と獨協教育 獨協学園85周年記念式典式辞	天野貞祐講話集	129～138	1968
就職内定者に対して 学長講話	天野貞祐講話集	139～149	1968

表 題	書 名	頁	初出年
原則の体系に対する一般的註	天野貞祐全集 8	262~266	
第三章 あらゆる対象一般を現象体と可想体とに区別する理由について	天野貞祐全集 8	267~286	
付録 悟性の経験的使用と先験的使用との混同に依って生ずる反省概念の多義性に	天野貞祐全集 8	287~292	
反省概念の多義性に対する註	天野貞祐全集 8	292~309	
第二門 先験的弁証論	天野貞祐全集 8	311	
緒 言	天野貞祐全集 8	311	
一 先験的仮象について	天野貞祐全集 8	311~315	
二 先験的仮象の座としての純粋理性について	天野貞祐全集 8	315~318	
イ 理性一般について	天野貞祐全集 8	315~318	
ロ 理性の論理的使用について	天野貞祐全集 8	318~319	
ハ 理性の純粋使用について	天野貞祐全集 8	320~323	
第一篇 純粋理性の概念について	天野貞祐全集 8	324~325	
第一節 理念一般について	天野貞祐全集 8	325~331	
第二節 先験的理念について	天野貞祐全集 8	331~339	
第三節 先験的理念の体系	天野貞祐全集 8	340~343	
第二篇 純粋理性の弁証的推理について	天野貞祐全集 8	344~345	
第一章 純粋理性の誤謬推理について	天野貞祐全集 8	346~366	
合理的心理学から宇宙論へ移るについての一般的註	天野貞祐全集 8	366~369	
第二章 純粋理性の二律背反	天野貞祐全集 8	370~372	
第一節 宇宙論的理念の体系	天野貞祐全集 8	372~380	
第二節 純粋理性の背反論	天野貞祐全集 8	380~384	
第一 二律背反	天野貞祐全集 8	384~390	
第二 二律背反	天野貞祐全集 8	391~398	
第三 二律背反	天野貞祐全集 8	399~405	
第四 二律背反	天野貞祐全集 8	405~412	
第三節 この矛盾における理性の感心について	天野貞祐全集 8	412~422	
第四節 純粋理性の先験的課題について	天野貞祐全集 8	422~428	
第五節 四個の先験的理念の凡てによってなされる宇宙論的問題の懐疑的表現	天野貞祐全集 8	428~431	
第六節 宇宙論的弁証論解決の鍵論としての先験的観念論	天野貞祐全集 8	432~436	
第七節 理性の宇宙論的自己矛盾の批判的解決	天野貞祐全集 8	436~444	
第八節 宇宙論的理念に関する純粋理性の統制的原理	天野貞祐全集 8	444~449	
第九節 凡ての宇宙論的理念に関する理性の統制的原理の経験的使用について	天野貞祐全集 8	449~450	
一 現象を総合して世界全体性たらしむところの総合の総体性に関する宇宙論的理念	天野貞祐全集 8	451~455	
二 直観に与へられた一つの全体的なものの分割の総体性に関する宇宙論的理念の解	天野貞祐全集 8	455~458	
数学的・先験的理念の解決に対する結語及び力学的先験的理念の解決に対する	天野貞祐全集 8	458~461	
三 世界の出来事をその原因から導き出す導出の総体性に関する宇宙論的理念の	天野貞祐全集 8	461~464	
自由による原因性の可能性	天野貞祐全集 8	465~467	
自由といふ宇宙論的理念の解明	天野貞祐全集 8	467~479	
四 現象の現存在一般から見られる現象の依存性の総体性に関する宇宙論的理念	天野貞祐全集 8	479~483	
純粋理性の全二律背反に対する結語	天野貞祐全集 8	483~484	
先験的弁証論	天野貞祐全集 9	9	
第三章 純粋理性の理想	天野貞祐全集 9	9	
第一節 理想一般について	天野貞祐全集 9	9~ 12	
第二節 先験的理想について	天野貞祐全集 9	12~ 20	
第三節 思弁的理性が最高存在体の現存在を推論する諸々の論拠について	天野貞祐全集 9	21~ 27	
第四節 神の現存在の実体論的証明の不可能性について	天野貞祐全集 9	27~ 35	
第五節 神の現存在の宇宙論的証明の不可能性について	天野貞祐全集 9	35~ 44	
必然的存在体の現存在に関する凡ての先験的証明における弁償的仮象の発見及び説明	天野貞祐全集 9	44~ 48	

表 題	書 名	頁	初出年
緒 言	天野貞祐全集 8	49	
一 純粹認識と經驗的認識との区別について	天野貞祐全集 8	49~ 50	
二 我々は或種の先驗的認識を有する、普通の悟性といへども決してそれを欠いていない	天野貞祐全集 8	50~ 53	
三 哲学はあらゆる先天的認識の可能性、原理及び範囲を定むる一個の学を要す	天野貞祐全集 8	53~ 57	
四 分析的判断と総合的判断との区別について	天野貞祐全集 8	57~ 60	
五 理性のあらゆる理論学には先天的総合的判断が原理としてふくまれて居る	天野貞祐全集 8	60~ 65	
六 純粹理性の一般的課題	天野貞祐全集 8	65~ 69	
七 純粹理性批判といふ名をもつ特殊な学問の觀念と区分	天野貞祐全集 8	69~ 73	
一 先驗的原理論	天野貞祐全集 8	77	
第一部 先驗的感性論	天野貞祐全集 8	77	
緒 言	天野貞祐全集 8	77	
第一節 空間について	天野貞祐全集 8	80~ 88	
第二節 時間について	天野貞祐全集 8	89~ 98	
先驗的感性論に対する一般的註	天野貞祐全集 8	98~108	
第二部 先驗的論理学	天野貞祐全集 8	109	
緒 言 先驗的論理学の概念	天野貞祐全集 8	109	
一 論理学一般について	天野貞祐全集 8	109~112	
二 先驗的論理学について	天野貞祐全集 8	112~114	
三 一般的論理学の区分—分析論と弁証論と	天野貞祐全集 8	114~117	
四 先驗的論理学の区分—先驗的分析論と先驗的弁証論と	天野貞祐全集 8	117~118	
第一門 先驗的分析論	天野貞祐全集 8	119~120	
第一篇 概念の分析論	天野貞祐全集 8	121	
第一章 凡ての純粹悟性概念を発見する手引について	天野貞祐全集 8	122~123	
第一節 悟性の論理的使用一般について	天野貞祐全集 8	123~124	
第二節 判断に於ける悟性の論理的機能について	天野貞祐全集 8	125~129	
第三節 純粹悟性概念即ち範疇について	天野貞祐全集 8	130~139	
第二章 純粹悟性概念の演繹について	天野貞祐全集 8	140	
第一節 先驗的演繹一般の原理について	天野貞祐全集 8	140~145	
範疇の先驗的演繹へのうつり行	天野貞祐全集 8	146~149	
第二節 純粹悟性概念の先驗的演繹	天野貞祐全集 8	150~178	
第二篇 原則の分析論（判断力の先驗的理説）	天野貞祐全集 8	179~180	
緒 言 先驗的判断力一般について	天野貞祐全集 8	180~183	
第一章 純粹悟性概念の図式性について	天野貞祐全集 8	184~191	
第二章 純粹悟性のあらゆる原則の体系	天野貞祐全集 8	192~193	
第一節 あらゆる分析的判断の最高原則について	天野貞祐全集 8	193~196	
第二節 あらゆる総合的判断の最高原則について	天野貞祐全集 8	196~199	
第三節 純粹悟性のあらゆる総合的原則の体系的表現	天野貞祐全集 8	199~202	
一 直観の公理	天野貞祐全集 8	202~205	
二 知覚の予科	天野貞祐全集 8	206~213	
三 經驗の類推	天野貞祐全集 8	214~218	
甲 第一の類推 実体持続性の原則	天野貞祐全集 8	218~224	
乙 第二の類推 因果律に従へる継起の原則	天野貞祐全集 8	224~240	
丙 第三の類推 交互作用或は相互性の法則に従へる共存の原則	天野貞祐全集 8	241~247	
四 經驗的思惟一般の公準	天野貞祐全集 8	247~252	
觀念論論駁	天野貞祐全集 8	253~262	

表 題	書 名	頁	初出年
純粹理性批判の形而上学的性格—第三章先驗的分析論 感性界より可想界へ	天野貞祐全集 7	60~ 66	
純粹理性批判の形而上学的性格—第四章先驗的弁証論 イデー論	天野貞祐全集 7	67~ 84	
純粹理性批判の形而上学的性格—第四章先驗的弁証論 心の不滅性の問題	天野貞祐全集 7	84~ 94	
純粹理性批判の形而上学的性格—第四章先驗的弁証論 アンティノミーの問題	天野貞祐全集 7	94~112	
純粹理性批判の形而上学的性格—第四章先驗的弁証論 神の存在の証明問題	天野貞祐全集 7	112~118	
純粹理性批判の形而上学的性格—第五章先驗的方法論 実践主張の形而上学	天野貞祐全集 7	119~126	
純粹理性批判の形而上学的性格—第六章 結語	天野貞祐全集 7	127~129	
カント哲学の精神—序 言	天野貞祐全集 7	131~135	
カント哲学の精神—カント精神の成熟	天野貞祐全集 7	135~149	
カント哲学の精神—理論的精神	天野貞祐全集 7	150~153	
カント哲学の精神—実践的精神	天野貞祐全集 7	153~167	1940
人倫の形而上学序論—緒 言	天野貞祐全集 7	169~170	
人倫の形而上学序論—物質から生命へ	天野貞祐全集 7	171~177	
人倫の形而上学序論—生命から精神へ	天野貞祐全集 7	177~181	
人倫の形而上学序論—精神の諸相—企画性	天野貞祐全集 7	181~184	
人倫の形而上学序論—精神の諸相—価値感覚	天野貞祐全集 7	185~194	
人倫の形而上学序論—精神の諸相—自由性	天野貞祐全集 7	194~200	
人倫の形而上学序論—ヘーゲル人倫の形而上学	天野貞祐全集 7	200~208	
人倫の形而上学序論—主観性の主張	天野貞祐全集 7	209~215	
人倫の形而上学序論—ショウベンハウエルの苦悩の形而上学	天野貞祐全集 7	215~220	
人倫の形而上学序論—幸福と苦悩	天野貞祐全集 7	220~224	
人倫の形而上学序論—結 語	天野貞祐全集 7	224~230	1941
人間カント—人 間	天野貞祐全集 7	231~238	
人間カント—年 譜	天野貞祐全集 7	238~254	
人間カント—肖像画	天野貞祐全集 7	254~259	1940
プロレゴメナ 解題及び成立事情	天野貞祐全集 7	261~271	1914
カント プロレゴメナ (訳) 凡例	天野貞祐全集 7	274	1926
—学として現はれ得べきあらゆる将来の形而上学に対する序説	天野貞祐全集 7	277~288	
凡ての形而上学的認識の特質に関する緒言—形而上学の源泉について	天野貞祐全集 7	289~290	
凡ての形而上学的認識の特質に関する緒言 —形而上学と名づけられ得る唯一の認識の種類について	天野貞祐全集 7	290~298	
凡ての形而上学的認識の特質に関する緒言 —判断を一般に分析的と総合的とに区分することに対する註	天野貞祐全集 7	298~299	
序説の一般の問題—一般に形而上学は可能であるか	天野貞祐全集 7	300~303	
序説の一般の問題—如何にして純粹理性からの認識は可能的であるか	天野貞祐全集 7	304~310	
先驗的主要問題—第一編 如何にして純粹数学は可能的であるか	天野貞祐全集 7	311~328	
先驗的主要問題—第二編 如何にして純粹自然科学は可能であるか	天野貞祐全集 7	329~369	
先驗的主要問題—第三編 如何にして形而上学一般は可能的であるか	天野貞祐全集 7	370~398	
結 語—純粹理性の限界決定について	天野貞祐全集 7	399~416	
序説の一般の問題の解決—如何にして学としての形而上学は可能的であるか	天野貞祐全集 7	417~424	
付 録—学としての形而上学を実現するために起り得る事に関して	天野貞祐全集 7	425~426	
“ —「批判」の攻究に先立って「批判」に下された判断の見本	天野貞祐全集 7	426~435	
“ —「批判」を判定する前に之を研究することの建議	天野貞祐全集 7	435~439	
プロレゴメナ 索引	天野貞祐全集 7	440~450	
* 後語	天野貞祐全集 7	451	
* 天野貞祐年賦	天野貞祐全集 7	461~465	
第一版序言	天野貞祐全集 8	15~ 24	
第二版序言	天野貞祐全集 8	25~ 48	

表 題	書 名	頁	初出年
自由学園訓話—自由学園の教育の特色—どこまでも信頼して	天野貞祐全集 6	348~349	
自由学園訓話—「感じつつ」の重要性(協力総会)	天野貞祐全集 6	349~355	1965
自由学園訓話—善き卒業生、善き日本人、善き世界人たれ(卒業式)	天野貞祐全集 6	355~360	1966
自由学園訓話—三つのJ(卒業式)	天野貞祐全集 6	361~364	1967
自由学園訓話—体も心も健康に—一家庭に帰る皆さんへ(一学期終業式)	天野貞祐全集 6	364	1968
自由学園訓話—体も心も健康に—一孝行は今でも大切	天野貞祐全集 6	364~365	
自由学園訓話—体も心も健康に—一思い出す読書の夏休み	天野貞祐全集 6	365	
自由学園訓話—体も心も健康に—一母への思慕	天野貞祐全集 6	366	
自由学園訓話—体も心も健康に—一物質的生活の変化にとらわれず	天野貞祐全集 6	366~367	
自由学園訓話—体も心も健康に—一昔のことばが今も生きている実例	天野貞祐全集 6	367	
自由学園訓話—体も心も健康に—一秋の勉学にそなえて	天野貞祐全集 6	367~368	
自由学園訓話—信頼の乏しい社会の中に親愛と信仰を見出す(完全出帯の朝)	天野貞祐全集 6	368~372	
自由学園訓話—新年というオアシスに休んで(三学期始業式)	天野貞祐全集 6	372	1969
自由学園訓話—新年というオアシスに休んで—一理屈以上の新年の意味	天野貞祐全集 6	372~374	
自由学園訓話—新年というオアシスに休んで—一教育全体のなかの大学問題	天野貞祐全集 6	374~377	
自由学園訓話—新年というオアシスに休んで—一生活の中に生きている知識	天野貞祐全集 6	377~378	
自由学園訓話—新しい時代に魂をもって生きたい(入学式)	天野貞祐全集 6	378~379	1969
自由学園訓話—新しい時代に魂をもって生きたい—一ものの値打ちに対する感覚	天野貞祐全集 6	379~380	
自由学園訓話—新しい時代に魂をもって生きたい—「自由」の誤解	天野貞祐全集 6	380~381	
自由学園訓話—新しい時代に魂をもって生きたい—一メセス羽仁の「パット」	天野貞祐全集 6	381~382	
自由学園訓話—新しい時代に魂をもって生きたい —自由を与えられている人間の値打ちと辛さ	天野貞祐全集 6	383	
自由学園訓話—新しい時代に魂をもって生きたい —普通に自由といわれているもの	天野貞祐全集 6	384	
自由学園訓話—新しい時代に魂をもって生きたい—一してもよい自由	天野貞祐全集 6	384~386	
自由学園訓話—新しい時代に魂をもって生きたい—一真の「平等」とは何か	天野貞祐全集 6	386	
自由学園訓話—新しい時代に魂をもって生きたい—一人間ゆえの自由や平等	天野貞祐全集 6	387	
自由学園訓話—新しい時代に魂をもって生きたい—一キング牧師のいったこと	天野貞祐全集 6	387~388	
自由学園訓話—新しい時代に魂をもって生きたい —人間の精神が作った物質文明・しぜん科学	天野貞祐全集 6	388~389	
自由学園訓話—結 び	天野貞祐全集 6	389~390	
自由学園訓話—男子普通科高等科の諸君へ(ミスター羽仁の誕生日)	天野貞祐全集 6	390~393	1970
自由学園訓話—女子部の皆さんへ(女子部食堂でのお話)	天野貞祐全集 6	393~397	1970
自由学園訓話—新卒業生におくる言葉(卒業式)	天野貞祐全集 6	397~398	1971
自由学園訓話—祖父のような気持ちをもって—一規則正しい生活	天野貞祐全集 6	398~399	
自由学園訓話—祖父のような気持ちをもって—一決して純真だけでは足りない	天野貞祐全集 6	399~400	
自由学園訓話—祖父のような気持ちをもって—一属する団体の本来の性格を助ける	天野貞祐全集 6	400~402	
純粹理性批判の形而上学的性格—一序	天野貞祐全集 7	11~ 14	
純粹理性批判の形而上学的性格—第一章序説 形而上学の再生	天野貞祐全集 7	15~ 18	
純粹理性批判の形而上学的性格—第一章序説 純粹理性批判の出自	天野貞祐全集 7	18~ 30	
純粹理性批判の形而上学的性格—第一章序説 先験的主要問題	天野貞祐全集 7	30~ 34	
純粹理性批判の形而上学的性格—第二章先験的感性論 空間時間論	天野貞祐全集 7	35~ 39	
純粹理性批判の形而上学的性格—第三章先験的分析論 範疇論—一範疇の形而上的演繹	天野貞祐全集 7	40~ 43	
純粹理性批判の形而上学的性格—第三章先験的分析論 範疇論—一範疇の先験的演繹	天野貞祐全集 7	43~ 51	
純粹理性批判の形而上学的性格—第三章先験的分析論 図式論	天野貞祐全集 7	51~ 55	
純粹理性批判の形而上学的性格—第三章先験的分析論 原則論	天野貞祐全集 7	55~ 60	

表 題	書 名	頁	初出年
自由学園訓話—歴史的教養と論理的鍛練（二学期始業式） —知力の前に意志の力	天野貞祐全集 6	274～276	
自由学園訓話—創立者の精神は太陽のように（創立記念日）	天野貞祐全集 6	276～279	1859
自由学園訓話—新寮舎によせる希望（記念学寮落成式）	天野貞祐全集 6	280～281	1959
自由学園訓話—平和の精神を心に宿して（クリスマスの食卓でのお話）	天野貞祐全集 6	281～283	
自由学園訓話—若き者よ、夢をもて（一学期終業式）	天野貞祐全集 6	283～285	
自由学園訓話—ミセス羽仁のような究理の精神と構想力を （理科研究室開きでのお話）	天野貞祐全集 6	286～287	
自由学園訓話—ミセス羽仁のような究理の精神と構想力を （理科研究室開きでのお話）—科学教育と	天野貞祐全集 6	287～289	
自由学園訓話—ミセス羽仁のような究理の精神と構想力を （理科研究室開きでのお話）—将来を想望	天野貞祐全集 6	289	
自由学園訓話—若い人々の幸福を希って（卒業式）	天野貞祐全集 6	289～290	1961
自由学園訓話—若い人々の幸福を希って—幸福についてのグレイ卿の言葉	天野貞祐全集 6	290～291	
自由学園訓話—若い人々の幸福を希って—この条件を生活に活かす道	天野貞祐全集 6	291～293	
自由学園訓話—若い人々の幸福を希って—幸福の不思議さ	天野貞祐全集 6	293～294	
自由学園訓話—今の時代が昔より進歩している点（三学期終業式）	天野貞祐全集 6	294～298	
自由学園訓話—国家・天皇・世界（天皇誕生日記念講演）	天野貞祐全集 6	298～299	
自由学園訓話—国家・天皇・世界—静かなる愛国心	天野貞祐全集 6	299～300	
自由学園訓話—国家・天皇・世界—天皇ということ	天野貞祐全集 6	300	
自由学園訓話—国家・天皇・世界—国の象徴	天野貞祐全集 6	301	
自由学園訓話—国家・天皇・世界—象徴とは何か	天野貞祐全集 6	301～302	
自由学園訓話—国家・天皇・世界—日本国民的統合の象徴	天野貞祐全集 6	302～303	
自由学園訓話—国家・天皇・世界—独裁国家とのちがいがい	天野貞祐全集 6	303～304	
自由学園訓話—国家・天皇・世界—天皇の権威と親愛	天野貞祐全集 6	304～307	
自由学園訓話—国家・天皇・世界—国歌のこと	天野貞祐全集 6	307～308	
自由学園訓話—国家・天皇・世界—国の値打ちとは何か	天野貞祐全集 6	308～309	
自由学園訓話—国家・天皇・世界—文化創造の力	天野貞祐全集 6	310～311	
自由学園訓話—国家・天皇・世界—日本はよくなっている	天野貞祐全集 6	311～313	
自由学園訓話—国家・天皇・世界—進歩とは何か	天野貞祐全集 6	313～314	
自由学園訓話—国家・天皇・世界—真の日本人は真の世界人	天野貞祐全集 6	314～316	
自由学園訓話—人間の魂を美しくするために（工芸室の落成式）	天野貞祐全集 6	316～318	
自由学園訓話—バックボーンのとあった教育（入学式） —学園の特色の一つ	天野貞祐全集 6	318～319	1962
自由学園訓話—バックボーンのとあった教育—知性と信仰の一致	天野貞祐全集 6	319～320	
自由学園訓話—バックボーンのとあった教育 —「キリストのため、国のため」の実践	天野貞祐全集 6	320～321	
自由学園訓話—過去には感謝、現在には信頼、未来には希望 （三学期始業式）	天野貞祐全集 6	322～326	1963
自由学園訓話—カントによって世に出た青年哲学者、フィヒテ（三学期始業式）	天野貞祐全集 6	326～331	
自由学園訓話—人生の不幸と神の愛（三学期終業式）	天野貞祐全集 6	332～338	1963
自由学園訓話—希望と人生（卒業式）	天野貞祐全集 6	338～343	1964
自由学園訓話—自由学園の教育の特色（入学式）	天野貞祐全集 6	344	1964
自由学園訓話—自由学園の教育の特色—新入生の仕合わせ、父母の仕合わせ	天野貞祐全集 6	344～345	
自由学園訓話—自由学園の教育の特色—行きとどいた教育	天野貞祐全集 6	345	
自由学園訓話—自由学園の教育の特色—その特色	天野貞祐全集 6	346	
自由学園訓話—自由学園の教育の特色—受験準備のない学校	天野貞祐全集 6	346～347	
自由学園訓話—自由学園の教育の特色—一つの美しい話	天野貞祐全集 6	348	

表 題	書 名	頁	初出年
獨協学園訓話一朝 礼	天野貞祐全集 6	195~198	1956
獨協学園訓話一朝 礼	天野貞祐全集 6	198~202	1956
獨協学園訓話一朝 礼	天野貞祐全集 6	203~205	1956
獨協学園訓話一始 業 式	天野貞祐全集 6	205~210	1956
獨協学園訓話一朝 礼	天野貞祐全集 6	210~213	1956
獨協学園訓話一朝 礼	天野貞祐全集 6	213~216	1956
獨協学園訓話一朝 礼	天野貞祐全集 6	217~221	1956
獨協学園訓話一朝 礼	天野貞祐全集 6	222~225	1956
獨協学園訓話一第七十三回創立記念式典	天野貞祐全集 6	225~229	1956
獨協学園訓話一高校卒業式	天野貞祐全集 6	229~230	1957
獨協学園訓話一中学卒業式	天野貞祐全集 6	230~234	1957
獨協学園訓話一朝 礼	天野貞祐全集 6	234~237	1957
獨協学園訓話一朝 礼	天野貞祐全集 6	237~240	1957
獨協学園訓話一朝 礼	天野貞祐全集 6	240~243	1957
獨協学園訓話一朝 礼	天野貞祐全集 6	243~247	1957
獨協学園訓話一卒 業 式	天野貞祐全集 6	247~251	1963
自由学園訓話一心に羽仁先生の人間像を(卒業式)	天野貞祐全集 6	255~257	1956
自由学園訓話一幸福(男子最高学部食堂でのお話)	天野貞祐全集 6	257~258	1957
自由学園訓話一思想・生活・信仰三者の相互に媒介する思想(卒業式) 学園の教育の神髄	天野貞祐全集 6	259	1958
自由学園訓話一思想・生活・信仰三者の相互に媒介する思想(卒業式) 信仰を根底にもつ生活と思想	天野貞祐全集 6	259~260	
自由学園訓話一思想・生活・信仰三者の相互に媒介する思想(卒業式) 二つの人生観	天野貞祐全集 6	260~261	
自由学園訓話一思想・生活・信仰三者の相互に媒介する思想(卒業式)	天野貞祐全集 6	261~263	
自由学園訓話一質素堅実な社会を見て(女子部体操館でのお話) —ベートーヴェン・ギムナジウム	天野貞祐全集 6	263~265	
自由学園訓話一質素堅実な社会を見て(女子部体操館でのお話) —生活を楽しむ西ドイツ	天野貞祐全集 6	265~266	
自由学園訓話一質素堅実な社会を見て(女子部体操館でのお話) —ハイデッガー教室	天野貞祐全集 6	266~267	
自由学園訓話一質素堅実な社会を見て(女子部体操館でのお話) —自由・正義・平和の碑	天野貞祐全集 6	267~268	
自由学園訓話一質素堅実な社会を見て(女子部体操館でのお話) —驚嘆した二つのもの	天野貞祐全集 6	268	
自由学園訓話一質素堅実な社会を見て(女子部体操館でのお話) —法を守るのは当たり前	天野貞祐全集 6	268	
自由学園訓話一質素堅実な社会を見て(女子部体操館でのお話) —健全な西欧	天野貞祐全集 6	269	
自由学園訓話一歴史的教養と論理的鍛練(二期始業式)—幸福の自覚	天野貞祐全集 6	269~270	
自由学園訓話一歴史的教養と論理的鍛練(") —立派な故にむずかしい	天野貞祐全集 6	270~271	
自由学園訓話一歴史的教養と論理的鍛練(") —リッケルト教授の学生への忠告	天野貞祐全集 6	271~272	
自由学園訓話一歴史的教養と論理的鍛練(") —「学問不思・則悶・思而不学・則殆」	天野貞祐全集 6	273	
自由学園訓話一歴史的教養と論理的鍛練(") —どうしてもわかつこうとする努力	天野貞祐全集 6	273~274	

表 題	書 名	頁	初出年
教養の諸相—わたしの文章道	天野貞祐全集 5	343~353	
教養の諸相—翻訳難儀	天野貞祐全集 5	353~358	
教養の諸相—私と国語	天野貞祐全集 5	359~361	
教養の諸相—外国語の習得	天野貞祐全集 5	361~372	
教養の諸相—国を愛する心	天野貞祐全集 5	372~373	
教養の諸相—平和をねがう心	天野貞祐全集 5	373~375	
教養の諸相—敗戦後十年の感想—道理は決してひっこまない	天野貞祐全集 5	375~377	
教養の諸相—政治と倫理	天野貞祐全集 5	377~382	
教養の諸相—わたしの宗教	天野貞祐全集 5	383~384	
教養の諸相—心 友	天野貞祐全集 5	384~386	
教養の諸相—平凡な道	天野貞祐全集 5	386	
教養の諸相—随想 三 夜—西獨をたずねて	天野貞祐全集 5	387~389	
教養の諸相—随想 三 夜—祖 国	天野貞祐全集 5	390~392	
教養の諸相—随想 三 夜—秩 序	天野貞祐全集 5	392~395	
道徳教育について	天野貞祐全集 6	5~ 32	1959
知育の徳育性	天野貞祐全集 6	33~ 38	1936
今日の問題—環境と自由	天野貞祐全集 6	41~ 48	
今日の問題—道 徳	天野貞祐全集 6	49~ 52	
今日の問題—教 養	天野貞祐全集 6	52~ 53	
今日の問題—個人と国家	天野貞祐全集 6	53~ 54	
今日の問題—愛 国 心	天野貞祐全集 6	55~ 57	
今日の問題—皇 室	天野貞祐全集 6	57~ 58	
今日の問題—世界と日本	天野貞祐全集 6	58~ 61	
今日の問題—結 語	天野貞祐全集 6	61~ 64	
真実と世論	天野貞祐全集 6	65~ 87	1970
法 と 自由	天野貞祐全集 6	89~103	1965
甲南訓話—報告隊結成式辞	天野貞祐全集 6	107~113	1941
甲南訓話—朝 礼 訓 話	天野貞祐全集 6	113~115	1941
甲南訓話—始業式の言葉	天野貞祐全集 6	115~120	1942
甲南訓話—入学式式辞	天野貞祐全集 6	120~125	1942
甲南訓話—新年の言葉 (拝賀式式辞)	天野貞祐全集 6	125~128	1943
甲南訓話—始業式訓話	天野貞祐全集 6	128~130	1943
甲南訓話—入学式訓辞	天野貞祐全集 6	130~136	1943
一高訓話—一高校長就任の辞	天野貞祐全集 6	139~144	1947
一高訓話—一高記念祭へ寄せる	天野貞祐全集 6	144~145	1947
一高訓話—新入学生諸君を迎う	天野貞祐全集 6	145~151	1947
一高訓話—高等学校新聞の発刊に寄す	天野貞祐全集 6	152~156	1947
一高訓話—新年に際して高校生に与う	天野貞祐全集 6	156~161	1948
一高訓話—一高記念祭に際して	天野貞祐全集 6	162~163	1948
一高訓話—一高を去るに際して	天野貞祐全集 6	163~165	1948
獨協学園訓話—中学入学式	天野貞祐全集 6	169~173	1956
獨協学園訓話—高校入学式	天野貞祐全集 6	173~177	1956
獨協学園訓話—朝 礼	天野貞祐全集 6	178~180	1956
獨協学園訓話—朝 礼	天野貞祐全集 6	180~183	1956
獨協学園訓話—朝 礼	天野貞祐全集 6	183~186	1956
獨協学園訓話—朝 礼	天野貞祐全集 6	186~188	1956
獨協学園訓話—朝 礼	天野貞祐全集 6	189~191	1956
獨協学園訓話—朝 礼	天野貞祐全集 6	191~195	1956

表 題	書 名	頁	初出年
新時代に思う一法を守ること	天野貞祐全集 5	160~162	1952
新時代に思う一象 徴	天野貞祐全集 5	162~163	1952
新時代に思う一教育と劣等感	天野貞祐全集 5	164~166	1952
新時代に思う一誤解と怠惰	天野貞祐全集 5	166~168	1952
新時代に思う一春のおもい	天野貞祐全集 5	168~171	1952
新時代に思う一国際道徳と個人道徳	天野貞祐全集 5	171~173	1952
新時代に思う一人間の活動について	天野貞祐全集 5	173~181	1952
新時代に思う一天野は九鬼にラヴしている	天野貞祐全集 5	181~182	1952
新時代に思う一学制改革の急務	天野貞祐全集 5	183~184	1952
新時代に思う一帰依するところ	天野貞祐全集 5	184~186	1952
新時代に思う一わたしの趣味	天野貞祐全集 5	186~188	1952
新時代に思う一道徳教育	天野貞祐全集 5	188~189	1952
新時代に思う一愛国心と歴史教育	天野貞祐全集 5	189~191	1952
新時代に思う一ドイツ婦人のこと	天野貞祐全集 5	191~195	1952
新時代に思う一死んだつもり	天野貞祐全集 5	195~197	1952
新時代に思う一倫理科の問題	天野貞祐全集 5	197~198	1952
新時代に思う一新 と 旧	天野貞祐全集 5	199~201	1952
新時代に思う一わたしのくせ	天野貞祐全集 5	201	1952
新時代に思う一象牙の塔を出でて	天野貞祐全集 5	202~203	1952
新時代に思う一教育の現状についての不安	天野貞祐全集 5	203~213	1952
新時代に思う一大学院大学	天野貞祐全集 5	217~215	1952
新時代に思う一科学的技術教育	天野貞祐全集 5	215~216	1952
新時代に思う一内村鑑三先生と私	天野貞祐全集 5	217~219	1952
新時代に思う一小泉信三さんと私	天野貞祐全集 5	219~220	1952
新時代に思う一羽仁もと子夫人をかなしむ	天野貞祐全集 5	221~222	1952
新時代に思う一野村東宮大夫を哀しむ	天野貞祐全集 5	222~223	1952
新時代に思う一和辻哲郎君	天野貞祐全集 5	224~225	1952
新時代に思う一朝永三十郎先生の思い出	天野貞祐全集 5	226~229	1952
新時代に思う一青少年対策の基本理念	天野貞祐全集 5	229~239	1952
新時代に思う一基本的人権の哲学的基礎	天野貞祐全集 5	239~254	1952
教養の諸相 (1955~1960) - 医家と教養 - 東京大学病理学教室七十周年記念会講演	天野貞祐全集 5	257~268	1965
教養の諸相 - 日本医学会総会祝辞 - 文部大臣として	天野貞祐全集 5	268~291	1965
教養の諸相 - 新しい時代に生きる道 - 「蘭学事始」記念会講演	天野貞祐全集 5	271~300	1965
教養の諸相 - 新教育の方向	天野貞祐全集 5	301~314	1995
教養の諸相 - 新教育に臨むこと	天野貞祐全集 5	314~319	
教養の諸相 - 入試不合格の諸君へ	天野貞祐全集 5	319~320	
教養の諸相 - 倫理科の独立	天野貞祐全集 5	320~322	
教養の諸相 - 痛ましい出来事	天野貞祐全集 5	322~324	
教養の諸相 - 知育と徳育	天野貞祐全集 5	324~325	
教養の諸相 - 暑中休暇一年少学徒へ	天野貞祐全集 5	325~327	
教養の諸相 - 日本人だという自覚 - 国旗、国歌で国家観念を培養	天野貞祐全集 5	327~329	
教養の諸相 - 修学旅行の問題	天野貞祐全集 5	329~331	
教養の諸相 - 私学と私	天野貞祐全集 5	331~334	
教養の諸相 - 大学入試の問題	天野貞祐全集 5	334~337	
教養の諸相 - わたしの教師像 - 教師の主体性の掘下げの論拠	天野貞祐全集 5	337~339	
教養の諸相 - わたしの教師像 - 聖職の自覚は不可決の条件	天野貞祐全集 5	339~340	
教養の諸相 - わたしの教師像 - 教師は愛国者、生徒は愛国者に教育	天野貞祐全集 5	341~342	
教養の諸相 - わたしの教師像 - 教育者に要求する見識	天野貞祐全集 5	342~343	

表 題	書 名	頁	初出年
生きゆく道—国家建設の生命力	天野貞祐全集 4	317~319	1946
生きゆく道—私の人生観	天野貞祐全集 4	320~323	1947
生きゆく道—平和に生くる道	天野貞祐全集 4	324~325	1947
人間の哀しみ	天野貞祐全集 4	327~342	1949
平和国家の理念	天野貞祐全集 4	343~371	1947
善とは何か	天野貞祐全集 4	373~390	1950
国民実践要領	天野貞祐全集 4	391~405	
教育刷新の問題 (1947~1948) —教育刷新の問題	天野貞祐全集 5	7~ 23	1947
教育刷新の問題—前期大学論	天野貞祐全集 5	24~ 27	1948
教育刷新の問題—高等学校論	天野貞祐全集 5	28~ 38	1948
教育刷新の問題—大学院の問題	天野貞祐全集 5	39~ 42	1948
教育刷新の問題—教育刷新の基盤	天野貞祐全集 5	43~ 46	1947
教育刷新の問題—六・三・三制私見	天野貞祐全集 5	47~ 48	1947
教育刷新の問題—学芸大学の構想	天野貞祐全集 5	49~ 51	1947
教育刷新の問題—学問の進歩と普及	天野貞祐全集 5	52~ 62	1948
教育刷新の問題—教育の理想	天野貞祐全集 5	63~ 65	1947
新しい大学のビジョン—大学院大学の創設—日本には不幸の新学制	天野貞祐全集 5	69~ 70	1964
新しい大学のビジョン—大学院大学の創設—小中高は受験予備校	天野貞祐全集 5	70~ 72	1964
新しい大学のビジョン—大学院大学の創設—博士課程だけの大学院大学	天野貞祐全集 5	72~ 73	1964
新しい大学のビジョン—日本教育の行くえ	天野貞祐全集 5	74~ 84	1964
新しい大学のビジョン—大学入試の問題— 「入るは易く出ずるは難き」大学とせよ—一人あたり	天野貞祐全集 5	85~ 87	
同 — 同 — 同 — 一校長を軟禁するとは	天野貞祐全集 5	87~ 88	
同 — 同 — 同 — 一大学院だけの大学	天野貞祐全集 5	88~ 90	
同 — 同 — 同 — 一転学の自由	天野貞祐全集 5	91~ 92	
同 — 同 — 同 — 一ひろく知ってふかく考える	天野貞祐全集 5	92~ 93	
同 — 同 — 同 — 一コペルニクスの転回	天野貞祐全集 5	93~ 95	1964
同 — 一獨協大学のねらい— 学問を通じて人間形成の場—大学教育の問題点	天野貞祐全集 5	96~ 97	
同 — 同 — 同 — 一普通の学力で入学	天野貞祐全集 5	97~ 98	
同 — 同 — 同 — 一生涯最後の仕事	天野貞祐全集 5	98	1964
新しい大学のビジョン—私の大学像	天野貞祐全集 5	99~110	1969
新時代に思う (1952~33) —公共奉仕の精神について	天野貞祐全集 5	113~121	1952
新時代に思う—言語の魔術	天野貞祐全集 5	121~123	1952
新時代に思う—共学の問題	天野貞祐全集 5	123~124	1952
新時代に思う—批判的精神	天野貞祐全集 5	125~126	1952
新時代に思う—武蔵野	天野貞祐全集 5	126~128	1952
新時代に思う—原子力時代の世界観	天野貞祐全集 5	128~132	1952
新時代に思う—少数意見	天野貞祐全集 5	133~136	1952
新時代に思う—学生野球	天野貞祐全集 5	136~138	1952
新時代に思う—思慮と自己犠牲	天野貞祐全集 5	138~140	1952
新時代に思う—京の正月のことなど	天野貞祐全集 5	140~142	1952
新時代に思う—眠っていた良心	天野貞祐全集 5	143~145	1952
新時代に思う—倫理的な生命体	天野貞祐全集 5	145~147	1952
新時代に思う—理想的な教師とは	天野貞祐全集 5	147~151	1952
新時代に思う—おむすび	天野貞祐全集 5	151~153	1952
新時代に思う—寛容と政治	天野貞祐全集 5	153~155	1952
新時代に思う—青春なき青春の記	天野貞祐全集 5	155~160	1952

表 題	書 名	頁	初出年
如何に生きべきか—中道を求めて	天野貞祐全集 4	142~148	
如何に生きべきか—人生の目的	天野貞祐全集 4	148~150	
如何に生きべきか—一時 間	天野貞祐全集 4	150~152	
如何に生きべきか—人生の春	天野貞祐全集 4	152~153	
如何に生きべきか—ひろい心	天野貞祐全集 4	153~154	
如何に生きべきか—新 生	天野貞祐全集 4	154~155	
如何に生きべきか—お 説 教	天野貞祐全集 4	156~157	
如何に生きべきか—男女の友情	天野貞祐全集 4	157~158	
如何に生きべきか—時間の苦悶	天野貞祐全集 4	159~160	
如何に生きべきか—女性の解放	天野貞祐全集 4	160~161	
個人と国家—運 命	天野貞祐全集 4	162~163	
個人と国家—国家と個人	天野貞祐全集 4	163~165	
個人と国家—止揚（揚棄）ということ	天野貞祐全集 4	165~167	
個人と国家—逆コース	天野貞祐全集 4	167~168	
個人と国家—独立日本	天野貞祐全集 4	168~170	
個人と国家—愛について	天野貞祐全集 4	170~171	
個人と国家—愛 国 心	天野貞祐全集 4	172~173	
個人と国家—象徴ということ	天野貞祐全集 4	173~174	
個人と国家—文化ということ	天野貞祐全集 4	175~176	
個人と国家—講和の問題	天野貞祐全集 4	176~178	
個人と国家—国旗と国家	天野貞祐全集 4	178~179	
個人と国家—女性の解放	天野貞祐全集 4	179~180	
個人と国家—皇室と国民	天野貞祐全集 4	180~181	
個人と国家—平和条約の成立	天野貞祐全集 4	181~182	
道徳教育—学生諸君に懇う	天野貞祐全集 4	183~187	
道徳教育—断定に先立って研究すること	天野貞祐全集 4	187~188	
道徳教育—歴史教育と愛国心	天野貞祐全集 4	188~190	
胸欲教育—道徳教育について	天野貞祐全集 4	190~223	
道徳教育—わたしの心境—「実践要領」をめぐって	天野貞祐全集 4	223~228	1951
わたしの生活から—新年の言葉	天野貞祐全集 4	229~230	
わたしの生活から—湯川博士	天野貞祐全集 4	230~231	
わたしの生活から—わたしの生活から	天野貞祐全集 4	231~232	
わたしの生活から—「婦人公論」四百号の感想	天野貞祐全集 4	230~233	
わたしの生活から—母への思慕	天野貞祐全集 4	233~234	
わたしの生活から—日 曜 日	天野貞祐全集 4	234~235	
わたしの生活から—わたしの顔	天野貞祐全集 4	235~236	
わたしの生活から—自己を語る	天野貞祐全集 4	236~237	1949
生きゆく道—生きゆく道	天野貞祐全集 4	239~249	1947
生きゆく道—生は悩み	天野貞祐全集 4	250~259	
生きゆく道—生活への勇氣	天野貞祐全集 4	260~267	1946
生きゆく道—迷 う 心	天野貞祐全集 4	268~273	
生きゆく道—世界の新生	天野貞祐全集 4	274~279	
生きゆく道—新生二年目への叡智—とくに復員せる諸姉に与う	天野貞祐全集 4	280~287	1948
生きゆく道—人間は平等なり	天野貞祐全集 4	288~296	1946
生きゆく道—自由について	天野貞祐全集 4	297~301	1948
生きゆく道—青年学徒に懇う	天野貞祐全集 4	302~307	1947
生きゆく道—青年諸君に与う	天野貞祐全集 4	308~313	1947
生きゆく道—道義頹廢の所在	天野貞祐全集 4	314~316	1946

表 題	書 名	頁	初出年
わたしの生活から一終身への郷愁	天野貞祐全集 3	369~371	
わたしの生活から一高坂君をかなしむ	天野貞祐全集 3	372~374	
高坂さんと私	天野貞祐全集 3	374~378	1969
今日に生きる倫理一時間的存在一今日の意味	天野貞祐全集 4	7~ 9	
今日に生きる倫理一今日の問題	天野貞祐全集 4	9~ 12	
今日に生きる倫理一環境と自由性一自由の主体	天野貞祐全集 4	13~ 17	
今日に生きる倫理一個体と全体	天野貞祐全集 4	17~ 22	
今日に生きる倫理一作られて作存在	天野貞祐全集 4	22~ 24	
今日に生きる倫理一徳	天野貞祐全集 4	24~ 29	
今日に生きる倫理一理知的徳	天野貞祐全集 4	30~ 34	
今日に生きる倫理一人間智としての思慮	天野貞祐全集 4	34~ 38	
今日に生きる倫理一徳目と実践	天野貞祐全集 4	38~ 42	
今日に生きる倫理一徳の変易性と不易性	天野貞祐全集 4	42~ 48	
今日に生きる倫理一徳的基準としての勅語	天野貞祐全集 4	48~ 51	
今日に生きる倫理一睿智的空間	天野貞祐全集 4	52~ 54	
今日に生きる倫理一国家と個人 (I)	天野貞祐全集 4	54~ 59	
今日に生きる倫理一国家と個人 (II)	天野貞祐全集 4	59~ 64	
今日に生きる倫理一世界国家の理念一個性と普遍性	天野貞祐全集 4	64~ 67	
今日に生きる倫理一平和日本の在り方 (I)	天野貞祐全集 4	67~ 73	
今日に生きる倫理一平和日本の在り方 (II)	天野貞祐全集 4	73~ 77	
今日に生きる倫理一平和日本の在り方 (III)	天野貞祐全集 4	77~ 83	
今日に生きる倫理一平和日本の在り方 (IV)	天野貞祐全集 4	83~ 89	
今日に生きる倫理一結語一歴史的現実の反省と自覚	天野貞祐全集 4	90~ 96	1950
日々の倫理一人間とはどういうものか一精神と物質	天野貞祐全集 4	97~100	
日日の倫理一人間とはどういうものか一物 と 心	天野貞祐全集 4	100~102	
日日の倫理一人間とはどういうものか一道理の感覚	天野貞祐全集 4	102~103	
日日の倫理一人間とはどういうものか一人 間	天野貞祐全集 4	103~104	
日日の倫理一人間とはどういうものか一抽象的ということ	天野貞祐全集 4	105~106	
日日の倫理一人間とはどういうものか一人格と自由	天野貞祐全集 4	106~110	
日日の倫理一人間とはどういうものか一人間の品位	天野貞祐全集 4	110~111	
日日の倫理一人間とはどういうものか一人間の尊重	天野貞祐全集 4	111~113	
日日の倫理一人間とはどういうものか一人格の尊敬	天野貞祐全集 4	113~114	
日日の倫理一人間とはどういうものか一自分と他人	天野貞祐全集 4	114~115	
日日の倫理一人間とはどういうものか一真実への願い	天野貞祐全集 4	116~117	
如何に生きべきか一人生観ということ	天野貞祐全集 4	118~119	
如何に生きべきか一人生の二途	天野貞祐全集 4	119~120	
如何に生きべきか一人生の大道	天野貞祐全集 4	120~121	
如何に生きべきか一如何に生きべきか	天野貞祐全集 4	121~123	
如何に生きべきか一日々の生き方	天野貞祐全集 4	123~124	
如何に生きべきか一働く こと	天野貞祐全集 4	125~126	
如何に生きべきか一高能率・高賃金	天野貞祐全集 4	126~128	
如何に生きべきか一人に仕える心	天野貞祐全集 4	128~130	
如何に生きべきか一決断と責任	天野貞祐全集 4	130~131	
如何に生きべきか一人さまざま	天野貞祐全集 4	131~133	
如何に生きべきか一読書について	天野貞祐全集 4	133~135	
如何に生きべきか一人間の優等生	天野貞祐全集 4	135~137	
如何に生きべきか一何をたよりに生きるか	天野貞祐全集 4	137~139	
如何に生きべきか一道徳は変化するか	天野貞祐全集 4	139~142	

表 題	書 名	頁	初出年
信念と実践—教育 試 論	天野貞祐全集 3	149～159	1939
信念と実践—教育問題私見	天野貞祐全集 3	160～170	1942
文部行政二ヶ年—文部大臣就任の感想	天野貞祐全集 3	171～177	1950
文部行政二ヶ年—文部行政二 1 ヶ年	天野貞祐全集 3	178～189	1952
文部行政二ヶ年—文部広報と私	天野貞祐全集 3	190～192	1965
文部行政二ヶ年—米国教育使節団を迎えて	天野貞祐全集 3	193～196	1950
文部行政二ヶ年—長岡博士の葬儀に列して	天野貞祐全集 3	197～199	1950
内村山脈の一員として	天野貞祐全集 3	201～210	1961
真実を求めて—新しい社会人のために	天野貞祐全集 3	211～220	
真実を求めて—今の世を生きぬく力	天野貞祐全集 3	221～225	
真実を求めて—勤めを持つ若き人々へ	天野貞祐全集 3	226～229	
真実を求めて—若き女性に寄せる—新年の言葉	天野貞祐全集 3	230～233	
真実を求めて—幸福への道	天野貞祐全集 3	234～243	
真実を求めて—読書について	天野貞祐全集 3	244～248	
真実を求めて—知識人とモラル	天野貞祐全集 3	249～252	
真実を求めて—責任ということ	天野貞祐全集 3	253～256	
真実を求めて—一生は 悩 み	天野貞祐全集 3	256～257	
真実を求めて—日常性について	天野貞祐全集 3	258～268	
真実を求めて—秀 才 論	天野貞祐全集 3	269～279	
真実を求めて—学生と政治運動	天野貞祐全集 3	280～282	
真実を求めて—学園を巣立つ諸君へ	天野貞祐全集 3	283～285	
真実を求めて—わたしの生活から	天野貞祐全集 3	286～289	
真実を求めて—国民の道義と文化の創造	天野貞祐全集 3	290～292	
真実を求めて—文化国家への激励	天野貞祐全集 3	293～295	
真実を求めて—永久平和へのあこがれ	天野貞祐全集 3	296～298	
真実を求めて—自然的必然と歴史的必然	天野貞祐全集 3	299～303	
真実を求めて—時間の審判	天野貞祐全集 3	304～307	
真実を求めて—自分に誠実であれ	天野貞祐全集 3	308～311	
真実を求めて—日本は誇っていい—まねな国民的エネルギー	天野貞祐全集 3	312～313	
真実を求めて—日本は誇っていい—非凡な文化創造力	天野貞祐全集 3	313～314	
真実を求めて—日本は誇っていい—現代の四つの進展	天野貞祐全集 3	314～315	
教育十話—立 志	天野貞祐全集 3	317～319	
教育十話—生い立ち	天野貞祐全集 3	320～322	
教育十話—中学・高校—修業時代 (1)	天野貞祐全集 3	323～325	
教育十話—一高—修業時代 (2)	天野貞祐全集 3	326～328	
教育十話—一高・京大—修業時代 (3)	天野貞祐全集 3	329～331	
教育十話—大学生生活—修業時代 (4)	天野貞祐全集 3	332～334	
教育十話—七高・学習院—教育の実践 (1)	天野貞祐全集 3	335～337	
教育十話—京大—教育の実践 (2)	天野貞祐全集 3	338～340	
教育十話—一高・文部省—教育の実践 (3)	天野貞祐全集 3	341～343	
教育十話—自由学園・獨協学園—教育の実践 (4)	天野貞祐全集 3	344～346	
わたしの生活から—老 年	天野貞祐全集 3	347～349	
わたしの生活から—教育者の哀しみ	天野貞祐全集 3	350～352	
わたしの生活から—道理への信頼	天野貞祐全集 3	353～355	
わたしの生活から—断 絶	天野貞祐全集 3	356～358	
わたしの生活から—葬儀委員長	天野貞祐全集 3	359～362	
わたしの生活から—晩 学	天野貞祐全集 3	363～365	
わたしの生活から—高校生の反抗	天野貞祐全集 3	366～368	

表 題	書 名	頁	初出年
思い出すこと一思い出の先生	天野貞祐全集 2	353~356	1947
身辺雑記一感心したことしないこと	天野貞祐全集 2	357~359	1948
身辺雑記一満 点	天野貞祐全集 2	360~362	1947
身辺雑記一自然と人生	天野貞祐全集 2	363~366	1948
身辺雑記一短文五章一新 年	天野貞祐全集 2	367	
身辺雑記一短文五章一手のない話	天野貞祐全集 2	367~368	
身辺雑記一短文五章一ひとの運命	天野貞祐全集 2	368~370	
身辺雑記一短文五章一世界をわが家に	天野貞祐全集 2	370~371	
身辺雑記一短文五章一歴史を信ぜよ	天野貞祐全集 2	371~373	
ものの考え方について	天野貞祐全集 2	375~376	
ものの考え方について一古来の代表的な人間像	天野貞祐全集 2	376~378	
ものの考え方について一洞穴のイドーラ	天野貞祐全集 2	378~382	
ものの考え方について一権威盲従のイドーラ	天野貞祐全集 2	382~383	
ものの考え方について一市場のイドーラ	天野貞祐全集 2	383~384	
ものの考え方について一知力のイドーラ	天野貞祐全集 2	385~386	
ものの考え方について一道德の本質は変わらない	天野貞祐全集 2	386~390	
ものの考え方について一道德とは社会生活のルールである	天野貞祐全集 2	390~392	
ものの考え方について一道德性を養う三つの要素	天野貞祐全集 2	392~394	
ものの考え方について一個人と国家	天野貞祐全集 2	394~396	
ものの考え方について一愛国心について	天野貞祐全集 2	396~399	
ものの考え方について一天皇は国の象徴であるということについて	天野貞祐全集 2	399~401	
ものの考え方について一個性的な文化の創造は世界性につながる	天野貞祐全集 2	401~404	
ものの考え方について一教育界を道理が支配するように	天野貞祐全集 2	404~405	1959
大学を出た頃のこと	天野貞祐全集 2	407~410	1949
信念と実践一道はちかきに在り	天野貞祐全集 3	7~ 9	1941
信念と実践一奉公の誠について	天野貞祐全集 3	10~ 20	1943
信念と実践一自覚と反省	天野貞祐全集 3	21~ 33	1942
信念と実践一人生と勤労	天野貞祐全集 3	34~ 49	1941
信念と実践一公に奉ずる心	天野貞祐全集 3	50~ 73	1941
信念と実践一科学と世界・人生観	天野貞祐全集 3	71~ 84	1939
信念と実践一哲学精神の実践	天野貞祐全集 3	85~ 87	1941
信念と実践一幸福と幸運	天野貞祐全集 3	88~ 90	1941
信念と実践一西田先生夏日清談	天野貞祐全集 3	91~ 97	1942
信念と実践一平生先生喜寿祝賀式辞	天野貞祐全集 3	98~102	1942
信念と実践一この生涯を見よ	天野貞祐全集 3	104~107	1943
信念と実践一岩元先生の追憶	天野貞祐全集 3	108~111	1941
信念と実践一高の思い出	天野貞祐全集 3	112~122	1944
信念と実践一九鬼君のこと	天野貞祐全集 3	123~133	1941
信念と実践一短文十章一落第の悩み	天野貞祐全集 3	134~135	
信念と実践一短文十章一言説と実践	天野貞祐全集 3	135~136	
信念と実践一短文十章一親切心	天野貞祐全集 3	136~138	
信念と実践一短文十章一職場と教育	天野貞祐全集 3	138~139	
信念と実践一短文十章一性格の鍛練	天野貞祐全集 3	139~140	
信念と実践一短文十章一夏に親しむ	天野貞祐全集 3	140~141	
信念と実践一短文十章一わがふるさと	天野貞祐全集 3	141~142	
信念と実践一短文十章一斎藤君の話	天野貞祐全集 3	143~145	
信念と実践一短文十章一車中の時間	天野貞祐全集 3	145~147	
信念と実践一短文十章一岩波書店回顧三十年感謝晩餐会における挨拶	天野貞祐全集 3	147~148	1941

表 題	書 名	頁	初出年
無限の可能性について—四つの偶像にかえりみ謙虚なこころ	天野貞祐全集 2	171	
文化の得失について	天野貞祐全集 2	172~174	
勉強の秘訣	天野貞祐全集 2	175~176	
受験生に与う—受験生第一歩の目標は	天野貞祐全集 2	177~178	
受験生に与う—第一目標へ二回試みよ	天野貞祐全集 2	178	
受験生に与う—「沈潜反復」すること	天野貞祐全集 2	178~179	
受験生に与う—何よりも良き習慣を	天野貞祐全集 2	180~181	
受験生に与う—学びつつ考えること	天野貞祐全集 2	181	
受験生に与う—受験はスポーツである	天野貞祐全集 2	181~183	
受験生に与う—人間としての優等生	天野貞祐全集 2	183~184	
受験生に与う—恵まれている諸君の資格	天野貞祐全集 2	184~185	
受験生に与う—アルバイトの倫理	天野貞祐全集 2	185	
受験生に与う—毎日の感謝を	天野貞祐全集 2	186	
受験生に与う—試験は人間修養の一過程	天野貞祐全集 2	186~188	
修学旅行に学ぶ	天野貞祐全集 2	189~192	
知者と愛知者	天野貞祐全集 2	193~194	
人間の尊重	天野貞祐全集 2	195~206	
人間生活の大道	天野貞祐全集 2	206~210	
歴史の進歩と青年の使命	天野貞祐全集 2	211~214	
個人・国家・世界	天野貞祐全集 2	215~218	
旧道徳と新道徳	天野貞祐全集 2	219~233	
学園を巣立つ人たちへ	天野貞祐全集 2	234~236	
若き女性のために—新しい時代に生きる女性たちへ	天野貞祐全集 2	237~247	1948
若き女性のために—婦人学徒に与う	天野貞祐全集 2	248~253	
若き女性のために—若き女性に与う	天野貞祐全集 2	254~259	
幸福とはなにか—若き人たちと幸福を語る	天野貞祐全集 2	260~267	
幸福とはなにか—幸福の意味—快楽と苦痛	天野貞祐全集 2	268~269	
幸福とはなにか—幸福の意味—完全な幸福とは	天野貞祐全集 2	270	
幸福とはなにか—幸福の意味—豚の幸福とソクラテスの不幸	天野貞祐全集 2	270~271	
幸福とはなにか—幸福の意味—徳に即しての活動	天野貞祐全集 2	271~272	
幸福とはなにか—幸福の意味—正直者が損をしない社会	天野貞祐全集 2	272~273	
幸福とはなにか—幸福の意味—幸福の女神の話	天野貞祐全集 2	273~274	
幸福とはなにか—幸福に意味—幸福の秘密	天野貞祐全集 2	274	
幸福とはなにか—生活のうるおい	天野貞祐全集 2	275~281	1949
幸福とはなにか—運命と幸福	天野貞祐全集 2	282~292	1940
幸福とはなにか—幸福の一断面	天野貞祐全集 2	293~296	1947
教養への道—文化と教養	天野貞祐全集 2	297~304	
教養への道—教育と社会	天野貞祐全集 2	305~313	
教養への道—教育問答	天野貞祐全集 2	314~316	1947
教養への道—女性の敬重	天野貞祐全集 2	317~318	1948
教養への道—教養ということ	天野貞祐全集 2	319~321	1949
教養への道—これからの家庭教育	天野貞祐全集 2	322~330	1948
青年の自覚のために—新年のことば (1)	天野貞祐全集 2	331~334	1949
青年の自覚のために—新年のことば (2)	天野貞祐全集 2	335~337	1949
青年の自覚のために—新春の感想	天野貞祐全集 2	338~339	1948
青年の自覚のために—年少学徒に与う	天野貞祐全集 2	340~343	
青年の自覚のために—学習の原則	天野貞祐全集 2	344~347	1949
思い出すこと—私の少年時代	天野貞祐全集 2	348~352	1948

表 題	書 名	頁	初出年
カメラートとフロイント 仲間と友人	天野貞祐全集 1	389~391	1940
旅行雑和	天野貞祐全集 1	392~395	1940
アマゴとアナゴ	天野貞祐全集 1	396~398	1940
春が来た	天野貞祐全集 1	399~406	1940
倭 人	天野貞祐全集 1	407~409	1940
岩下壯一君の追憶	天野貞祐全集 1	410~412	1940
村野常右衛門氏のことなど	天野貞祐全集 1	413~415	1941
わが母のことなど	天野貞祐全集 1	416~418	1941
私の考え方 全体的に考える	天野貞祐全集 1	419~420	
私の考え方 勤労への積極性	天野貞祐全集 1	420	1941
私の科学知識	天野貞祐全集 1	421~422	1941
短文七章 平凡な教訓	天野貞祐全集 1	423~424	
短文七章 総親和	天野貞祐全集 1	424~425	
短文七章 小学教育の重要性	天野貞祐全集 1	426	
短文七章 友達のように	天野貞祐全集 1	427	
短文七章 政党の更生	天野貞祐全集 1	428~429	
短文七章 道理と無理	天野貞祐全集 1	429~430	
短文七章 平常の心	天野貞祐全集 1	430~431	
学生諸君に与う	天野貞祐全集 2	7~ 20	1939
学生・学友会・学生課「京大学生親睦の夕」講演	天野貞祐全集 2	21~ 30	1939
就職に対する心構え	天野貞祐全集 2	31~ 32	1938
「月曜講義」の創設に際して	天野貞祐全集 2	33~ 36	1938
浜田総長の追憶	天野貞祐全集 2	37~ 39	1938
浜田耕作先生のこと	天野貞祐全集 2	40~ 47	1938
西田哲学と歴史の問題	天野貞祐全集 2	48~ 61	1938
哲学と人生	天野貞祐全集 2	62~ 68	1937
学生と音楽	天野貞祐全集 2	69~ 72	1939
読 書 論	天野貞祐全集 2	73~ 84	
読書と思考について	天野貞祐全集 2	85~ 92	1939
読書の思い出	天野貞祐全集 2	93~ 96	1939
ハイデルベルク学派の人々	天野貞祐全集 2	97~102	1938
岩波「国語」を読んで	天野貞祐全集 2	103~106	1938
本多謙三君の追憶	天野貞祐全集 2	107~109	1938
牛山茂樹君の追憶	天野貞祐全集 2	110~112	1937
不幸な天才者	天野貞祐全集 2	113~115	1937
スポーツと人生	天野貞祐全集 2	116~119	1938
京 の 夏	天野貞祐全集 2	120~121	1937
日本的なるもの	天野貞祐全集 2	122~124	1938
人物雑和	天野貞祐全集 2	125~128	1938
「泣虫小僧」を観る	天野貞祐全集 2	129~132	1938
友 情 論	天野貞祐全集 2	133~144	1939
創造的人生観	天野貞祐全集 2	145~161	1938
無限の可能性について—京都駅ですばかしの食う	天野貞祐全集 2	163~165	
無限の可能性について—鎌倉の「三もん書生」たち	天野貞祐全集 2	165~166	
観現の可能性について—学者の才能は勤勉努力のみ	天野貞祐全集 2	166~167	
無限の可能性について—専門をもつ難しさと楽しさ	天野貞祐全集 2	167~168	
無限の可能性について—無声の声を聞き無形の形を見る	天野貞祐全集 2	168~169	
無限の可能性について—哲学とは「途上にあること」	天野貞祐全集 2	169~171	

表 題	書 名	頁	初出年
自由の問題	天野貞祐全集 1	30~72	1932
国難の克服	天野貞祐全集 1	73~78	1933
貧 乏 論 (1) 高田教授の「貧乏の話」を読む	天野貞祐全集 1	78~85	1934
貧 乏 論 (2) 貧乏に関する高田教授の解明を読む	天野貞祐全集 1	86~91	1934
貧乏論追記	天野貞祐全集 1	92~94	1935
人生私見	天野貞祐全集 1	95~105	1935
京大文学部三十周年感想 明治から大正へ	天野貞祐全集 1	106~108	1936
個体と全体 信濃教育会総集會講演	天野貞祐全集 1	109~128	1936
夏日随想 1 夏の幸福	天野貞祐全集 1	129~131	
夏日随想 2 私の銷夏生活	天野貞祐全集 1	131~132	
夏日随想 3 野球見物	天野貞祐全集 1	133~135	1936
人生の諸相 (1)	天野貞祐全集 1	136~139	1936
人生の諸相 (2)	天野貞祐全集 1	140~141	1937
ヒューマニズムについて	天野貞祐全集 1	142~151	1936
鶏が神経質になる話	天野貞祐全集 1	152~154	1937
徳育について	天野貞祐全集 1	155~170	1937
道理について 三輪・岩垂・鶴飼三先生記念講演	天野貞祐全集 1	171~186	1937
友情・同情・愛	天野貞祐全集 1	191~197	1940
学問と人生	天野貞祐全集 1	198~208	1940
東洋的学問と西洋的学問	天野貞祐全集 1	209~214	1939
社会生活の反省	天野貞祐全集 1	215~223	1940
生形式と個人性	天野貞祐全集 1	224~237	1939
現代学生論	天野貞祐全集 1	238~241	1940
新学年に際して学生諸君に与う	天野貞祐全集 1	242~247	1940
自覚と自負	天野貞祐全集 1	248~255	1937
大学の理念 1 大学の形成 (本文タイトルは大学理念の形成)	天野貞祐全集 1	256~260	
大学の理念 2 全体感覚 全体性の理念	天野貞祐全集 1	260~264	
大学の理念 3 大学理念の契機 (イ) 学問研究	天野貞祐全集 1	264~266	
大学の理念 4 人格の陶冶	天野貞祐全集 1	266~268	
大学の理念 5 職業への準備	天野貞祐全集 1	268~270	
大学の理念 6 国家への奉仕	天野貞祐全集 1	270~272	1940
幸福について 若き女性に与う	天野貞祐全集 1	273~283	1940
人生の道	天野貞祐全集 1	284~290	1940
人間の苦悩と創造	天野貞祐全集 1	291~312	1939
勤労のよろこびについて	天野貞祐全集 1	317~336	1940
人生と創造 (1) 立身出世から事柄自体へ 自由学園講演	天野貞祐全集 1	337~338	1940
人生と創造 (2) 人間性の畏敬	天野貞祐全集 1	338~340	
人生と創造 (3) 死して生くこと	天野貞祐全集 1	340~343	
人生と創造 (4) 創造ということ	天野貞祐全集 1	343~346	
人生と創造 (5) 自由ということ	天野貞祐全集 1	346~349	
人生と創造 (6) 道理の感覚	天野貞祐全集 1	349~350	
人生と創造 (7) 人生の意味	天野貞祐全集 1	350~351	1940
年少諸君に与う 甲南高等学校顧問就任の言葉	天野貞祐全集 1	352~355	1941
新入学生諸君を迎う 京都帝大新入学生歓迎會講演	天野貞祐全集 1	356~364	1940
伝統と創造 一高記念祭講演	天野貞祐全集 1	365~378	1939
フンボルトの大学論	天野貞祐全集 1	379~380	
ベルリンにおける最高学府の内的及び外的組織について	天野貞祐全集 1	380~386	1941
晏子の御者	天野貞祐全集 1	387~388	1941

表 題	書 名	頁	初出年
小・中学時代 わがふるさと（京都帝大新聞・信念と実践）	天野貞祐著作集 4	14～ 15	1941
小・中学時代 わたしの少年時代（真理の国・若き女性のために）	天野貞祐著作集 4	16～ 22	1946
小・中学時代 思い出の先生（真理の国・若き女性のために）	天野貞祐著作集 4	23～ 27	1947
小・中学時代 わが母のことなど（現代・私の人生観・若き女性のために）	天野貞祐著作集 4	28～ 31	1941
小・中学時代 村野常右衛門氏のことなど（政界往来・私の人生観）	天野貞祐著作集 4	32～ 36	1941
小・中学時代 三樹一平氏の追憶（桂川遺響）	天野貞祐著作集 4	37～ 41	1925
小・中学時代 斎藤君の話（財政・信念と実践）	天野貞祐著作集 4	42～ 46	1941
一高時代 岩元先生の追憶（一高会誌）	天野貞祐著作集 4	48～ 52	1941
一高時代 一高の思い出（信念と実践）	天野貞祐著作集 4	53～ 68	1944
一高時代 九鬼君のこと(1)（思想）	天野貞祐著作集 4	69～ 70	1941
一高時代 九鬼君のこと(2)（「をりにふれて」後語りずれも信念と実践）	天野貞祐著作集 4	70～ 84	1941
一高時代 岩下壮一君の追憶（カトリック新聞・私の人生観）	天野貞祐著作集 4	85～ 88	1940
一高時代 九鬼・岩下両君のことなど（朝日評論）	天野貞祐著作集 4	89～105	1948
一高時代 牛山茂樹君の追憶（信濃文芸・学生に与ふる書）	天野貞祐著作集 4	106～109	1937
一高時代 立沢君の追憶（向陵時報）	天野貞祐著作集 4	110～114	1936
一高時代 内村鑑三先生のこと(1)（京都帝大新聞・道理の感覚）	天野貞祐著作集 4	115～124	1932
一高時代 内村鑑三先生のこと(2)（内村全集（付録月報）・道理の感覚）	天野貞祐著作集 4	125～131	1933
一高時代 人物雑和（夕刊大阪新聞・学生に与ふる書）	天野貞祐著作集 4	132～137	1938
京大学生時代 姉崎博士のことなど（改造文芸）	天野貞祐著作集 4	140～155	1949
京大学生時代 京大文学部三十周年感想（京大文学部三十周年史・道理の感覚）	天野貞祐著作集 4	156～159	1936
京大学生時代 大学を出た頃のこと（人間・如何に生くべきか）	天野貞祐著作集 4	160～164	1949
七高教授時代 不幸な天才者（文芸春秋・学生に与ふる書）	天野貞祐著作集 4	166～170	1937
七高教授時代 ドクトル・クレスレルのことなど（朝日評論）	天野貞祐著作集 4	171～186	1948
学習院教授・商大講師時代 本多謙三君の追憶（一橋新聞・学生に与ふる書）	天野貞祐著作集 4	188～191	1938
留学時代 ハイデルベルク学派の人々（理想・学生に与ふる書）	天野貞祐著作集 4	194～202	1938
留学時代 ハイデルベルクの思い出（京都帝大新聞・道理の感覚）	天野貞祐著作集 4	203～231	1931
留学時代 鶏が神経質になる話（文芸春秋・道理の感覚）	天野貞祐著作集 4	214～217	1937
留学時代 日本的なるもの（文芸春秋・学生に与ふる書）	天野貞祐著作集 4	218～222	1938
京大教授時代 アマゴとアナゴ（洛味・私の人生観）	天野貞祐著作集 4	224～227	1940
京大教授時代 西田先生夏日清談（文芸・信念と実践）	天野貞祐著作集 4	228～237	1942
京大教授時代 西田先生のこと(1)（思想）	天野貞祐著作集 4	238～242	1945
京大教授時代 西田先生のこと(2)（新潮）	天野貞祐著作集 4	243～259	1947
京大教授時代 浜田耕作先生のこと（知性・学生に与ふる書）	天野貞祐著作集 4	260～271	1938
京大教授時代 浜田総長の追憶（京都帝大新聞・学生に与ふる書）	天野貞祐著作集 4	272～276	1938
京大教授時代 清徳君のこと（「形而上学」序）	天野貞祐著作集 4	277～278	1939
京大教授時代 哲学精神の実践（週刊朝日・信念と実践）	天野貞祐著作集 4	279～282	1941
京大教授時代 カメラートとフロイント（仲間と友人）（京都帝大新聞・私の人生観）	天野貞祐著作集 4	283～286	1940
京大教授時代 京大教授回顧談（構想）	天野貞祐著作集 4	287～303	1945
甲南高校時代 平生先生喜寿祝賀式式辞（甲南・信念と実践）	天野貞祐著作集 4	304～311	1942
甲南高校時代 この生涯を見よ（毎日新聞・信念と実践）	天野貞祐著作集 4	312～317	1943
一高校長以後岩波さんの追憶（信濃教育）	天野貞祐著作集 4	320～323	1946
岩波書店回顧三十年感謝晩餐会における挨拶（信念と実践）	天野貞祐著作集 4	324～325	1942
岩井希夫君（「病床哲学」序）	天野貞祐著作集 4	326～330	1948
読書の思い出 1939.1（東京堂月報・学生に与ふる書）	天野貞祐著作集 4	332～337	1939
後 語	天野貞祐著作集 4	340～341	
ハイデルベルクの思い出	天野貞祐全集 1	11～ 17	1931
内村鑑三先生のこと(1)	天野貞祐全集 1	18～ 24	1932
内村鑑三先生のこと(2)	天野貞祐全集 1	25～ 29	1933

天野貞祐先生著作目録（稿）

情報センター

はじめに

獨協中学・高等学校の第13代校長天野貞祐先生の著書は、1914年、先生の恩師京都帝国大学教授桑木巖氏と共訳したカントの『プロレゴメナ』（哲学序説）や先生の全集・著作集など含めると40冊以上にもなる。現在本校情報センター内の学園資料室には、国語科の安藤維男教諭をはじめ多くの教職員の協力によって先生の上梓された単行本が揃いつつある。

ところで、訳本以外のこうした単行本を紐解いてみると、そこに載せられている文章は新聞・雑誌などに寄稿されたものが多いことがわかる。つまり、最初雑誌や新聞に掲載したものが複数の単行本に再録され、さらに全集・著作集などに再々録されているのであり、再録の際には表題を改める場合もあったようである。そして、再録、再々録の際に原載を明記していない場合がままあり、さらに原載の雑誌名や新聞名を明記してあっても雑誌の号数や新聞の発行日を必ずしも明記していない場合が多い。

戦前・戦後を通じて教育・倫理・哲学などの分野で常に厳格かつ鋭い提言をされてこられた天野先生のさまざまな文章を集め、年代順に再配列して先生の業績の全貌を明らかにしようとする企画は、だいぶ前からあったようだが、実際に作業を始めてみると時間の制約や初出の雑誌の調査など多くの困難に直面した。そしてそうした状況は現在も続いている。しかし一方で天野先生が御健在のころの様子を知る教職員は一人去り二人去りと次第に少なくなりつつあり、目録を完成させるまであまり時間の猶予はないと思い、今回、試作の形で著作目録を掲載することにした。タイトルの最後に「稿」を付けた所以である。

今回の著作目録は、単行本・全集・著作集などにどのような文章が掲載されているかをまず確認する意味で、著書の中の表題をすべて抽出し、著書ごとにまとめ（著書は五十音配列）、頁数を付し、初出の年代が判明している場合はそれも付記した。また、単行本などに原載雑誌名や他に再録している単行本名がわかる場合は表題の項の中で（ ）を付して示しておいた。

情報センターとしては、今回作成したこの目録をもとに各文章の原載雑誌・新聞などの調査をさらに進め、各文章を発表された年代順にまとめ、表題・原載・再録単行本名などを付して、より充実した著作目録の作成を今後目指していきたい。

今回の目録作成に当たっては安藤教諭に大変お世話になった。また情報センターの高橋とし子氏には目録カードの作成から目録原稿の打ち込みまですべてを担当いただいた。お二人の尽力がなければ今回のこの目録は作成できなかった。衷心より深謝申し上げる。お二人のご協力を無駄にせぬよう著作目録の充実に一層努力する所存である。

（文責 兼田）

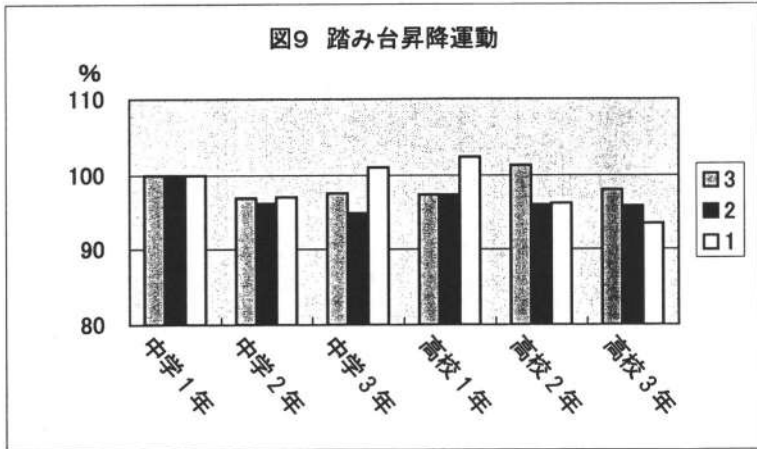
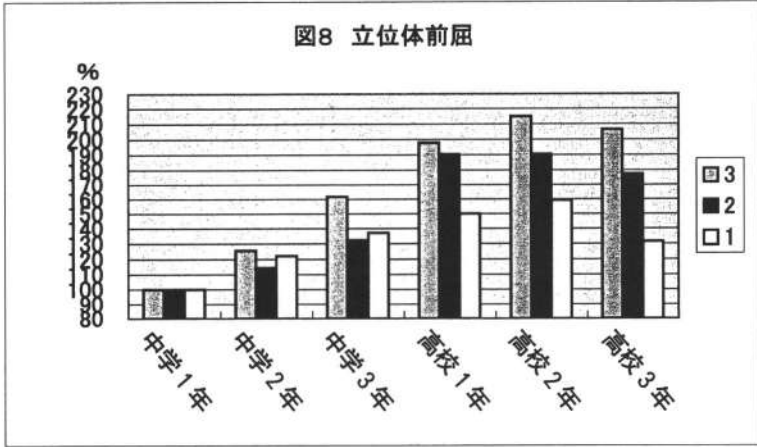
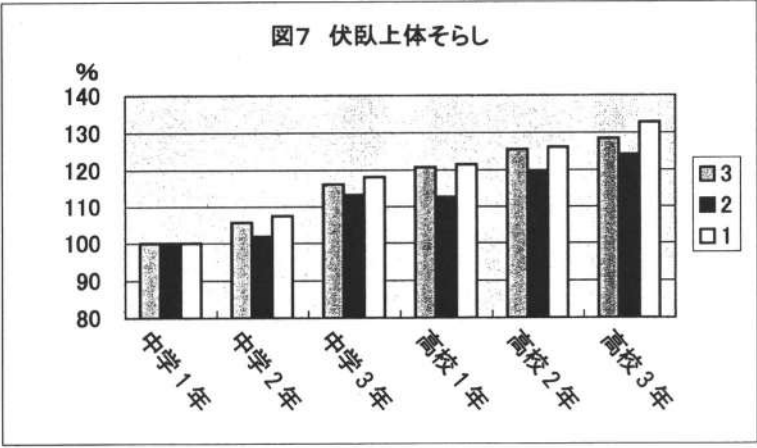


図4 垂直とび

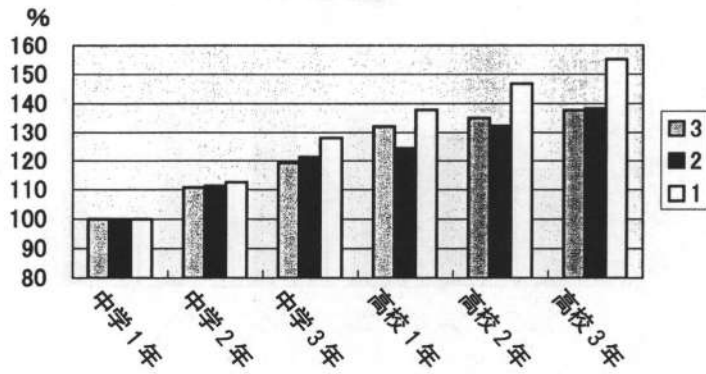


図5 背筋力

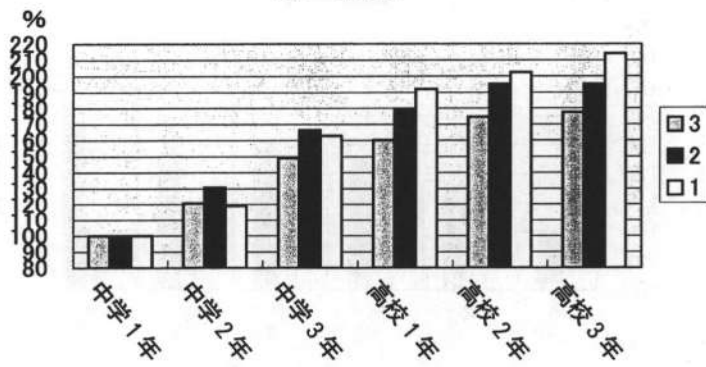


図6 握力

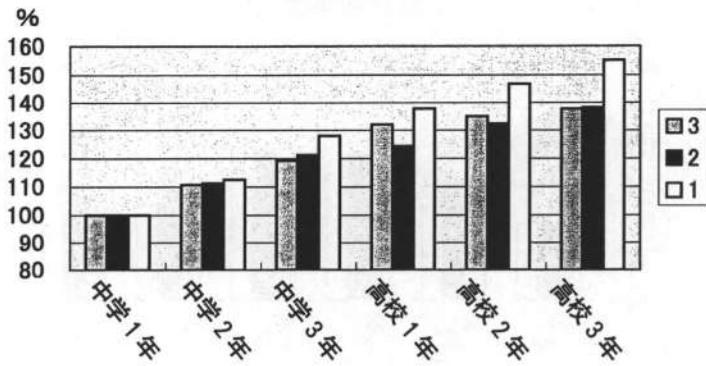


図1 身長

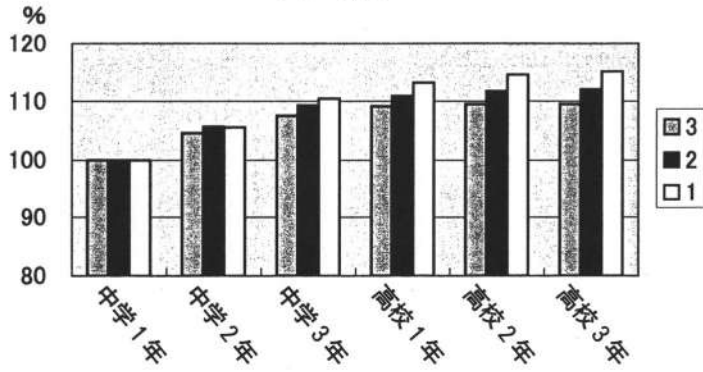


図2 体重

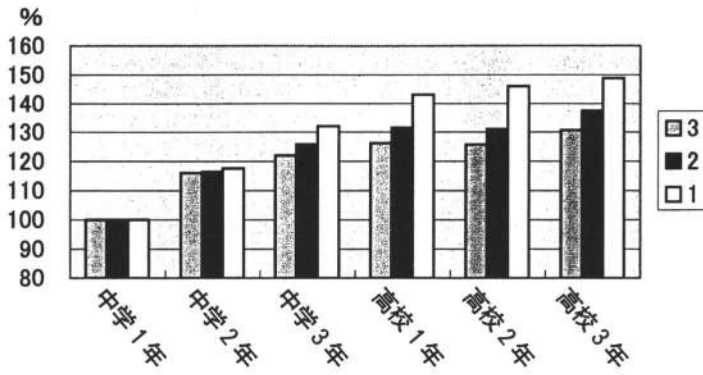


図3 反復横とび

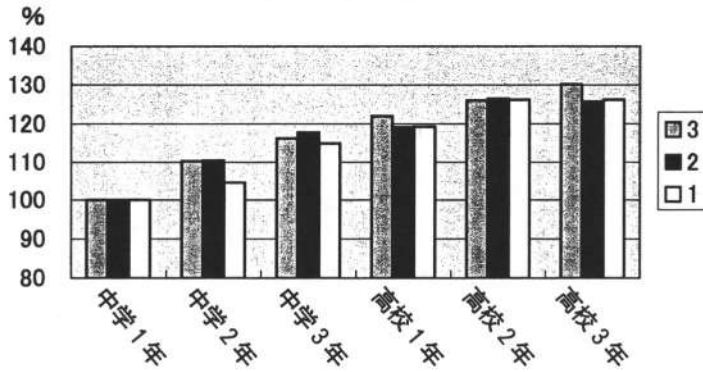


表1 身長3区分の体格・体力テスト結果

学年	群	身長	体重	反復横 とび	垂直と び	背筋力	握力	伏臥上 体そらし	立位体 前屈	踏み台 昇降
M1 (1995)	全国	150.0 (8.4)	44.4 (9.1)	38.8 (5.4)	43.5 (7.8)	81.7 (22.2)	24.8 (6.6)	47.7 (7.6)	6.2 (5.7)	70.2 (11.7)
	全体	152.6 (9.6)	44.8 (10.3)	37.9 (2.8)	42.9 (6.7)	62.0 (13.9)	22.7 (4.7)	43.1 (7.4)	5.4 (6.6)	59.8 (8.0)
	3	163.4 (5.0)	53.2 (9.8)	38.2 (3.4)	44.8 (6.7)	70.2 (14.5)	25.8 (5.0)	43.9 (7.3)	4.7 (5.9)	61.5 (7.9)
	2	152.2 (2.5)	44.5 (7.9)	38.2 (2.4)	45.2 (4.7)	61.2 (12.1)	23.2 (2.6)	44.6 (6.6)	6.2 (6.8)	60.3 (10.1)
	1	143.2 (3.2)	37.5 (5.5)	37.5 (2.5)	39.7 (6.8)	55.2 (10.6)	19.8 (3.8)	41.4 (7.9)	5.4 (7.3)	58.0 (6.6)
	全国	160.6 (7.9)	49.9 (9.8)	43.3 (5.1)	49.7 (8.2)	100.5 (26.9)	31.3 (7.2)	51.1 (8.3)	7.9 (6.4)	70.8 (13.0)
M2 (1996)	全体	160.7 (9.3)	52.3 (11.7)	41.0 (3.3)	47.8 (7.3)	76.0 (16.4)	29.0 (5.6)	45.4 (8.9)	6.5 (6.2)	57.9 (8.0)
	3	171.0 (3.9)	61.7 (10.3)	42.1 (2.7)	49.6 (6.1)	84.7 (15.0)	32.2 (4.7)	46.4 (8.1)	5.9 (5.7)	59.6 (6.9)
	2	160.9 (1.7)	51.8 (8.8)	42.2 (2.2)	50.3 (5.7)	80.0 (11.0)	30.6 (3.7)	45.4 (10.1)	7.1 (8.0)	58.0 (11.0)
	1	151.2 (3.9)	44.1 (7.7)	39.2 (3.7)	44.7 (8.3)	65.7 (15.3)	25.2 (5.2)	44.5 (9.2)	6.6 (5.5)	56.3 (6.8)
	全国	165.4 (7.3)	54.9 (9.7)	44.5 (5.3)	54.4 (8.8)	116.2 (27.4)	36.0 (7.3)	53.3 (9.2)	8.5 (7.2)	73.1 (12.6)
	全体	166.4 (8.2)	56.6 (10.6)	44.0 (3.8)	52.7 (7.0)	98.1 (20.1)	35.2 (5.9)	50.0 (9.1)	7.6 (6.5)	58.7 (8.4)
M3 (1997)	3	175.7 (3.3)	64.9 (9.0)	44.4 (3.9)	53.4 (6.2)	104.7 (18.5)	37.8 (5.1)	51.0 (9.0)	7.6 (4.3)	60.0 (8.3)
	2	166.3 (1.0)	56.0 (8.6)	45.0 (3.0)	54.8 (5.4)	101.8 (16.4)	37.2 (4.2)	50.5 (10.3)	8.2 (8.1)	57.2 (9.3)
	1	158.1 (3.3)	49.5 (7.7)	43.1 (4.1)	50.8 (8.2)	89.9 (21.6)	31.5 (5.7)	48.9 (8.9)	7.4 (7.3)	58.6 (8.2)
	全国	168.4 (6.5)	58.6 (9.4)	44.7 (5.3)	57.1 (7.5)	117.5 (26.1)	38.8 (6.5)	54.0 (9.4)	9.0 (7.2)	71.3 (13.1)
	全体	169.5 (7.6)	59.6 (10.2)	45.6 (3.9)	56.6 (7.6)	109.3 (23.6)	39.2 (5.4)	51.2 (9.8)	9.4 (8.1)	59.4 (8.5)
	3	178.3 (3.8)	67.1 (9.3)	46.6 (4.3)	59.2 (6.9)	112.4 (22.5)	40.8 (5.4)	53.0 (8.1)	9.3 (6.6)	59.9 (7.2)
H1 (1998)	2	168.8 (1.0)	58.5 (8.4)	45.5 (3.4)	56.2 (6.1)	110.0 (26.9)	39.5 (3.6)	50.2 (12.4)	11.8 (8.0)	58.7 (11.8)
	1	162.0 (2.4)	53.7 (7.8)	44.7 (3.7)	54.7 (8.7)	106.0 (23.2)	37.4 (6.0)	50.3 (9.4)	8.1 (9.4)	59.4 (7.6)
	全国	170.6 (6.0)	60.9 (8.9)	45.3 (5.3)	59.2 (7.6)	129.3 (27.1)	42.4 (7.0)	55.0 (9.3)	10.4 (7.5)	75.3 (13.6)
	全体	170.8 (7.1)	60.0 (8.9)	47.8 (3.8)	59.5 (6.3)	117.5 (23.0)	41.9 (5.7)	53.5 (9.7)	9.9 (7.6)	58.6 (10.5)
	3	178.9 (3.9)	66.9 (7.8)	48.1 (3.7)	60.5 (5.1)	122.6 (20.8)	43.9 (5.3)	55.1 (7.7)	10.1 (6.2)	62.3 (12.5)
	2	170.0 (1.2)	58.3 (7.5)	48.3 (2.6)	59.8 (4.1)	119.5 (23.4)	43.3 (4.0)	53.4 (11.1)	11.8 (8.8)	57.9 (11.4)
H2 (1999)	1	164.0 (2.5)	54.8 (8.5)	47.3 (4.5)	58.3 (8.3)	111.7 (24.4)	39.2 (6.2)	52.2 (10.6)	8.6 (8.1)	55.8 (6.6)
	全国	170.9 (5.6)	61.5 (8.1)	46.2 (5.6)	61.4 (7.9)	135.8 (29.2)	43.2 (6.6)	57.1 (8.7)	11.3 (7.3)	73.1 (14.5)
	全体	171.2 (6.8)	62.0 (9.1)	48.3 (3.7)	61.9 (7.0)	120.8 (24.9)	41.1 (5.7)	55.6 (9.3)	9.0 (7.9)	57.3 (9.1)
	3	178.9 (4.0)	69.5 (7.8)	49.7 (4.1)	61.7 (6.2)	124.6 (23.4)	42.2 (5.1)	56.4 (6.6)	9.7 (6.6)	60.3 (10.5)
	2	170.5 (1.2)	61.2 (6.9)	48.0 (3.1)	62.5 (4.4)	119.5 (19.8)	43.3 (4.7)	55.4 (11.0)	11.0 (7.5)	57.8 (10.8)
	1	164.8 (2.8)	55.8 (8.2)	47.3 (3.4)	61.6 (9.1)	118.2 (29.5)	38.7 (6.2)	55.0 (10.4)	7.1 (9.1)	54.2 (5.4)

上段は平均値、下段は標準偏差

N=51、「1」…20、「2」…13、「3」…18

今回、身長低群「1」の生徒の伸びが一番優れているという結果から、低身長だから不利ということのないような教育的配慮をして指導が可能となるよう今後も資料分析を継続していきたいと思う。また、発育・発達の過程にある生徒の身体的な有利・不利のない評価表を検討して、それを教育の場で活用出来るように取り組んでいきたいと考える。

今後中学・高校一貫教育校が多くなり、小学生の受験勉強による身体活動の減少に伴う子どものからだの変化が叫ばれる時¹⁰⁾、生徒の心（精神）身（肉体）の発育発達過程の測定継続をして生徒との関わりの一助になることを願っている。

〔参考文献〕

- 1) 小沢治夫(2002) 特集1子どもの体力低下、いまなにを考えるべきか 青少年の体力低下に体育教師は何をなすべきか. 体育科教育. 50(4): 28-31.
- 2) 音海紀一郎, 音海哲子, 青山昌二(1998) 男子中学生の体格及び体力診断テストの縦断的考察. CIRCULAR. 59: 187-193.
- 3) 音海紀一郎, 津久井さと子, 音海哲子, 青山昌二(1999) 体格・体力に関する12~15歳の縦断的一考察. 獨協中学・高等学校研究紀要17・18: 1-14.
- 4) 音海紀一郎, 白土祐二, 音海哲子(2000) 体格・体力テストの縦断的考察. 獨協中学・高等学校研究紀要19: 1-14.
- 5) 加藤勇之助, 合田浩二, 入江友生, 岡崎勝博, 小沢治夫(2001.11) 中・高一貫校のカリキュラム構成に関する基礎的研究—総集編— 報告集 第6集(改訂版). 筑波大学附属駒場中・高等学校: 163-171.
- 6) 杉原一昭(1999) 何が子どもを変えたか. 体育の科学49. 1: 4-8.
- 7) 杉原 隆(2000) I子どもの心とからだ 子どもの心とからだの発達と社会的反映. 体育科教育. 第48巻第1号. 1: 10-13.
- 8) 西嶋尚彦(2002) 青少年の体力低下傾向. 体育の科学52. 1: 4-14.
- 9) 宮下充正(2,000) 論説 子どもにサイエンスを教えるのも必要だが運動させるのはもっと大切. 体育の科学50. 9: 724-727.
- 10) 特集I子どもの「体力低下」—何が問題か(2,000) 体育科教育. 第48巻第14号. 10: 10-29.
- 11) 子どものからだと心・連絡会議(2001)「子どものからだと心白書2001」. 2001: 1-112.
- 12) 文部省体育局(1995~2,000) 体力・運動能力報告書.

比べて顕著である。(以降「1」・「2」・「3」とする)

体力テスト項目について、反復横とび(図3)は、「1」の伸びが各学年で一番劣っている。その一要因として身長差によるところが大きいと思われる。

垂直とび(図4)は、「1」の伸びは学年が進むにつれて「2」・「3」より大きく伸びを示している。

背筋力(図5)・握力(図6)の2項目も「1」の伸びは、他の「2」・「3」に比べて伸びが大きいことを示している。

柔軟性の伏臥上体そらし(図7)の伸びは、「3」より「1」の伸びが大きく、「2」の伸びが一番劣っている。立位体前屈(図8)は、学年が進むにつれて「3」が大きく伸び、「1」の伸びが一番劣っている。同じ柔軟性測定でも伸びの結果の異なることがわかった。

踏み台昇降運動(図9)は、中学1年値を100とした時、「1」の中学3年値と高校1年値が100を少し越しているが、「2」・「3」の区分は全て100を下回っている。

以上のことから、身長3区分による各学年間の伸びをみると、「1」の生徒の伸びが体格に影響するであろう反復横とびを除いた全ての項目で優れている。

立位体前屈は「3」・「2」に対し「1」の伸びの悪い要因は何か。今後調査検討を加える必要があると思われる。

<まとめ>

中学1年時から高校3年時までの、同一生徒を対象とした丸5ヶ年間の体格と体力テスト結果の経年的変化を資料分析した結果、次のようなことが明らかになった。

- ① 年度の体格と体力テスト結果を全国平均値と比較すると、体格は全国値並みに発育・発達しているといえよう。

体力テスト結果項目も同様に比較すると、中学1年時は入学受験の影響が大きく影響して全国値を下回っていると考えられる。在学期間中に全国値並みに体力を維持するが、高校3年時になると受験勉強の影響で、身体運動が減ることにより劣る項目が目立ってくる。

- ② 身長3区分のそれぞれの伸びをみると、体格の大小に影響のあると思われる反復横とびは、身長低群「1」の伸びが劣るが、他の項目では全て身長低群「1」の伸びが優れていることが分かった。

立位体前屈は、中学1年値から高校2年値まで獨協値は全国平均値並み（-0.8cm、-1.4cm、-0.9cm、+0.4cm、-0.5cm）で、高校3年値は全国平均値と比較して、獨協値は5%水準で有意に劣っている（-2.3cm）。

踏み台昇降運動は、中学1年値から高校3年値まで全国平均値と比較すると、獨協値は1%水準で有意に劣っている（-10.4、-12.9、-14.4、-11.9、-16.7、-15.8）。

体格と体力テスト結果を全国平均値と比較すると、体格の身長と体重は全国値と似かよった発育発達を示しているといえよう⁵⁾。

体力テスト結果は全身的筋力である背筋力と全身持久力である踏み台昇降運動の2項目は、中学1年値から高校3年値において、獨協値は1~5%水準で有意に劣っている。その他の項目は中学受験の影響で、中学1年値は劣っているが在学期間中に体力は全国平均値並みになる。また、高校3年値が全国平均値より劣る項目については、高校2年の2学期以降、受験勉強が増える事による身体運動の減少が劣る傾向の一要因として考えられる。

2) 身長3区分の伸び

図1から図9は、身長3区分した体格と体力テストの各学年、各項目がそれぞれどのような伸びを示したかを示している。

身長3区分の算出法は、身長の平均値・標準偏差から求めた。

身長高群（平均値+0.5標準偏差以上）…… 3

身長中群（平均値±0.5標準偏差）…………… 2

身長低群（平均値-0.5標準偏差未満）…… 1

各区分の人数は「3」18名 「2」13名 「1」20名である。

伸び率の算出法は、中学1年値を100とした。

$(\text{中学2年値} - \text{中学1年値}) \div \text{中学1年値} \times 100 + 100$ から求めた。

例えば「3」の身長の中学1年値から2年値でいえば、

$$(171.0 - 163.4) \div 163.4 \times 100 + 100 = 104.65$$

従って、中学1年値から中学2年値について、身長の伸びは4.65%を示したことになる。

このように、各項目の3区分の伸びを比較すると、体格の身長（図1）では身長低群「1」が各学年で一番伸びが大きい。同様に体重（図2）も身長と同じことが言える。特に身長低群「1」の高校1年値から高校3年値の体重の伸びが、身長に

<結果と考察>

1) 全国平均値との比較

対象者51名の中学1年時から高校3年時までの体格と体力テスト結果については表1に示した。

体格の身長と体重の2項目について、全国平均値¹²⁾と比較すると、本校値（以下獨協値とする）の身長平均値は、中学1年値-0.4cm、中学2年値+0.1cm、中学3年値+1.0cm、高校1年値+1.1cm、高校2年値+0.2cm、高校3年値+0.3cmである。中学3年値から高校1年値にかけて、全国平均値より1.0~1.1cmとこの年代に一番伸びが大きいことを示している。

同様に、体重も中学1年値から高校3年値までを比較すると、+0.4kg、+2.4kg、+1.7kg、+1.0kg、-0.9kg、+0.5kgで、高校2年値を除く他の学年で全国平均値を上回っていることを示している。

身長、体重2項目を全国平均値と比較した結果、獨協値の方が数値的にはやや上回っているが、その差は有意と認められなかった。という事は、獨協生は身長、体重ともに全国的レベルにあるといえよう。

体力テスト7項目について、全国平均値¹²⁾と比較すると、反復横とびは、中学2年値のその差-2.3点は1%水準で獨協値が有意に劣っているが、中学3年値、高校1年値で全国レベルに達し、高校2年値、3年値で+2.5点、+2.1点と1%水準で獨協値が有意に優れている。

垂直とびは、学年が進むに従って、全国平均値レベルに達してくる（-0.6cm、-1.9cm、-1.7cm、-0.5cm、+0.3cm、+0.5cm）。

背筋力は、中学1年値から高校3年値の全てにおいて、全国平均値より獨協値は1~5%水準で有意に劣っている（-19.7kg、-24.5kg、-18.1kg、-8.2kg、-11.8kg、-15.0kg）。

握力は、中学1年値、2年値は全国平均値より獨協値は5%水準で有意に劣っている（-2.1kg、-2.3kg）。中学3年値から高校2年値は全国平均値近くまで回復（-0.6kg、+0.4kg、-0.3kg）し、高校3年値において再び5%水準で獨協値の方が有意に劣る（-2.1kg）。

伏臥上体そらしは、中学1年値から高校1年値まで全国平均値と比較すると、獨協値は1~5%水準で有意に劣っているが（-4.6cm、-5.7cm、-3.3cm、-2.8cm）、高校2年値、3年値においては、全国平均値近くまで回復（-1.5cm、-1.5cm）する。

身長3区分にみる体格・体力テストの縦断的研究

音 海 紀一郎 (獨協中学・高等学校)

白 土 祐 二 (獨協中学・高等学校)

音 海 哲 子 (相模女子大学)

<目 的>

青少年の体力低下が文部科学省の統計的報告をはじめ、さまざまな研究から明らかになっている^{1,6,7,8,9,10)}。本校生徒においても、体格は年々向上したものの、体力は低下していることが実感される^{2,3,4)}。近年走・跳・投の基本的な動作が満足に出来ない生徒が保健体育教師はもとより、他教科の教師からも指摘されている。現に昼休み・放課後の生徒たちの実態をみると、グラウンド・中庭で活動的にボールゲームに熱中する生徒がいる反面、図書館やパソコンルームで静かに過ごす生徒もいる。このように生徒の自由時間の過ごし方が二極化している。この延長として全体的に体力低下がうかがえるのではないだろうか。

本研究は、中学・高校一貫教育の中で発育期にあり心身ともに大きく成長していく生徒の運動・健康への理解を高め、生き生きとした学校生活を過ごす手助けとなることを目的としている。そして本研究では、中学入学後、生徒の体格と体力の変化を継続して測定し、体格のうち身長により生徒を3区分に分け、各区分でどのような成長過程がみられるか分析を試みた。その結果が今後保健体育科における生徒指導に反映され、その指導に対する新たな方法を見いだすための参考になればと思う。

<方 法>

対象者は平成7年度(1995)獨協中学校入学生180名のうち、中学1年時から高校3年時までの丸5ヶ年間の体格と体力テスト結果の欠測値のない126名。その126名の各年度における身長の平均値から、身長3区分して中学入学時から高校3年時までに、同一区分に該当する51名を本分析の対象者とした。

分析にあたり、身長、体重、背筋力、握力は春季健康診断時の記録を用いた。

体力テスト項目は、体育授業および昼休み、放課後等実施要項に従い実施した。

－ 執 筆 者 紹 介 －

木 村 重 利 国 語 科 教 諭
音 海 紀 一 郎 保 健 体 育 科 教 諭

紀 要 委 員

兼 田 信 一 郎 新 井 洋 一
音 海 紀 一 郎 富 岡 卓

研究紀要 第20号

平成14年3月20日 発行

発行者 東京都文京区関口3丁目8番1号

獨協中学・高等学校 紀要委員会

印刷所 東京都北区王子本町2丁目5番4号

株式会社 王 文 社

Dokkyo Junior & Senior High School Review

No. 20

2 0 0 1

Contents

Articles :

Songs of the Sea & Songs of the Land

Folk Lyrics : Tradition & Discovery Shigetoshi Kimura ... 1

The longitudinal study of physique & physical fitness test
as related to three height stages of adolescent boys

..... Kiichiro Otomi ... (1)

Dr. Teiyu Amano's Bibliography (Draft) (11)

Edited by

Dokkyo Junior & Senior High School Review Committee

Address : Dokkyo Junior & Senior High School

3-8-1, Sekiguchi, Bunkyo-ku, Tokyo 112-0014